

# 多体系の量子力学

LouiS\*

2024/06/06

---

\* <https://pr440.github.io>

# 目次

第 1 章	量子多体系の記述	5
1.1	同種粒子の不可弁別性	5
1.2	生成消滅演算子	7
1.3	量子多体系のダイナミクス	9
1.3.1	多粒子系の 1 体演算子	9
1.3.2	演算子の時間発展	11
1.3.3	2 体演算子	13
1.3.4	量子状態の変換則 I : 並進・回転変換	14
1.3.5	スピン	16
1.3.6	量子状態の変換則 II : 離散変換	18
1.4	熱力学極限での多体量子状態	18
1.4.1	正準典型性と熱力学ポテンシャルの微視的表式	18
1.4.2	アンサンブル形式による熱平衡状態の表現	19
1.4.3	密度行列によるアンサンブル形式の表現	21
1.4.4	同種粒子系の統計性	24
1.4.5	熱的純粋量子状態による熱平衡状態の表現	25
1.4.6	熱ゆらぎと非平衡過程	25
1.5	経路積分	25
1.5.1	1 粒子系の経路積分 (導入)	25
1.5.2	Bose 粒子系の経路積分	29
1.5.3	Fermi 粒子系の経路積分	31
1.5.4	スピン系の経路積分	34
第 2 章	量子多体系の解析手法	35
2.1	Rayleigh-Schrödinger の摂動論	35
2.2	時間に依存する摂動論	36
2.2.1	相互作用描像	36
2.2.2	Fermi の黄金律	37
2.2.3	調和摂動	39
2.3	線形応答理論	40
2.3.1	応答関数	40
2.3.2	量子系の線形応答と Green-久保の公式	41
2.3.3	Onsager の相反定理	43
2.4	位相幾何・多様体論的な解析手法	43
2.4.1	Berry 接続・曲率	43
2.4.2	幾何学的位相と物理量	44

2.4.3	Chern の定理	45
2.4.4	断熱変化における幾何学的位相	45
2.5	Green 関数の方法	45
2.5.1	実時間 Green 関数	46
2.5.2	物理量の相関関数と実時間 Green 関数	51
2.5.3	因果 Green 関数による摂動展開	51
2.5.4	温度 Green 関数	61
2.5.5	Keldysh の Green 関数	65
2.6	スケーリング理論・くりこみ群	65
2.7	Floquet 理論	65
2.8	行列積状態・テンソルネットワーク状態	65
第 3 章	量子多体系としての固体結晶 I : バンド描像での電子相関	66
3.1	固体電子の 1 粒子状態とバンド描像	66
3.1.1	Bloch 状態	66
3.1.2	Wannier 状態	69
3.2	電子間の Coulomb 相互作用	70
3.3	相互作用の遮蔽	70
第 4 章	量子多体系としての固体結晶 II : BCS 理論	71
付録 A	1 粒子系の量子力学	72
A.1	角運動量代数	72
A.1.1	一般化角運動量の代数	72
A.1.2	角運動量の合成	73
A.2	Bloch の定理	74
A.3	Aharonov-Bohm 効果	74
付録 B	場の古典論	75
B.1	場の解析力学	75
B.1.1	Lagrange 形式	75
B.1.2	Hamilton 形式	76
B.1.3	複素場の解析力学	76
B.1.4	Noether カレント	78
B.2	相対論的な場とその非相対論極限	80
B.2.1	Klein-Gordon 場	81
B.2.2	Dirac 場	81
B.2.3	電磁場	81
B.3	ゲージ理論	81
B.4	物質中の電磁場	82
B.5	Ginzburg-Landau 理論	82
付録 C	数学の補足	83
C.1	複素解析の基礎	83
C.2	Fourier 変換	83

C.2.1	Fourier 級数展開	83
C.2.2	Fourier 変換	83
C.2.3	離散 Fourier 変換	84
C.3	Baker-Campbell-Hausdorff の公式・Trotter 積公式	85
C.4	多様体・トポロジーの基礎	85
C.5	キュムラント展開	85
C.6	特異値分解	85
C.7	汎関数解析	85

# 第 1 章 量子多体系の記述

1 粒子の量子力学についての知識をもとに、多粒子系の量子力学的な取り扱いの基礎を構築していく。

## 1.1 同種粒子の不可弁別性

1 粒子状態  $|\psi_i\rangle$  を持つ粒子が  $i = 1, 2, \dots, N$  まで存在するとき、これら  $N$  粒子全体の量子状態は、各粒子が識別可能な別種の粒子である場合には、

$$|\psi\rangle \equiv |\psi_1\rangle |\psi_2\rangle \cdots |\psi_N\rangle$$

と通常のテンソル積で表せばよいが、識別不可能な同種粒子である場合にはそのようなテンソル積の状態に粒子を入れ替えてできるテンソル積の状態も等確率で重ね合わせた状態

$$|\psi\rangle = |\psi_1, \psi_2, \dots, \psi_N\rangle \equiv \frac{1}{\sqrt{N!}} \sum_P \zeta^P |\psi_{P(1)}\rangle |\psi_{P(2)}\rangle \cdots |\psi_{P(N)}\rangle \quad (1.1.1)$$

で表されるべきである。ここで  $P$  は  $\{1, 2, \dots, N\}$  に対する置換を表し、総和は可能な全ての置換  $P$  に対しとっている。同じ粒子の組を 2 回入れ替えたときには状態が戻るように、 $\zeta = \pm 1$  に対し、

$$\zeta^P = \begin{cases} \zeta & (P \text{ が奇置換}) \\ 1 & (P \text{ が偶置換}) \end{cases}$$

となる。 $\zeta = +1$  であるような粒子を Bose 粒子 (ボソン)、 $\zeta = -1$  であるような粒子のことを Fermi 粒子 (フェルミオン) という<sup>1)</sup>。定義から、

$$|\psi_{P(1)}, \psi_{P(2)}, \dots, \psi_{P(N)}\rangle = \zeta^P |\psi_1, \psi_2, \dots, \psi_N\rangle$$

となっており、特に Fermi 粒子は 1 粒子状態の並べ方によっては同じ状態の組の多粒子系でも全体の状態の符号が反転しうることに注意する。

Fermi 粒子については  $N$  粒子の中に同じ状態を持つものがあると、その間に入れ替えてできるテンソル積が元のテンソル積と打ち消し合うため、得られる粒子系全体の状態ベクトルが 0 となってしまう。すなわち、Fermi 粒子系では 2 つ以上の粒子が同じ状態をとることが許されない。これを Pauli の排他原理という。

---

1) 上の  $\zeta^P$  の定義は  $\zeta = \pm 1$  のときのみである。 $|\zeta| = 1$  を満たす範囲で  $\zeta$  は複素数に拡張すると、 $\zeta^P$  は置換  $P$  を互換の積に直したときの積の個数だけ  $\zeta$  の冪乗をとることで与えられる。 $\zeta \neq \pm 1$  であるような粒子はエニオンと呼ばれる。

(1.1.1) で定義された多体量子状態に対し、同種  $N$  粒子の量子状態との内積は、

$$\begin{aligned}\langle\phi|\psi\rangle &= \langle\phi_1, \phi_2, \dots, \phi_N|\psi_1, \psi_2, \dots, \psi_N\rangle \\ &= \frac{1}{N!} \sum_{P,Q} \zeta^P \zeta^Q \langle\phi_{P(1)}|\psi_{Q(1)}\rangle \langle\phi_{P(2)}|\psi_{Q(2)}\rangle \cdots \langle\phi_{P(N)}|\psi_{Q(N)}\rangle \\ &= \sum_R \zeta^R \langle\phi_1|\psi_{R(1)}\rangle \langle\phi_2|\psi_{R(2)}\rangle \cdots \langle\phi_N|\psi_{R(N)}\rangle\end{aligned}$$

で与えられる。ここで、 $P, Q, R$  は  $\{1, 2, \dots, N\}$  に対する置換を表し、 $R = P^{-1} \circ Q$  である。総和は全て可能な置換  $P, Q, R$  に対しとっている。特に、 $\zeta = -1$  の Fermi 粒子系の場合、この内積は、

$$\langle\phi|\psi\rangle = \begin{vmatrix} \langle\phi_1|\psi_1\rangle & \langle\phi_1|\psi_2\rangle & \cdots & \langle\phi_1|\psi_N\rangle \\ \langle\phi_2|\psi_1\rangle & \langle\phi_2|\psi_2\rangle & \cdots & \langle\phi_2|\psi_N\rangle \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ \langle\phi_N|\psi_1\rangle & \langle\phi_N|\psi_2\rangle & \cdots & \langle\phi_N|\psi_N\rangle \end{vmatrix}$$

というように行列式で表される。また、同様にしてケット-ブラの積も

$$|\phi\rangle\langle\psi| = \sum_P \zeta^P (|\phi_1\rangle\langle\psi_{P(1)}|) \otimes (|\phi_2\rangle\langle\psi_{P(2)}|) \otimes \cdots \otimes (|\phi_N\rangle\langle\psi_{P(N)}|)$$

で与えられることがわかる。

正規直交系をなす 1 粒子状態の正規直交系  $\{|\alpha_i\rangle\}$  を用意すると、

$$\begin{aligned}\frac{1}{N!} \sum_{i_1, i_2, \dots, i_N} |\alpha_{i_1}, \alpha_{i_2}, \dots, \alpha_{i_N}\rangle \langle\alpha_{i_1}, \alpha_{i_2}, \dots, \alpha_{i_N}| \\ &= \frac{1}{N!} \sum_{i_1, i_2, \dots, i_N} \sum_P \zeta^P (|\alpha_{i_1}\rangle\langle\alpha_{i_{P(1)}}|) \otimes (|\alpha_{i_2}\rangle\langle\alpha_{i_{P(2)}}|) \otimes \cdots \otimes (|\alpha_{i_N}\rangle\langle\alpha_{i_{P(N)}}|) \\ &= \frac{1}{N!} \sum_{i_1, i_2, \dots, i_N} \sum_P \zeta^P (|\alpha_{i_{P(1)}}\rangle\langle\alpha_{i_1}|) \otimes (|\alpha_{i_{P(2)}}\rangle\langle\alpha_{i_2}|) \otimes \cdots \otimes (|\alpha_{i_{P(N)}}\rangle\langle\alpha_{i_N}|)\end{aligned}$$

に対して、 $|\alpha_{j_1}, \alpha_{j_2}, \dots, \alpha_{j_N}\rangle$  を右から作用させると、

$$\begin{aligned}\left[ \frac{1}{N!} \sum_{i_1, i_2, \dots, i_N} \sum_P \zeta^P (|\alpha_{i_{P(1)}}\rangle\langle\alpha_{i_1}|) \otimes (|\alpha_{i_{P(2)}}\rangle\langle\alpha_{i_2}|) \otimes \cdots \otimes (|\alpha_{i_{P(N)}}\rangle\langle\alpha_{i_N}|) \right] |\alpha_{j_1}, \alpha_{j_2}, \dots, \alpha_{j_N}\rangle \\ &= \left( \frac{1}{N!} \right)^{3/2} \sum_{i_1, i_2, \dots, i_N} \sum_{P,Q} \zeta^P \zeta^Q |\alpha_{i_{P(1)}}\rangle |\alpha_{i_{P(2)}}\rangle \cdots |\alpha_{i_{P(N)}}\rangle \\ &\quad \times \langle\alpha_{i_1}|\alpha_{j_{Q(1)}}\rangle \langle\alpha_{i_2}|\alpha_{j_{Q(2)}}\rangle \cdots \langle\alpha_{i_N}|\alpha_{j_{Q(N)}}\rangle \\ &= \left( \frac{1}{N!} \right)^{3/2} \sum_{P,Q} \zeta^P \zeta^Q |\alpha_{j_{Q \circ P(1)}}\rangle |\alpha_{j_{Q \circ P(2)}}\rangle \cdots |\alpha_{j_{Q \circ P(N)}}\rangle \\ &= \frac{1}{\sqrt{N!}} \sum_R \zeta^R |\alpha_{j_{R(1)}}\rangle |\alpha_{j_{R(2)}}\rangle \cdots |\alpha_{j_{R(N)}}\rangle = |\alpha_{j_1}, \alpha_{j_2}, \dots, \alpha_{j_N}\rangle\end{aligned}$$

となることから、完全性関係

$$\frac{1}{N!} \sum_{i_1, i_2, \dots, i_N} |\alpha_{i_1}, \alpha_{i_2}, \dots, \alpha_{i_N}\rangle \langle\alpha_{i_1}, \alpha_{i_2}, \dots, \alpha_{i_N}| = \hat{I}^{(N)} \quad (1.1.2)$$

が導かれる ( $\hat{I}^{(N)}$  は  $N$  粒子状態に対する恒等演算子)。 $\{|\alpha_{i_1}, \alpha_{i_2}, \dots, \alpha_{i_N}\rangle\}$  は、Fermi 粒子の場合には  $i_1 < i_2 < \dots < i_N$  の条件<sup>2)</sup>のもとで正規直交系をなす一方、Bose 粒子の場合には  $i_1 \leq i_2 \leq \dots \leq i_N$  の条件を課しても直交系は成すが正規化は満たされない。実際に、1 粒子状態  $|\alpha_i\rangle$  を持つ粒子が  $n_i$  個ある  $N$  粒子系の状態のノルムは

$$\langle \alpha_1, \dots, \alpha_1, \alpha_2, \dots, \alpha_1, \alpha_2, \dots | \alpha_1, \dots, \alpha_1, \alpha_2, \dots \rangle = \prod_i (n_i)!$$

となることが導かれる。

以上で議論してきた  $N$  粒子状態を  $N = 0$  の場合でも考えておくと、粒子がないという状態は (位相の不定性を除いて) 1 つしかない。それを  $|0\rangle$  とおき ( $\langle 0|0\rangle = 1$  とする)、真空状態と呼ぶ。

1 粒子系の量子力学において状態は Hilbert 空間  $\mathfrak{h}$  の元であった<sup>3)</sup>。それに対して、 $N$  粒子系の状態は 1 粒子状態の Hilbert 空間のテンソル積  $\mathfrak{h}^{\otimes N}$  の元となる。多体系の量子状態はその  $N$  に対する直和の元となるが、この空間は Fock 空間と呼ばれる。

## 1.2 生成消滅演算子

$N$  粒子系の量子状態  $|\psi_1, \psi_2, \dots, \psi_N\rangle$  と、それに 1 粒子状態  $|\phi\rangle$  の粒子を加え入れた  $(N + 1)$  粒子系の量子状態  $|\psi_1, \psi_2, \dots, \psi_N, \phi\rangle$  に対し、次のような作用をもつ演算子  $\hat{a}^\dagger(\phi)$  を考える。

$$\hat{a}^\dagger(\phi) |\psi_1, \psi_2, \dots, \psi_N\rangle = |\phi, \psi_1, \psi_2, \dots, \psi_N\rangle$$

$(N + 1)$  粒子系の量子状態  $|\chi_1, \chi_2, \dots, \chi_{N+1}\rangle$  と上式の両辺との内積をとり、複素共役をとると、

$$\begin{aligned} \langle \psi_1, \psi_2, \dots, \psi_N | \hat{a}(\phi) | \chi_1, \chi_2, \dots, \chi_{N+1} \rangle &= \langle \phi, \psi_1, \psi_2, \dots, \psi_N | \chi_1, \chi_2, \dots, \chi_{N+1} \rangle \\ &= \sum_P \zeta^P \langle \phi | \chi_{P(1)} \rangle \langle \psi_1 | \chi_{P(2)} \rangle \langle \psi_2 | \chi_{P(3)} \rangle \cdots \langle \psi_N | \chi_{P(N+1)} \rangle \\ &= \sum_k \zeta^{k-1} \langle \phi | \chi_k \rangle \sum_Q \zeta^Q \langle \psi_1 | \chi_{Q(1)} \rangle \langle \psi_2 | \chi_{Q(2)} \rangle \cdots \langle \psi_N | \chi_{Q(N)} \rangle \\ &= \sum_k \zeta^{k-1} \langle \phi | \chi_k \rangle \langle \psi_1, \psi_2, \dots, \psi_N | \chi_1, \chi_2, \dots, \chi_{k-1}, \chi_{k+1}, \dots, \chi_{N+1} \rangle \end{aligned}$$

となる ( $P$  は  $\{1, 2, \dots, N\}$  の置換、 $Q$  は  $\{1, 2, \dots, k-1, k+1, \dots, N\}$  の置換) ことから、 $\hat{a}(\phi)$  の作用が

$$\hat{a}(\phi) |\psi_1, \psi_2, \dots, \psi_N\rangle = \sum_k \zeta^{k-1} \langle \phi | \chi_k \rangle |\psi_1, \psi_2, \dots, \psi_{k-1}, \psi_{k+1}, \dots, \psi_N\rangle$$

と表せることがわかる。ここで右辺は全ての  $|\chi_i\rangle$  で  $\langle \phi | \chi_i \rangle = 0$  である場合は 0 に、それ以外の場合は  $(N - 1)$  粒子系の量子状態になっていることに注意する。

このようにして系に粒子を追加・減少させる演算子  $\hat{a}^\dagger(\phi), \hat{a}(\phi)$  を構成できた。これらの演算子

2) ある 1 粒子状態の組で表される多体状態が一意に定まるように状態のとり方を制限している。Bose 粒子での条件も同じ。

3) 「1 粒子状態の完全系」は  $\mathfrak{h}$  を張る状態の集合の意味で用いている。以降も同様。

を生成消滅演算子という。

$$\begin{aligned}\hat{a}(\phi_1)\hat{a}^\dagger(\phi_2)|\psi_1, \psi_2, \dots, \psi_N\rangle &= \langle\phi_1|\phi_2\rangle|\psi_1, \psi_2, \dots, \psi_N\rangle \\ &\quad + \sum_k \zeta^k \langle\phi_1|\chi_k\rangle|\phi_2, \psi_1, \psi_2, \dots, \psi_{k-1}, \chi_{k+1} \dots, \psi_N\rangle \\ \hat{a}^\dagger(\phi_2)\hat{a}(\phi_1)|\psi_1, \psi_2, \dots, \psi_N\rangle &= \sum_k \zeta^{k-1} \langle\phi_1|\chi_k\rangle|\psi_1, \psi_2, \dots, \psi_{k-1}, \chi_{k+1} \dots, \psi_N, \phi_2\rangle\end{aligned}$$

となることから、

$$[\hat{a}(\phi_1), \hat{a}^\dagger(\phi_2)]_{-\zeta} \equiv \hat{a}(\phi_1)\hat{a}^\dagger(\phi_2) - \zeta\hat{a}^\dagger(\phi_2)\hat{a}(\phi_1) = \langle\phi_1|\phi_2\rangle$$

が成り立つことがわかる。 $[\hat{A}, \hat{B}]_{-\zeta}$  は  $\zeta = +1$  の Bose 粒子のときには交換子  $[\hat{A}, \hat{B}]$ 、 $\zeta = -1$  の Fermi 粒子のときは反交換子  $\{\hat{A}, \hat{B}\}$  である。生成演算子同士、消滅演算子同士の交換・反交換子は、

$$\begin{aligned}\hat{a}^\dagger(\phi_1)\hat{a}^\dagger(\phi_2)|\phi_1, \phi_2, \psi_1, \psi_2, \dots, \psi_N\rangle &= |\psi_1, \psi_2, \dots, \psi_{k-1}, \chi_{k+1} \dots, \psi_N\rangle \\ &= \zeta|\phi_2, \phi_1\psi_1, \psi_2, \dots, \psi_{k-1}, \chi_{k+1} \dots, \psi_N\rangle \\ &= \zeta\hat{a}^\dagger(\phi_2)\hat{a}^\dagger(\phi_1)|\psi_1, \psi_2, \dots, \psi_N\rangle\end{aligned}$$

および

$$\begin{aligned}\hat{a}(\phi_1)\hat{a}(\phi_2)|\psi_1, \psi_2, \dots, \psi_N\rangle &= \sum_{k < l} \zeta^{k-1} \zeta^{l-1} \langle\phi_1|\chi_k\rangle \langle\phi_2|\chi_l\rangle |\psi_1, \psi_2, \dots, (\psi_k, \psi_l \text{ のみなし}) \dots, \psi_N\rangle \\ &\quad + \sum_{k > l} \zeta^{k-2} \zeta^{l-1} \langle\phi_1|\chi_k\rangle \langle\phi_2|\chi_l\rangle |\psi_1, \psi_2, \dots, (\psi_k, \psi_l \text{ のみなし}) \dots, \psi_N\rangle \\ &= \zeta \sum_{k > l} \zeta^{k-1} \zeta^{l-1} \langle\phi_2|\chi_l\rangle \langle\phi_1|\chi_k\rangle |\psi_1, \psi_2, \dots, (\psi_k, \psi_l \text{ のみなし}) \dots, \psi_N\rangle \\ &\quad + \zeta \sum_{k < l} \zeta^{k-2} \zeta^{l-1} \langle\phi_2|\chi_l\rangle \langle\phi_1|\chi_k\rangle |\psi_1, \psi_2, \dots, (\psi_k, \psi_l \text{ のみなし}) \dots, \psi_N\rangle \\ &= \zeta\hat{a}(\phi_1)\hat{a}(\phi_2)|\psi_1, \psi_2, \dots, \psi_N\rangle\end{aligned}$$

より、

$$[\hat{a}(\phi_1), \hat{a}(\phi_2)]_{-\zeta} = 0, \quad [\hat{a}^\dagger(\phi_1), \hat{a}^\dagger(\phi_2)]_{-\zeta} = 0$$

となる<sup>4)</sup>。

前節の正規直交系をなす 1 粒子状態の完全系  $\{|\alpha_i\rangle\}$  を再び用いる。 $\hat{a}(\alpha_i) = \hat{a}_i$  と表すことにすると、

$$\begin{aligned}\hat{a}_i^\dagger \hat{a}_i |\alpha_{i_1}, \alpha_{i_2}, \dots, \alpha_{i_N}\rangle &= \sum_k \zeta^{k-1} \langle\alpha_i|\alpha_{i_k}\rangle |\alpha_i, \alpha_{i_1}, \alpha_{i_2}, \dots, \alpha_{i_{k-1}}, \alpha_{i_{k+1}} \dots, \alpha_{i_N}\rangle \\ &= \sum_k \langle\alpha_i|\alpha_{i_k}\rangle |\alpha_{i_1}, \alpha_{i_2}, \dots, \alpha_{i_{k-1}}, \alpha_i, \alpha_{i_{k+1}} \dots, \alpha_{i_N}\rangle \\ &= n_i |\alpha_{i_1}, \alpha_{i_2}, \dots, \alpha_{i_{k-1}}, \alpha_{i_k} \alpha_{i_{k+1}} \dots, \alpha_{i_N}\rangle\end{aligned}$$

---

4) ここで、前節で見た Fermi 粒子系の多粒子状態が 1 粒子状態の並べ方で符号を反転させうることを再考すると、Fermi 粒子系は生成演算子の並べ方についての情報を状態の符号という形で有していることがわかる。



となり、 $\hat{n}_i \equiv \hat{a}_i^\dagger \hat{a}_i$  に対して  $|\alpha_{i_1}, \alpha_{i_2}, \dots, \alpha_{i_N}\rangle$  は固有値  $n_i$  の固有状態となることがわかる。また、 $n_i$  は  $|\alpha_{i_1}, \alpha_{i_2}, \dots, \alpha_{i_N}\rangle$  に含まれる 1 粒子状態  $|\alpha_i\rangle$  の粒子数である。すなわち、 $\hat{n}_i$  の固有値は Bose 粒子系では  $n_i = 0, 1, 2, \dots$  に、Fermi 粒子系では  $n_i = 0, 1$  に限られる。1 粒子状態の直交系に対応した  $\hat{n}_i$  の組があれば、

$$\hat{N} = \sum_i \hat{n}_i$$

は系の総粒子数を与える演算子になることもわかる。

生成消滅演算子の導入により、異なる粒子数状態の間での内積が必ず 0 になることが示される。なぜなら、任意の多粒子系に量子状態は存在する粒子の 1 粒子状態の数だけ生成演算子を真空に作用させることで得られるため、粒子数の違う状態間での内積は生成演算子と消滅演算子の数がつりあわず、交換関係・反交換関係を用いることで消滅演算子が真空ケットベクトルに、あるいは生成演算子が真空ブラベクトルに作用するように変形することができて、そのような項は 0 になるからである。また、 $N$  粒子状態空間上での完全性関係が (1.1.2) で与えられたことから、Fock 空間全体での恒等演算子  $\hat{I}$  を与える完全性関係が

$$\hat{I} = \sum_{N=0}^{\infty} \frac{1}{N!} \sum_{i_1, i_2, \dots, i_N} \hat{a}_{i_1}^\dagger \hat{a}_{i_2}^\dagger \cdots \hat{a}_{i_N}^\dagger \hat{a}_{i_N} \cdots \hat{a}_{i_2} \hat{a}_{i_1}$$

で与えられることもわかる。

## 1.3 量子多体系のダイナミクス

真空  $|0\rangle$  に生成演算子  $\hat{a}^\dagger(\psi)$  を 1 つ作用させてできる状態  $|\psi\rangle \equiv \hat{a}^\dagger(\psi)|0\rangle$  は 1 粒子状態そのものである。Schrödinger 方程式

$$i\hbar \frac{d}{dt} |\psi\rangle = \hat{H}^{(1)} |\psi\rangle \quad (1.3.1)$$

を満たす。 $\hat{H}^{(1)}$  のエネルギー固有値  $E_i$  に対する固有状態  $|i\rangle$  について生成消滅演算子  $\hat{a}_i^\dagger, \hat{a}_i$  を作ると、

$$\hat{H} = \sum_i E_i \hat{a}_i^\dagger \hat{a}_i$$

とおけば Schrödinger 方程式 (1.3.1) および 1 粒子系の量子力学での記述が保たれる。Schrödinger 方程式 (1.3.1) は多粒子系の状態  $|\psi\rangle$  についても成り立ち、このハミルトニアンはそのまま、相互作用のない多粒子系のハミルトニアンとして用いることができる。

### 1.3.1 多粒子系の 1 体演算子

一般に、1 粒子系の量子力学で定義された 1 体演算子  $\hat{A}^{(1)}$  は、正規直交系をなす 1 粒子状態の完全系  $\{|\alpha_i\rangle\}$  を用いて、

$$\hat{A}^{(1)} = \sum_{i,j} |\alpha_i\rangle \langle \alpha_i| \hat{A}^{(1)} |\alpha_j\rangle \langle \alpha_j| = \sum_{i,j} \langle \alpha_i| \hat{A}^{(1)} |\alpha_j\rangle |\alpha_i\rangle \langle \alpha_j|$$

と表せた。これも、 $|\alpha_i\rangle$  に対応する生成消滅演算子  $\hat{a}^\dagger(\alpha_i), \hat{a}(\alpha_i)$  を用いて、

$$\hat{A} = \sum_{i,j} \langle \alpha_i| \hat{A}^{(1)} |\alpha_j\rangle \hat{a}^\dagger(\alpha_i) \hat{a}(\alpha_j)$$

とすることで多粒子系に定義を拡張して用いることができる。固有状態の全体は直交系かつ完全系であるので、先のハミルトニアンが多粒子系へ拡張した定義も上式を満たしている。

まず、1 粒子の位置演算子  $\hat{x}$  と運動量演算子  $\hat{p}$  を多粒子系に拡張する。 $\hat{x}$  と  $\hat{p}$  の間の正準交換関係

$$[\hat{x}_i, \hat{p}_j] = i\hbar\delta_{ij}$$

に由来して、 $\hat{x}$  の固有値  $x$  の 1 粒子固有状態  $|x\rangle$  と  $\hat{p}$  の固有値  $p$  の 1 粒子固有状態  $|p\rangle$  の間には、

$$\langle x|p\rangle = \frac{1}{\sqrt{V}}e^{i\mathbf{p}\cdot\mathbf{x}/\hbar}$$

が成り立っていた。ここで  $V$  は系の体積であり、 $V^{-1/2}$  の因子は、 $|x\rangle$  の完全性関係

$$\int_V d^3x |x\rangle\langle x| = \hat{I} \quad (1.3.2)$$

に基づき、規格化条件

$$\langle p|p'\rangle = \delta_{pp'}$$

により定まる。また、 $p$  は系の周期境界条件<sup>5)</sup>により

$$\mathbf{p} = \left( \frac{2\pi\hbar}{L}n_1, \frac{2\pi\hbar}{L}n_2, \frac{2\pi\hbar}{L}n_3 \right) \quad (n_1, n_2, n_3 \in \mathbb{Z}, L \equiv V^{1/3})$$

という離散値に制限されている (詳しくは付録 A 参照)。これらの結果から、Fourier 級数展開

$$|p\rangle = \int_V d^3x |x\rangle\langle x|p\rangle = \frac{1}{\sqrt{V}} \int_V d^3x e^{i\mathbf{p}\cdot\mathbf{x}/\hbar} |x\rangle, \quad |x\rangle = \frac{1}{\sqrt{V}} \sum_{\mathbf{p}} e^{-i\mathbf{p}\cdot\mathbf{x}/\hbar} |p\rangle \quad (1.3.3)$$

が成り立つので、 $\hat{p}$  の作用が

$$\hat{p}|x\rangle = \frac{1}{\sqrt{V}} \sum_{\mathbf{p}} e^{-i\mathbf{p}\cdot\mathbf{x}/\hbar} \mathbf{p} |p\rangle = -\frac{\hbar}{i} \frac{1}{\sqrt{V}} \sum_{\mathbf{p}} \nabla e^{-i\mathbf{p}\cdot\mathbf{x}/\hbar} |p\rangle = -\frac{\hbar}{i} \nabla |x\rangle$$

と表され、完全性関係 (1.3.2) により  $\hat{p}$  自体は

$$\hat{p} = \int_V d^3x \hat{p} |x\rangle\langle x| = \int_V d^3x \left( -\frac{\hbar}{i} \nabla |x\rangle \right) \langle x| = \int_V d^3x |x\rangle \left( \frac{\hbar}{i} \nabla \langle x| \right)$$

と表されることがわかる。また、同じく完全性関係から

$$\hat{x} = \int_V d^3x x |x\rangle\langle x|$$

と表されることもわかる。以上の 1 粒子系の量子力学の結果は、1 粒子状態  $|x\rangle$  に対応する生成消滅演算子  $\hat{\Psi}^\dagger(x), \hat{\Psi}(x)$  を用いて多粒子系に拡張されて、

$$\hat{x} = \int_V d^3x x \hat{\Psi}^\dagger(x) \hat{\Psi}(x), \quad \hat{p} = \int_V d^3x \hat{\Psi}^\dagger(x) \frac{\hbar}{i} \nabla \hat{\Psi}(x) \quad (1.3.4)$$

となる。なお、(1.3.3) からすぐわかるように、 $|p\rangle$  に対応する生成消滅演算子  $\hat{a}_p, \hat{a}_p^\dagger$  と  $\hat{\Psi}(x), \hat{\Psi}^\dagger(x)$  は次の関係を満たす。

$$\begin{aligned} \hat{a}_p &= \frac{1}{\sqrt{V}} \int d^3x e^{-i\mathbf{p}\cdot\mathbf{x}/\hbar} \hat{\Psi}(x), & \hat{\Psi}(x) &= \frac{1}{\sqrt{V}} \sum_{\mathbf{p}} e^{i\mathbf{p}\cdot\mathbf{x}/\hbar} \hat{a}_p \\ \hat{a}_p^\dagger &= \int d^3x e^{i\mathbf{p}\cdot\mathbf{x}/\hbar} \hat{\Psi}^\dagger(x), & \hat{\Psi}^\dagger(x) &= \frac{1}{\sqrt{V}} \sum_{\mathbf{p}} e^{-i\mathbf{p}\cdot\mathbf{x}/\hbar} \hat{a}_p^\dagger \end{aligned} \quad (1.3.5)$$

5) このノートでは常に後述する熱力学極限で考えるため、固定境界条件でなくとも物理的結果に影響は生じない。

角運動量演算子は1粒子系の量子力学では  $\hat{\mathbf{L}} \equiv \hat{\mathbf{x}} \times \hat{\mathbf{p}}$  で与えられていた。これも  $\hat{\Psi}(\mathbf{x}), \hat{\Psi}^\dagger(\mathbf{x})$  を用いて多粒子系へ定義を拡張すると、

$$\begin{aligned}
\hat{\mathbf{L}} &= \int_V d^3\mathbf{x} \int_V d^3\mathbf{x}' \langle \mathbf{x} | (\hat{\mathbf{x}} \times \hat{\mathbf{p}}) | \mathbf{x}' \rangle \hat{\Psi}^\dagger(\mathbf{x}) \hat{\Psi}(\mathbf{x}') \\
&= \int_V d^3\mathbf{x} \int_V d^3\mathbf{x}' \left[ \mathbf{x} \times \frac{\hbar}{i} \nabla \delta(\mathbf{x} - \mathbf{x}') \right] \hat{\Psi}^\dagger(\mathbf{x}) \hat{\Psi}(\mathbf{x}') \\
&= - \int_V d^3\mathbf{x} \int_V d^3\mathbf{x}' \delta(\mathbf{x} - \mathbf{x}') \left[ \mathbf{x} \times \frac{\hbar}{i} \nabla \hat{\Psi}^\dagger(\mathbf{x}) \right] \hat{\Psi}(\mathbf{x}') \\
&= - \int_V d^3\mathbf{x} \left[ \mathbf{x} \times \frac{\hbar}{i} \nabla \hat{\Psi}^\dagger(\mathbf{x}) \right] \hat{\Psi}(\mathbf{x}) \\
&= \int_V d^3\mathbf{x} \hat{\Psi}^\dagger(\mathbf{x}) \left( \mathbf{x} \times \frac{\hbar}{i} \nabla \right) \hat{\Psi}(\mathbf{x})
\end{aligned}$$

と表せるとわかる。

1粒子系の量子力学において、質量  $m (\neq 0)$  の自由粒子系のハミルトニアン  $\hat{H}$  は、

$$\hat{H}_0 = \frac{\hat{\mathbf{p}}^2}{2m}$$

で与えられた。 $\hat{\Psi}(\mathbf{x}), \hat{\Psi}^\dagger(\mathbf{x})$  を用いて多粒子系に拡張されたハミルトニアンを書き下すと、

$$\begin{aligned}
\hat{H}_0 &= \frac{1}{2m} \int_V d^3\mathbf{x} \int_V d^3\mathbf{x}' \langle \mathbf{x} | \hat{\mathbf{p}}^2 | \mathbf{x}' \rangle \hat{\Psi}^\dagger(\mathbf{x}) \hat{\Psi}(\mathbf{x}') \\
&= -\frac{\hbar^2}{2m} \int_V d^3\mathbf{x} \int_V d^3\mathbf{x}' \nabla^2 \delta(\mathbf{x} - \mathbf{x}') \hat{\Psi}^\dagger(\mathbf{x}) \hat{\Psi}(\mathbf{x}') \\
&= \frac{\hbar^2}{2m} \int_V d^3\mathbf{x} \int_V d^3\mathbf{x}' \delta(\mathbf{x} - \mathbf{x}') \nabla^2 \hat{\Psi}^\dagger(\mathbf{x}) \hat{\Psi}(\mathbf{x}') \\
&= \frac{\hbar^2}{2m} \int_V d^3\mathbf{x} \left[ \nabla^2 \hat{\Psi}^\dagger(\mathbf{x}) \right] \hat{\Psi}(\mathbf{x}) \\
&= -\frac{\hbar^2}{2m} \int_V d^3\mathbf{x} \hat{\Psi}^\dagger(\mathbf{x}) \nabla^2 \hat{\Psi}(\mathbf{x})
\end{aligned} \tag{1.3.6}$$

となる。ただし、これは相互作用のない多粒子系のハミルトニアンである。

最後に、多粒子系に定義を拡張した1体演算子の間にはもはや1粒子系の量子力学のときの代数構造は一般に成り立たないことを注意しておく。上で得た多粒子系での  $\hat{\mathbf{L}}$  や  $\hat{H}$  を見るとわかるように、

$$\hat{\mathbf{L}} \neq \hat{\mathbf{x}} \times \hat{\mathbf{p}}, \quad \hat{H} \neq \frac{\hat{\mathbf{p}}^2}{2m}$$

である。また、正準交換関係や角運動量演算子の代数構造も破綻する。

$$[\hat{x}_i, \hat{p}_j] \neq i\hbar\delta_{ij}, \quad [\hat{L}^\alpha, \hat{L}^\beta] \neq i\hbar \sum_{\gamma=x,y,z} \epsilon_{\alpha\beta\gamma} \hat{L}^\gamma$$

ただし1粒子状態に作用させた場合には、1粒子系の量子力学での結果と矛盾しないように、代数構造が成り立つ結果が得られる。

### 1.3.2 演算子の時間発展

Schrödinger 方程式から、時間発展演算子  $\hat{U}(t; t_0)$  ( $\hat{U}(t_0; t_0) = \hat{I}$ ) に対して、

$$i\hbar \frac{d}{dt} \hat{U}^\dagger(t; t_0) = \hat{H}(t) \hat{U}^\dagger(t; t_0) \quad \therefore \hat{U}^\dagger(t; t_0) = T \exp \left[ -\frac{i}{\hbar} \int_{t_0}^t dt' \hat{H}(t') \right]$$

が直ちに導かれる (ここでは一般に時間依存しうるハミルトニアンで考えている) ので、Schrödinger 描像から Heisenberg 描像に移り、時間発展を押し付けた演算子を

$$\hat{A}_H(t; t_0) \equiv \hat{U}(t; t_0) \hat{A} \hat{U}^\dagger(t; t_0)$$

で定義すると、Heisenberg 方程式

$$\frac{d}{dt} \hat{A}_H(t; t_0) = \frac{1}{i\hbar} [\hat{A}_H(t; t_0), \hat{H}_H(t; t_0)]$$

を得る。以降では時間軸の原点  $t = t_0$  を明示しない。

固有状態は時間に依存しないため、 $\hat{\Psi}(\mathbf{x})$  は時間発展しない Schrödinger 描像の演算子である。Heisenberg 描像に移行して、Schrödinger 描像でのハミルトニアン  $\hat{H}$  が (1.3.6) の  $\hat{H}_0$  で与えられる相互作用のない自由粒子系での  $\hat{\Psi}(t, \mathbf{x})$  の Heisenberg 方程式を考えると、

$$\begin{aligned} i\hbar \frac{d}{dt} \hat{\Psi}_H(t, \mathbf{x}) &= [\hat{\Psi}_H(t, \mathbf{x}), \hat{H}_H(t)] \\ &= -\frac{\hbar^2}{2m} \int_V d^3 \mathbf{x}' [\hat{\Psi}_H(t, \mathbf{x}), \hat{\Psi}_H^\dagger(t, \mathbf{x}') \nabla'^2 \hat{\Psi}_H(t, \mathbf{x}')] \\ &= -\frac{\hbar^2}{2m} \int_V d^3 \mathbf{x}' [\hat{\Psi}_H(t, \mathbf{x}), \hat{\Psi}_H^\dagger(t, \mathbf{x}') \nabla'^2 \hat{\Psi}_H(t, \mathbf{x}')]_{-\zeta} \\ &\quad \left( \because \zeta = -1 \text{ のとき、} \hat{\Psi}(\mathbf{x})^2 = [\hat{\Psi}^\dagger(\mathbf{x})]^2 = 0 \right) \\ &= -\frac{\hbar^2}{2m} \int_V d^3 \mathbf{x}' \delta^{(3)}(\mathbf{x} - \mathbf{x}') \nabla'^2 \hat{\Psi}_H(t, \mathbf{x}') \\ &\quad \left( \because \left\{ \begin{aligned} [\hat{A}, \hat{B}\hat{C}] &= [\hat{A}, \hat{B}] \hat{C} + \hat{B} [\hat{A}, \hat{C}] \\ [\hat{\Psi}(\mathbf{x}), \hat{\Psi}^\dagger(\mathbf{x}')]_{-\zeta} &= \delta^{(3)}(\mathbf{x} - \mathbf{x}'), \quad [\hat{\Psi}(\mathbf{x}), \hat{\Psi}(\mathbf{x}')]_{-\zeta} = 0 \end{aligned} \right. \right) \\ &= -\frac{\hbar^2}{2m} \nabla^2 \hat{\Psi}_H(t, \mathbf{x}) \end{aligned}$$

と、(Schrödinger 表示での) 自由粒子系の Schrödinger 方程式と同じ形式をとることがわかる。この式の左から真空  $\langle 0|$  を、右から何らかの 1 粒子状態を演算させれば 1 粒子系の量子力学における Schrödinger 方程式そのものに帰着しなければならないから、この結果は当然と言える。一方、この方程式は演算子  $\hat{\Psi}(t, \mathbf{x})$  が対応する物理量  $\Psi(t, \mathbf{x})$  について

$$i\hbar \frac{\partial}{\partial t} \Psi(t, \mathbf{x}) = -\frac{\hbar^2}{2m} \nabla^2 \Psi(t, \mathbf{x}) \quad (1.3.7)$$

で運動方程式が与えられることを示唆している。このように多体系を複素場  $\Psi(t, \mathbf{x})$  を変数にもつ系とみなすと、 $\hat{H}$  は系のハミルトニアン密度を

$$\mathcal{H} = -\frac{\hbar^2}{2m} \bar{\Psi}(t, \mathbf{x}) \nabla^2 \Psi(t, \mathbf{x})$$

で与える。このハミルトニアン密度に対して場の解析力学の処方 (B.1 節参照) を用いると、 $\Psi(t, \mathbf{x})$  とその正準共役運動量  $\pi(t, \mathbf{x}) \equiv i\hbar \bar{\Psi}(t, \mathbf{x})$  の正準方程式として確かに Schrödinger 方程式 (1.3.7) (およびその複素共役) が導かれる。

### 1.3.3 2体演算子

ここまでは、多粒子系における粒子の相互作用はまったく考えていない。なぜなら、考えてきたハミルトニアンが1粒子系の量子力学のものを拡張しただけの1体演算子で表されているためである。

2体相互作用を表せるような2体演算子は、1体演算子を与える際に1粒子系から始めたように、2粒子系から考え始めればよい。ただし、2粒子系における完全性関係は

$$\hat{I}^{(2)} = \frac{1}{2!} \sum_{i,j,k,l} |\alpha_i, \alpha_j\rangle \langle \alpha_k, \alpha_l|$$

となることに注意する (1.1 節参照)。ここから2粒子系での2体演算子は

$$\hat{V}^{(2)} = \frac{1}{4} \sum_{i,j,k,l} \langle \alpha_i, \alpha_j | \hat{V}^{(2)} | \alpha_k, \alpha_l \rangle |\alpha_i, \alpha_j\rangle \langle \alpha_k, \alpha_l|$$

と表されると考えられるので、一般の多粒子系については、

$$\hat{V} = \frac{1}{4} \sum_{i,j,k,l} \langle \alpha_i, \alpha_j | \hat{V}^{(2)} | \alpha_k, \alpha_l \rangle \hat{a}^\dagger(\alpha_i) \hat{a}^\dagger(\alpha_j) \hat{a}(\alpha_l) \hat{a}(\alpha_k)$$

とすればよいとわかる。ただし、 $[\hat{a}^\dagger(\alpha_k) \hat{a}^\dagger(\alpha_l)]^\dagger = \hat{a}(\alpha_l) \hat{a}(\alpha_k)$  を用いた。

特に2体相互作用が、2粒子の位置  $\mathbf{x}_1, \mathbf{x}_2$  で決まるものなら、

$$\hat{V}^{(2)} = V(\hat{\mathbf{x}}_1, \hat{\mathbf{x}}_2) \quad (V(\mathbf{x}_1, \mathbf{x}_2) = V(\mathbf{x}_2, \mathbf{x}_1))$$

として表せるので、場の演算子  $\hat{\Psi}(\mathbf{x}), \hat{\Psi}^\dagger(\mathbf{x})$  を用いて多粒子系に定義を拡張すると、

$$\begin{aligned} \hat{V} &= \frac{1}{4} \int_V d^3\mathbf{x}_1 \int_V d^3\mathbf{x}_2 \int_V d^3\mathbf{x}'_1 \int_V d^3\mathbf{x}'_2 V(\mathbf{x}_1, \mathbf{x}_2) \langle \mathbf{x}_1, \mathbf{x}_2 | \mathbf{x}'_1, \mathbf{x}'_2 \rangle \hat{\Psi}^\dagger(\mathbf{x}_1) \hat{\Psi}^\dagger(\mathbf{x}_2) \hat{\Psi}(\mathbf{x}'_2) \hat{\Psi}(\mathbf{x}'_1) \\ &= \frac{1}{4} \int_V d^3\mathbf{x}_1 \int_V d^3\mathbf{x}_2 V(\mathbf{x}_1, \mathbf{x}_2) \left( \hat{\Psi}^\dagger(\mathbf{x}_1) \hat{\Psi}^\dagger(\mathbf{x}_2) \hat{\Psi}(\mathbf{x}_2) \hat{\Psi}(\mathbf{x}_1) + \zeta \hat{\Psi}^\dagger(\mathbf{x}_1) \hat{\Psi}^\dagger(\mathbf{x}_2) \hat{\Psi}(\mathbf{x}_1) \hat{\Psi}(\mathbf{x}_2) \right) \\ &= \frac{1}{2} \int_V d^3\mathbf{x}_1 \int_V d^3\mathbf{x}_2 V(\mathbf{x}_1, \mathbf{x}_2) \hat{\Psi}^\dagger(\mathbf{x}_1) \hat{\Psi}^\dagger(\mathbf{x}_2) \hat{\Psi}(\mathbf{x}_2) \hat{\Psi}(\mathbf{x}_1) \\ &= \frac{1}{2} \int_V d^3\mathbf{x}_1 \int_V d^3\mathbf{x}_2 V(\mathbf{x}_1, \mathbf{x}_2) \hat{\rho}(\mathbf{x}_1) \hat{\rho}(\mathbf{x}_2) + \frac{1}{2} \int d^3\mathbf{x} V(\mathbf{x}, \mathbf{x}) \hat{\rho}(\mathbf{x}) \end{aligned}$$

となる。

このような2体相互作用を含む系のハミルトニアン

$$\hat{H} = -\frac{\hbar^2}{2m} \int_V d^3\mathbf{x} \hat{\Psi}^\dagger(\mathbf{x}) \nabla^2 \hat{\Psi}(\mathbf{x}) + \frac{1}{2} \int_V d^3\mathbf{x}_1 \int_V d^3\mathbf{x}_2 V(\mathbf{x}_1, \mathbf{x}_2) \hat{\Psi}^\dagger(\mathbf{x}_1) \hat{\Psi}^\dagger(\mathbf{x}_2) \hat{\Psi}(\mathbf{x}_2) \hat{\Psi}(\mathbf{x}_1)$$

に対して、場の演算子  $\hat{\Psi}(t, \mathbf{x})$  の Heisenberg 方程式を求めると、

$$\begin{aligned} i\hbar \frac{\partial}{\partial t} \hat{\Psi}(t, \mathbf{x}) &= -\frac{\hbar^2}{2m} \nabla^2 \hat{\Psi}(t, \mathbf{x}) + \left( \frac{1}{2} \int_V d^3\mathbf{x}' V(\mathbf{x}, \mathbf{x}') \hat{\Psi}^\dagger(t, \mathbf{x}') \hat{\Psi}(t, \mathbf{x}') \right) \hat{\Psi}(t, \mathbf{x}) \quad (1.3.8) \\ &= -\frac{\hbar^2}{2m} \nabla^2 \hat{\Psi}(t, \mathbf{x}) + \left( \frac{1}{2} \int_V d^3\mathbf{x}' V(\mathbf{x}, \mathbf{x}') \hat{\rho}(t, \mathbf{x}') \right) \hat{\Psi}(t, \mathbf{x}) \end{aligned}$$

というように、非線形な項が現れることがわかる。なお、2体相互作用をもつ場合でも  $\hat{\Psi}(\mathbf{x})$  に対応する場  $\Psi(\mathbf{x})$  の正準共役な運動量の場合は  $\pi(\mathbf{x}) = i\hbar \bar{\Psi}(\mathbf{x})$  である (B.1 節参照)。

### 1.3.4 量子状態の変換則 I : 並進・回転変換

Heisenberg 方程式から、量子力学において系の保存量は系のハミルトニアン演算子と可換な演算子で与えられることがわかる。古典力学では、対称変換の生成子が系の保存量になるという Noether の定理が存在するため、量子力学においてもこのような保存則が満たされるように状態ベクトルおよび演算子の変換が定められる。確率および物理量の保存からそのような変換はユニタリ変換で表されて、

$$|\psi'\rangle = \hat{U}^\dagger |\psi\rangle, \quad \hat{A}' = \hat{U}^\dagger \hat{A} \hat{U}$$

と作用する。変換に対応した保存量に対してはこの変換に対して不変に保たれることから、物理量  $\hat{A}$  を保存する対称変換は

$$\hat{U} = e^{i\alpha\hat{A}} \equiv \sum_{n=0}^{\infty} \frac{(i\alpha)^n}{n!} \hat{A}^n, \quad \hat{U}^\dagger = e^{-i\alpha\hat{A}} \quad (\alpha \in \mathbb{R})$$

で与えられる。このように定義すると、例えばエネルギーを保存する対称変換  $\hat{U}^\dagger = e^{-i\alpha\hat{H}}$  は時間発展演算子そのものであり、エネルギー保存則が時間並進対称性に対する Noether の定理から導かれるという古典論の結果に符合する。

運動量  $\mathbf{p}$  を保存するユニタリ変換を場の演算子  $\hat{\Psi}(\mathbf{x})$  に対して施してみる。 $\hat{\mathbf{p}}$  と  $\hat{\Psi}(\mathbf{x})$  の間の交換関係は、

$$\begin{aligned} [\hat{\mathbf{p}}, \hat{\Psi}(\mathbf{x})] &= \int_V d^3\mathbf{x}' \left[ \hat{\Psi}^\dagger(\mathbf{x}') \left( \frac{\hbar}{i} \nabla' \right) \hat{\Psi}(\mathbf{x}'), \hat{\Psi}(\mathbf{x}) \right] \\ &= \int_V d^3\mathbf{x}' \left( \hat{\Psi}^\dagger(\mathbf{x}') \frac{\hbar}{i} \nabla' \hat{\Psi}(\mathbf{x}') \hat{\Psi}(\mathbf{x}) - \hat{\Psi}(\mathbf{x}) \hat{\Psi}^\dagger(\mathbf{x}') \frac{\hbar}{i} \nabla' \hat{\Psi}(\mathbf{x}') \right) \\ &= - \int_V d^3\mathbf{x}' \delta(\mathbf{x} - \mathbf{x}') \frac{\hbar}{i} \nabla' \hat{\Psi}(\mathbf{x}') \\ &= - \frac{\hbar}{i} \hat{\Psi}(\mathbf{x}) \end{aligned}$$

であるので、BCH 公式 (C.3 節参照) より、

$$\begin{aligned} e^{-i\mathbf{a}\cdot\hat{\mathbf{p}}/\hbar} \hat{\Psi}(\mathbf{x}) e^{i\mathbf{a}\cdot\hat{\mathbf{p}}/\hbar} &= \hat{\Psi}(\mathbf{x}) + \mathbf{a} \cdot \nabla \hat{\Psi}(\mathbf{x}) + \frac{1}{2!} (\mathbf{a} \cdot \nabla)^2 \hat{\Psi}(\mathbf{x}) + \frac{1}{3!} (\mathbf{a} \cdot \nabla)^3 \hat{\Psi}(\mathbf{x}) + \dots \\ &= \sum_{n=0}^{\infty} \frac{(\mathbf{a} \cdot \nabla)^n}{n!} \hat{\Psi}(\mathbf{x}) = e^{\mathbf{a}\cdot\nabla} \hat{\Psi}(\mathbf{x}) \\ &= \hat{\Psi}(\mathbf{x} + \mathbf{a}) \end{aligned}$$

とわかる。よって、確かに  $\hat{\mathbf{p}}$  を生成子にもつユニタリ変換は空間並進変換を行う演算子になっている。古典論で空間並進対称性に対する Noether の定理から運動量保存則が導かれることに対応している。

角運動量演算子  $\hat{\mathbf{L}}$  を生成子にもつユニタリ変換についても、古典論で角運動量保存則が空間回転対称性によることから、空間回転変換を行う演算子になっていると考えられるので、実際に  $\hat{\Psi}(\mathbf{x})$  に対する  $\hat{L}^z$  を生成子としたユニタリ変換について計算してみる。球面座標系  $(r, \theta, \varphi)$  を

$$\mathbf{x} = (x, y, z) = (r \sin \theta \cos \varphi, r \sin \theta \sin \varphi, r \cos \theta)$$

で定めると、

$$x \frac{\partial}{\partial y} - y \frac{\partial}{\partial x} = \frac{\partial}{\partial \varphi}$$

であることから、

$$\begin{aligned} [\hat{L}^z, \hat{\Psi}(\mathbf{x})] &= \int_V d^3 \mathbf{x}' \left[ \hat{\Psi}^\dagger(\mathbf{x}') \frac{\hbar}{i} \frac{\partial}{\partial \varphi'} \hat{\Psi}(\mathbf{x}'), \hat{\Psi}(\mathbf{x}) \right] \\ &= \int_V d^3 \mathbf{x}' \left( \hat{\Psi}^\dagger(\mathbf{x}') \frac{\hbar}{i} \frac{\partial}{\partial \varphi'} \hat{\Psi}(\mathbf{x}') \hat{\Psi}(\mathbf{x}) - \hat{\Psi}(\mathbf{x}) \hat{\Psi}^\dagger(\mathbf{x}') \frac{\hbar}{i} \frac{\partial}{\partial \varphi'} \hat{\Psi}(\mathbf{x}') \right) \\ &= - \int_V d^3 \mathbf{x}' \delta(\mathbf{x} - \mathbf{x}') \frac{\hbar}{i} \frac{\partial}{\partial \varphi'} \hat{\Psi}(\mathbf{x}') \\ &= - \frac{\hbar}{i} \frac{\partial}{\partial \varphi} \hat{\Psi}(\mathbf{x}) \end{aligned}$$

と交換関係が計算されるため、BCH 公式 (C.3 節参照) より、

$$\begin{aligned} e^{-i\Delta\varphi \hat{L}^z/\hbar} \hat{\Psi}(\mathbf{x}) e^{i\Delta\varphi \hat{L}^z/\hbar} &= \hat{\Psi}(\mathbf{x}) + \Delta\varphi \frac{\partial}{\partial \varphi} \hat{\Psi}(\mathbf{x}) + \frac{(\Delta\varphi)^2}{2!} \frac{\partial^2}{\partial \varphi^2} \hat{\Psi}(\mathbf{x}) + \frac{(\Delta\varphi)^3}{3!} \frac{\partial^3}{\partial \varphi^3} \hat{\Psi}(\mathbf{x}) + \dots \\ &= \sum_{n=0}^{\infty} \left( \Delta\varphi \frac{\partial}{\partial \varphi} \right)^n \hat{\Psi}(\mathbf{x}) \\ &= \hat{\Psi}(\mathbf{x}, \varphi + \Delta\varphi) \end{aligned}$$

とわかり、確かに  $z$  軸周りでの回転変換であることが確かめられる。

1 粒子系の量子力学では考えられなかった変換として、粒子数演算子

$$\hat{N} \equiv \sum_i \hat{a}_i^\dagger \hat{a}_i = \int_V d^3 \mathbf{x} \hat{\Psi}^\dagger(\mathbf{x}) \hat{\Psi}(\mathbf{x})$$

を生成子にもつユニタリ変換を考えると、

$$\begin{aligned} e^{-i\phi \hat{N}} \hat{\Psi}(\mathbf{x}) e^{i\phi \hat{N}} &= e^{-i\phi \hat{N}} \sum_{n=0}^{\infty} \frac{1}{n!} \hat{\Psi}(\mathbf{x}) \left( i\phi \hat{N} \right)^n \\ &= e^{-i\phi \hat{N}} \sum_{n=0}^{\infty} \frac{1}{n!} \int d^3 \mathbf{x}' i\phi \hat{\Psi}(\mathbf{x}) \hat{\Psi}^\dagger(\mathbf{x}') \hat{\Psi}(\mathbf{x}') \left( i\phi \hat{N} \right)^{n-1} \\ &= e^{-i\phi \hat{N}} \sum_{n=0}^{\infty} \frac{1}{n!} \int d^3 \mathbf{x}' i\phi \left[ \hat{\Psi}^\dagger(\mathbf{x}') \hat{\Psi}(\mathbf{x}') \hat{\Psi}(\mathbf{x}) + \delta(\mathbf{x} - \mathbf{x}') \hat{\Psi}(\mathbf{x}') \right] \left( i\phi \hat{N} \right)^{n-1} \\ &= e^{-i\phi \hat{N}} \sum_{n=0}^{\infty} \frac{1}{n!} \left[ \left( i\phi \hat{N} \right) + i\phi \right] \hat{\Psi}(\mathbf{x}) \left( i\phi \hat{N} \right)^{n-1} \\ &= e^{-i\phi \hat{N}} \sum_{n=0}^{\infty} \frac{1}{n!} \left[ \left( i\phi \hat{N} \right) + i\phi \right]^n \hat{\Psi}(\mathbf{x}) \\ &= e^{-i\phi \hat{N}} e^{i\phi \hat{N}} e^{i\phi} \hat{\Psi}(\mathbf{x}) = e^{i\phi} \hat{\Psi}(\mathbf{x}) \end{aligned}$$

というように、複素場  $\Psi(t, \mathbf{x})$  の位相部分に対する変換であることがわかる。複素場の位相自由度のことをゲージ、その変換に対する対称性をゲージ対称性と呼ぶことがあるが、 $\hat{N}$  を生成子にもつ変換がゲージ変換であるということはゲージ対称性から粒子数保存則が導かれるということを意味している。

### 1.3.5 スピン

量子力学において粒子は、位置・運動量といった実空間運動の自由度の他にスピンという 3 成分の自由度

$$\mathbf{S} = (S^x, S^y, S^z)$$

をもっていることが知られている。それらの演算子  $\hat{\mathbf{S}} = (\hat{S}^x, \hat{S}^y, \hat{S}^z)$  は角運動量と同じ代数を持ち、角運動量としての大きさ  $s$  は粒子に固有である。Fermi 粒子がもつスピンの大きさは半整数に限られるのに対し、Bose 粒子のそれは整数に限られることが知られている (スピン統計定理)。

Fermi 粒子はこのスピン自由度による  $2s + 1$  個の準位も含めて Pauli の排他原理を満たすので、ハミルトニアンにスピンが関与する項がなければスピン準位により固有状態が分裂せず、 $2s + 1$  個の Fermi 粒子が同じ運動状態をとりうる。

1 粒子の運動状態  $i$  に加えて  $\sigma = -s, -s + 1, \dots, s$  で 1 粒子のスピン準位の状態<sup>6)</sup>を指定すると、対応した生成消滅演算子  $\hat{a}_{i,\sigma}, \hat{a}_{i,\sigma}^\dagger$  をとることができる。すると運動状態  $i$  の粒子のスピン演算子を、1 体演算子として

$$\hat{S}^z = \sum_i \sum_{\sigma=-s}^s \hbar \sigma \hat{a}_{i,\sigma}^\dagger \hat{a}_{i,\sigma}$$

で定義できるとわかる。1 粒子系の量子力学において  $\hat{S}^\pm \equiv \hat{S}^x \pm i\hat{S}^y$  は昇降演算子の役割を果たしたので、これらも 1 体演算子として

$$\begin{aligned} \hat{S}^+ &= \sum_i \sum_{\sigma=-s}^{s-1} \sqrt{\hbar^2(s-\sigma)(s+\sigma+1)} \hat{a}_{i,\sigma+1}^\dagger \hat{a}_{i,\sigma}, \\ \hat{S}^- &= \sum_i \sum_{\sigma=-s}^{s-1} \sqrt{\hbar^2(s-\sigma)(s+\sigma+1)} \hat{a}_{i,\sigma}^\dagger \hat{a}_{i,\sigma+1} \end{aligned}$$

で定義される<sup>7)</sup>。よって、 $\hat{S}_i^x, \hat{S}_i^y$  は、

$$\begin{aligned} \hat{S}^x &= \frac{\hbar}{2} \sum_i \sum_{\sigma=-s}^{s-1} \sqrt{(s-\sigma)(s+\sigma+1)} \left( \hat{a}_{i,\sigma}^\dagger \hat{a}_{i,\sigma+1} + \hat{a}_{i,\sigma+1}^\dagger \hat{a}_{i,\sigma} \right) \\ \hat{S}^y &= \frac{i\hbar}{2} \sum_i \sum_{\sigma=-s}^{s-1} \sqrt{(s-\sigma)(s+\sigma+1)} \left( \hat{a}_{i,\sigma}^\dagger \hat{a}_{i,\sigma+1} - \hat{a}_{i,\sigma+1}^\dagger \hat{a}_{i,\sigma} \right) \end{aligned}$$

と表されることがわかる。また、 $s$  は固有であるから、

$$\hat{\mathbf{S}}^2 = \hbar^2 s(s+1) \sum_i \sum_{\sigma=-s}^s \hat{a}_{i,\sigma}^\dagger \hat{a}_{i,\sigma} = \hbar^2 s(s+1) \hat{N}$$

である。

前節の議論から、スピン演算子を生成子にとるユニタリ変換はスピン自由度に対する回転変換となっているはずである。ここではスピン演算子の変換について、計算の都合上  $\hat{S}^\pm$  に対する変換性

6) 以降では必ず  $\hat{S}^z$  の固有状態をスピン準位の基底にとることにする。

7) 演算子の係数については、付録 A.1.1 の (A.1.3) を参照。



を考える。

$$\begin{aligned}
[\hat{S}^z, \hat{S}^+] &= \hbar^2 \sum_{i,j} \sum_{\sigma=-s}^s \sum_{\sigma'=-s}^{s-1} \sqrt{\sigma^2(s-\sigma')(s+\sigma'+1)} \left[ \hat{a}_{i,\sigma}^\dagger \hat{a}_{i,\sigma} \hat{a}_{j,\sigma'+1}^\dagger \hat{a}_{j,\sigma'} \right] \\
&= \hbar^2 \sum_{i,j} \sum_{\sigma=-s}^s \sum_{\sigma'=-s}^{s-1} \sqrt{\sigma^2(s-\sigma')(s+\sigma'+1)} \left( \hat{a}_{i,\sigma}^\dagger \hat{a}_{i,\sigma} \hat{a}_{j,\sigma'+1}^\dagger \hat{a}_{j,\sigma'} - \hat{a}_{j,\sigma'+1}^\dagger \hat{a}_{j,\sigma'} \hat{a}_{i,\sigma}^\dagger \hat{a}_{i,\sigma} \right) \\
&= \hbar^2 \sum_{i,j} \sum_{\sigma=-s}^s \sum_{\sigma'=-s}^{s-1} \sqrt{\sigma^2(s-\sigma')(s+\sigma'+1)} \left( \delta_{ij} \delta_{\sigma,\sigma'+1} \hat{a}_{i,\sigma}^\dagger \hat{a}_{j,\sigma'} - \delta_{ij} \delta_{\sigma,\sigma'} \hat{a}_{j,\sigma'+1}^\dagger \hat{a}_{i,\sigma} \right) \\
&= \hbar^2 \sum_{\sigma=-s}^{s-1} \sqrt{(s-\sigma)(s+\sigma+1)} \hat{a}_{i,\sigma+1}^\dagger \hat{a}_{i,\sigma} \\
&= \hbar \hat{S}^+
\end{aligned}$$

同様にして、

$$\begin{aligned}
[\hat{S}^z, \hat{S}^-] &= \hbar^2 \sum_{i,j} \sum_{\sigma=-s}^s \sum_{\sigma'=-s}^{s-1} \sqrt{\sigma^2(s-\sigma')(s+\sigma'+1)} \left[ \hat{a}_{i,\sigma}^\dagger \hat{a}_{i,\sigma} \hat{a}_{j,\sigma'}^\dagger \hat{a}_{j,\sigma'+1} \right] \\
&= \hbar^2 \sum_{i,j} \sum_{\sigma=-s}^s \sum_{\sigma'=-s}^{s-1} \sqrt{\sigma^2(s-\sigma')(s+\sigma'+1)} \left( \hat{a}_{i,\sigma}^\dagger \hat{a}_{i,\sigma} \hat{a}_{j,\sigma'}^\dagger \hat{a}_{j,\sigma'+1} - \hat{a}_{j,\sigma'}^\dagger \hat{a}_{j,\sigma'+1} \hat{a}_{i,\sigma}^\dagger \hat{a}_{i,\sigma} \right) \\
&= \hbar^2 \sum_{i,j} \sum_{\sigma=-s}^s \sum_{\sigma'=-s}^{s-1} \sqrt{\sigma^2(s-\sigma')(s+\sigma'+1)} \left( \delta_{ij} \delta_{\sigma,\sigma'} \hat{a}_{i,\sigma}^\dagger \hat{a}_{j,\sigma'+1} - \delta_{ij} \delta_{\sigma,\sigma'+1} \hat{a}_{j,\sigma'}^\dagger \hat{a}_{i,\sigma} \right) \\
&= -\hbar^2 \sum_{\sigma=-s}^{s-1} \sqrt{(s-\sigma)(s+\sigma+1)} \hat{a}_{i,\sigma}^\dagger \hat{a}_{i,\sigma+1} \\
&= -\hbar \hat{S}^-
\end{aligned}$$

と交換関係が求まるので、BCH 公式 (C.3 節参照) を用いて計算してみると、

$$\begin{aligned}
e^{-i\Delta\varphi\hat{S}^z/\hbar} \hat{S}^\pm e^{i\Delta\varphi\hat{S}^z/\hbar} &= \hat{S}^\pm \pm i\Delta\varphi \hat{S}^\pm + \frac{1}{2!} (\pm i\Delta\varphi)^2 \hat{S}^\pm + \frac{1}{3!} (\pm i\Delta\varphi)^3 \hat{S}^\pm + \dots \\
&= \sum_{n=0}^{\infty} \frac{1}{n!} (\pm i\Delta\varphi)^n \hat{S}^\pm = e^{\pm i\Delta\varphi} \hat{S}^\pm
\end{aligned}$$

と求まる。この結果と  $\hat{S}^\pm$  と  $\hat{S}^z$  の関係から、

$$\begin{aligned}
e^{-i\Delta\varphi\hat{S}^z/\hbar} \hat{S}^x e^{i\Delta\varphi\hat{S}^z/\hbar} &= \hat{S}^x \cos \Delta\varphi + \hat{S}^y \sin \Delta\varphi, \\
e^{-i\Delta\varphi\hat{S}^z/\hbar} \hat{S}^y e^{i\Delta\varphi\hat{S}^z/\hbar} &= \hat{S}^x \sin \Delta\varphi - \hat{S}^y \cos \Delta\varphi
\end{aligned}$$

とわかるので、確かにスピン自由度に対する  $z$  軸周りの回転変換である。

生成消滅演算子に対してスピン自由度の回転変換を行うと、

$$[\hat{S}^z, \hat{a}_{i,\sigma}] = \sum_j \sum_{\sigma'=-s}^s \hbar \sigma' [\hat{a}_{j,\sigma'}^\dagger \hat{a}_{j,\sigma'} \hat{a}_{i,\sigma}] = \hbar \sigma \hat{a}_{i,\sigma}, \quad [\hat{S}^z, \hat{a}_{i,\sigma}^\dagger] = \left( -[\hat{S}^z, \hat{a}_{i,\sigma}] \right)^\dagger = -\hbar \sigma \hat{a}_{i,\sigma}^\dagger$$

より、

$$e^{-i\Delta\varphi\hat{S}^z/\hbar} \hat{a}_{i,\sigma} e^{i\Delta\varphi\hat{S}^z/\hbar} = \sum_{n=0}^{\infty} \frac{(i\sigma\Delta\varphi)^n}{n!} \hat{a}_{i,\sigma} = e^{i\sigma\Delta\varphi} \hat{a}_{i,\sigma}, \quad e^{-i\Delta\varphi\hat{S}^z/\hbar} \hat{a}_{i,\sigma}^\dagger e^{i\Delta\varphi\hat{S}^z/\hbar} = e^{-i\sigma\Delta\varphi} \hat{a}_{i,\sigma}^\dagger$$

というように、生成消滅するスピン準位  $\sigma$  に応じた位相変換が現れる。注目すべきは、 $\sigma$  が半奇数値しかとらない Fermi 粒子が奇数個存在する系では  $\Delta\varphi = 2\pi$ 、すなわち系を 1 回転させると、スピン自由度自体は元通りに戻るはずなのに量子状態には必ず  $e^{\pm i\pi} = -1$  の位相差が現れることである。これは同じ角運動量でも軌道角運動量を生成子にとるユニタリ変換では  $\Delta\varphi = 2\pi$  のとき恒等変換となるのと対照的である。このために奇数個の Fermi 粒子多体系では 2 回転させることで系の量子状態が元に戻る。

### 1.3.6 量子状態の変換則 II：離散変換

ここまでは連続パラメータを用いて表される変換について考えてきたが、それ以外にもパリティ・時間反転変換といった離散変換が存在する。多体系の量子力学の枠組みでこれらの変換も定式化していく。

## 1.4 熱力学極限での多体量子状態

多体系においては、その微視的な物理から創発する巨視的現象が主要なテーマである。巨視的に平衡にある状態は巨視的な物理量のみで理論を展開することができ、(平衡) 熱力学として体系化されている。この熱力学を微視的観点から基礎づける試みが (平衡) 統計力学である。

### 1.4.1 正準典型性と熱力学ポテンシャルの微視的表式

粒子数  $N$  で孤立した体積  $V$  の系にエネルギー  $E$  が与えられたとき、系はエネルギー固有値  $E$  の固有状態のいずれかをとることになるが、系の大きさが非常に大きい場合にはそのほとんどが同じ巨視的性質、具体的には同じ熱平衡状態の性質を示すとされる。この性質は (正準) 典型性と呼ばれ、典型性が成り立つ系は熱力学極限である。典型的な量子状態の集団とそれが表す熱平衡状態の関係は、固有状態の数  $W_{V,N}(E)$  と系の熱力学ポテンシャルであるエントロピー  $S(E, V, N)$  の関係式

$$S(E, V, N) = k_B \ln W_{V,N}(E) \quad (1.4.1)$$

で与えられる ( $k_B$  は Boltzmann 定数)<sup>8)</sup>。これを Boltzmann の原理という。

熱力学において、エネルギーのゆらぎを許す環境では  $E$  の代わりに温度  $T$ 、あるいは逆温度  $\beta \equiv (k_B T)^{-1}$  を用いて  $(T; V, N)$  で熱平衡状態を指定できる。その際には、Legendre 変換

$$F(T; V, N) \equiv \min_{E \geq 0} [E - TS(E, V, N)]$$

で定義される Helmholtz の自由エネルギー  $F(T; V, N)$  が理論形式を与える熱力学ポテンシャルになる<sup>9)</sup>。この式の両辺を  $-\beta$  倍して指数関数の肩にのせると、

$$e^{-\beta F(T; V, N)} = \exp \left\{ \max_{E \geq 0} \left[ \frac{1}{k_B} S(E, V, N) - \beta E \right] \right\}$$

8) エネルギー  $E$  の固有状態の数  $W_{V,N}(E)$  をエネルギー  $E$  以下の固有状態の数  $\Omega_{V,N}(E)$  に置き換えても成り立つ。エントロピー  $S(E)$  の示量性から  $W(E)$  は系を大きくすると指数関数的に増加するとわかるので、確率分布は  $\Omega(E)$  に置き換えてもほとんど変わらず、Boltzmann の原理から導かれるエントロピー  $S(E, V, N)$  も熱力学極限では無視できる  $\mathcal{O}(V)$  程度の変化しかない。

9)  $S(E, V, N)$  が  $E$  の単調増加関数であるために  $f(E) = E - TS(E, V, N)$  は ( $E$  の関数として) 最小値を必ず 1 つしか持たないことから、 $F(T; V, N)$  は常に一意に決まる。

という等式が得られる。しかし、 $f(E) = E - TS(E, V, N)$  で最小値を与える  $E$  を  $E^*$  とおくと、指数関数

$$\exp \left[ \frac{1}{k_B} S(E, V, N) - \beta E \right]$$

は  $E = E^*$  で極大となり、微視的定数  $k_B$  に対する巨視的物理量  $S, E$  のスケールと指数関数のふるまいからその周りでの値は極大値に比べて無視できるほど小さい。よって先の等式は、

$$\exp \left\{ \max_{E \geq 0} \left[ \frac{1}{k_B} S(E, V, N) - \beta E \right] \right\} \simeq \sum_{E \geq 0} e^{S(E, V, N)/k_B} e^{-\beta E}$$

というように無限和を近似した結果とみなせて、Boltzmann の原理 (1.4.1) から、

$$e^{-\beta F(T; V, N)} = \sum_{E \geq 0} W_{V, N}(E) e^{-\beta E} = \sum_i e^{-\beta E_{N, i}} (\equiv Z_{V, N}) \quad (1.4.2)$$

という、系のエネルギー固有値  $E_{N, i}$  という微視的情報と自由エネルギー  $F(T; V, N)$  を接続する表式が得られる。最右辺の量  $Z_{V, N}$  を分配関数という。

エネルギーに加えて粒子数のゆらぎも許す環境では  $N$  の代わりに化学ポテンシャル  $\mu$  を用いて  $(T, \mu; V)$  で熱平衡状態を指定できる。その際には、Legendre 変換

$$J(T, \mu; V) \equiv \min_{N \geq 0} [F(T; V, N) - \mu N]$$

で定義されるグランドポテンシャル  $J(T, \mu; V)$  が熱力学ポテンシャルである。この式の両辺を  $-\beta$  倍して指数関数の肩にのせると、

$$e^{-\beta J(T, \mu; V)} = \exp \left\{ \max_{N \geq 0} [-\beta F(T; V, N) + \beta \mu N] \right\}$$

という等式が得られて、カノニカル分布のときと同様にこの右辺は

$$\exp \left\{ \max_{N \geq 0} [-\beta F(T; V, N) + \beta \mu N] \right\} \simeq \sum_{N \geq 0} e^{-\beta F(T; V, N)} e^{\beta \mu N}$$

というように無限和を近似した結果とみなせて、自由エネルギーを肩にのせた指数関数は (1.4.2) から分配関数  $Z_{V, N}$  であるので、

$$e^{-\beta J(T, \mu; V)} = \sum_N Z_{V, N} e^{\beta \mu N} = \sum_N \sum_i e^{-\beta (E_{N, i} - \mu N)} (\equiv \Xi_V) \quad (1.4.3)$$

という、系のエネルギー固有値  $E_{N, i}$  という微視的情報とグランドポテンシャル  $J(T, \mu; V)$  を接続する表式が得られる。最右辺の量  $\Xi_V$  を大分配関数という。

### 1.4.2 アンサンブル形式による熱平衡状態の表現

典型性を満たす系ではどのエネルギー固有値  $E$  の固有状態でも巨視的物理量は同じ値が得られる。これはそれらの固有状態が古典的な確率分布を以て生起するような状態での期待値でも同じ巨視的物理量の値が得られるということである。この際の確率分布はまたどのようなものでもよいので、全ての固有状態が等確率に起こるような確率分布がよく仮定される<sup>10)</sup>。

$$p_{N, i} = \frac{1}{W_{V, N}(E)}$$

10) この確率分布を原理として要請する際には等重率の原理と呼ばれる。

この確率分布をミクロカノニカル分布 (小正準分布) という。

$(T; V, N)$  で指定されたエネルギーのゆらぎが許された系においては、分配関数  $Z_{V,N}$  の定義式 (1.4.2) に Boltzmann の原理 (1.4.1) を用いることで、

$$W_{V,N}(E(T; V, N))e^{-\beta E(T; V, N)} \simeq \sum_{E \geq 0} W_{V,N}(E)e^{-\beta E} \quad (1.4.4)$$

という関係式が成り立っていることがわかる。この式は次のようにして解釈ができる：今注目している系には外部でエネルギーをやり取りする系 (熱浴という) が存在していて、注目系と熱浴を合わせた全体系はエネルギーが保存するようにとられている。全体系をエネルギー  $U$ 、体積  $V_{\text{tot}}$ 、粒子数  $N_{\text{tot}}$  で熱平衡状態が指定したとき、仮に注目系の状態がエネルギー  $E$ 、体積  $V$ 、粒子数  $N$  で指定されていれば、熱浴はエネルギー  $U - E$ 、体積  $V_{\text{tot}} - V (\equiv V_R)$ 、粒子数  $N_{\text{tot}} - N (\equiv N_R)$  で状態が指定される。 $E$  はいろいろな値をとるが、それぞれの系が典型性を満たす熱力学極限であればエントロピーが定義されて、さらに全体系に対して熱力学におけるエントロピー増大則から

$$S_{\text{tot}}(U, V_{\text{tot}}) \geq S(E, V, N) + S_R(U - E, V_R, N_R)$$

という不等式が要請される。 $E$  を仮置きした状態では Boltzmann の原理 (1.4.1) から各系に対してエントロピーが、

$$S_{\text{tot}}(U, V_{\text{tot}}, N_{\text{tot}}) = k_B \ln W_{\text{tot}}(U)$$

$$S(E, V, N) = k_B \ln W_{V,N}(E)$$

$$S_R(U - E, V_R, N_R) = k_B \ln W_R(U - E)$$

で与えられるので、この不等式はほとんどの  $E$  で、各系の固有状態数に対して

$$W_{\text{tot}}(U) \gg W_{V,N}(E)W_R(U - E)$$

が成り立ち、ある  $E$  でのみ

$$W_{\text{tot}}(U) \simeq W_{V,N}(E)W_R(U - E)$$

が成り立つことを示している。すなわち、

$$W_{\text{tot}}(U) = \sum_E W_{V,N}(E)W_R(U - E)$$

で総数が与えられる実際に生起すべき全体系の固有状態の内、実際には部分系があるエネルギー  $E$  をとる状態が圧倒的大多數を占めるということである。式では

$$W_{V,N}(E)W_R(U - E) \simeq \sum_{E' \geq 0} W_{V,N}(E')W_R(U - E')$$

と表され、(1.4.4) は Boltzmann の原理 (1.4.1) から、状態数  $W_{V,N}(E)$  は示量変数に対して指数関数的に増大するので、

$$e^{-\beta E} \propto W_R(U - E)$$

という比例性を上式に適用したものである。注目系が熱浴とエネルギーをやり取りしている場合に確率分布で熱平衡状態を得るには、その中で圧倒的に多い状態数をとるエネルギー配位が現れるよ

うに、異なるエネルギー配位に異なる確率分布を割り振る必要があるが、具体的な状態数の表式 (と等価な)(1.4.4) を参考にすれば

$$p_{N,i} = \frac{1}{Z_{V,N}} e^{-\beta E_{N,i}}$$

という確率分布で期待値をとるようにすればよいとわかる。この確率分布をカノニカル分布 (正準分布) という。

粒子数のゆらぎも許された系での熱平衡状態  $(T, \mu; V)$  も同様の理屈で確率分布を考えることにより再現することができる。この際の確率分布は、大分配関数の定義式 (1.4.3) に Boltzmann の原理を適用して得られる

$$W_{V,N(T,\mu;V)}(E(T,\mu;V))e^{-\beta(E(T,\mu;V)-\mu N(T,\mu;V))} = \sum_{E,N} W_{V,N}(E)e^{-\beta(E-\mu N)}$$

から、次のように与えればよい。

$$p_{N,i} = \frac{1}{\Xi_V} e^{-\beta(E_{N,i}-\mu N)}$$

この確率分布はグランドカノニカル分布 (大正準分布) と呼ばれる。

### 1.4.3 密度行列によるアンサンブル形式の表現

量子状態  $\{|\psi_i\rangle\}$  が確率  $\{p_i\}$  で生起するような状態は、

$$\hat{\rho} \equiv \sum_i p_i |\psi_i\rangle\langle\psi_i| \quad \left( \sum_i p_i = 1 \right)$$

で表される。実際、ある演算子  $\hat{A}$  に対する期待値  $\langle A \rangle$  は、考えている状態空間の正規直交基底  $|\alpha_i\rangle$  を用いた

$$\text{Tr}_{\{\alpha_i\}} \hat{A} \equiv \sum_i \langle \alpha_i | \hat{A} | \alpha_i \rangle$$

という演算により

$$\begin{aligned} \langle A \rangle &= \text{Tr}_{\{\alpha_i\}} [\hat{\rho} \hat{A}] = \sum_{i,j} p_j \langle \alpha_i | \hat{A} | \psi_j \rangle \langle \psi_j | \alpha_i \rangle \\ &= \sum_j p_j \langle \psi_j | \left( \sum_i |\alpha_i\rangle\langle\alpha_i| \right) \hat{A} | \psi_j \rangle \\ &= \sum_j p_j \langle \psi_j | \hat{A} | \psi_j \rangle \end{aligned}$$

で与えられるが、これは確かに量子状態  $\{|\psi_i\rangle\}$  が古典的確率  $\{p_i\}$  で混合された状態での期待値を与えている。演算子に対するこの演算はトレースという<sup>11)</sup>。

$\hat{\rho}$  の性質を一般化すると、まずトレース演算に対して

$$\text{Tr} \hat{\rho} = 1$$

11) 以降、特別な表記がない限りトレース演算は Fock 空間の正規直交基底を用いて行うものとするが、このノートでは常に系の大きさを  $V$  で指定し続けるため、Fock 空間の正規直交基底は常に  $V$  に依存している。グランドカノニカル分布での計算でのみこのことを明示的にして Fock 空間の正規直交基底を用いたトレース演算を行う。

を必ず満たし、また負の固有値を持たないことが要請される。これは最初の  $\hat{\rho}$  の定義で

$$\sum_i p_i = 1, \quad 0 \leq p_i \leq 1$$

であることに対応している。また、これらの  $\{p_i\}$  に対して Schwartz の不等式

$$\sum_i p_i^2 \leq \left( \sum_i p_i \right)^2 = 1$$

が成り立つため、対応して一般の  $\hat{\rho}$  には

$$\text{Tr} \hat{\rho}^2 \leq 1$$

が成り立つことも要請される。Schwartz の不等式は、ある 1 つの  $j$  に対して  $p_i = \delta_{ij}$  であるようなときに等号が成立するが、そのような確率分布  $\{p_i\}$  は量子状態を混合しない。よって、一般に

$$\text{Tr} \hat{\rho}^2 = 1$$

を満たす  $\hat{\rho}$  は 1 つの量子状態のみが必ず現れる状態に対応している。このような状態は純粋状態と呼び、逆に

$$\text{Tr} \hat{\rho}^2 < 1$$

を満たす  $\hat{\rho}$  が表す、必ず量子状態が確率混合されている状態は混合状態という。混合状態は、純粋状態にある大きな系の中の部分系などで実現しうる状態であり、このような一般の量子状態も表せる、

$$\langle \psi | \hat{\rho} | \psi \rangle \geq 0, \quad \text{Tr} \hat{\rho} = 1$$

を満たす演算子のことを密度行列と呼ぶ ( $|\psi\rangle$  は  $\hat{\rho}$  が定義域とする Hilbert 空間上の任意の元)。密度行列で表される状態の時間発展は、Schrödinger 方程式 (1.3.1) から、

$$\begin{aligned} i\hbar \frac{d}{dt} \hat{\rho} &= i\hbar \sum_i p_i \frac{d}{dt} (|\psi_i\rangle \langle \psi_i|) \\ &= \sum_i p_i \left[ \left( i\hbar \frac{d}{dt} |\psi_i\rangle \right) \langle \psi_i| + |\psi_i\rangle \left( i\hbar \frac{d}{dt} \langle \psi_i| \right) \right] \\ &= \sum_i p_i \left[ \hat{H} |\psi_i\rangle \langle \psi_i| - |\psi_i\rangle \langle \psi_i| \hat{H} \right] \\ &= \hat{H} \hat{\rho} - \hat{\rho} \hat{H} = [\hat{H}, \hat{\rho}] \end{aligned} \tag{1.4.5}$$

で与えられるとわかる。この方程式は von Neumann 方程式と呼ばれる<sup>12)</sup>。

ミクロカノニカル分布は、系のエネルギー固有値  $E_{N,i}$  の固有状態を  $|N, i\rangle$  と表すと、密度行列

$$\hat{\rho}_{\text{mc}} = \frac{1}{W_{V,N}(E)} \sum_{E_{N,i}=E} |N, i\rangle \langle N, i|$$

で表すことができる。Boltzmann の関係式はこの  $\hat{\rho}$  と、エネルギー固有値が  $E_{N,i} = E$  の  $N$  粒子固有状態  $|N, i\rangle$  のみを基底にとって行うトレース演算を用いて、

$$S(E, V, N) = -k_B \text{Tr}_{(E,V,N)} [\hat{\rho}_{\text{mc}} \ln \hat{\rho}_{\text{mc}}]$$

12) Heisenberg 方程式とは符号が異なっていることに注意する。この意味で密度行列は通常の物理量に対応する演算子とは区別される。

とも表せる。また、 $W_{V,N}(E) = \text{Tr}_{(E,V,N)}[\hat{I}]$  である。

カノニカル分布の密度行列による表現は、

$$\begin{aligned}\hat{\rho}_c &= \frac{1}{Z_{V,N}} \sum_i e^{-\beta E_{N,i}} |N, i\rangle \langle N, i| \\ &= \frac{1}{Z_{V,N}} \sum_i |N, i\rangle \langle N, i| e^{-\beta \hat{H}} |N, i\rangle \langle N, i| \quad \left( \because e^{-\beta E_{N,i}} = \langle N, i| e^{-\beta \hat{H}} |N, i\rangle \right) \\ &= \frac{1}{Z_{V,N}} \sum_{i,j} |N, i\rangle \langle N, i| e^{-\beta \hat{H}} |N, j\rangle \langle N, j| \quad \left( \because \langle N, i| e^{-\beta \hat{H}} |N, j\rangle = e^{-\beta E_{N,i}} \delta_{ij} \right)\end{aligned}$$

である。この  $\hat{\rho}_c$  と  $|N, i\rangle$  を基底にとって行うトレース演算により  $F(T; V, N)$  は、

$$F(T; V, N) = \text{Tr}_{(V,N)} [\hat{\rho}_c \hat{H}] + k_B T \text{Tr}_{(V,N)} [\hat{\rho}_c \ln \hat{\rho}_c]$$

で与えられる。実際、

$$\text{Tr}_{(V,N)} [\hat{\rho}_c \ln \hat{\rho}_c] = \sum_i \frac{e^{-\beta E_{N,i}}}{Z_{V,N}} \ln \frac{e^{-\beta E_{N,i}}}{Z_{V,N}} = -\frac{\beta}{Z_{V,N}} \sum_i E_{N,i} e^{-\beta E_{N,i}} - \ln Z_{V,N}$$

および

$$\text{Tr}_{(V,N)} [\hat{\rho}_c \hat{H}] = \frac{1}{Z_{V,N}} \sum_i E_{N,i} e^{-\beta E_{N,i}}$$

から表式が従う。また、 $Z_{V,N} = \text{Tr}_{(V,N)} [e^{-\beta \hat{H}}]$  で与えられる。

グランドカノニカル分布に対応する密度行列は、

$$\begin{aligned}\hat{\rho}_{\text{gc}} &= \frac{1}{\Xi_V} \sum_N \sum_i e^{-\beta(E_{N,i} - N\mu)} |N, i\rangle \langle N, i| \\ &= \frac{1}{\Xi_V} \sum_N \sum_i |N, i\rangle \langle N, i| e^{-\beta(\hat{H} - \mu \hat{N})} |N, i\rangle \langle N, i| \\ &\quad \left( \because e^{-\beta(E_{N,i} - N\mu)} = \langle N, i| e^{-\beta(\hat{H} - \mu \hat{N})} |N, i\rangle \right) \\ &= \frac{1}{\Xi_V} \sum_{N,N'} \sum_{i,j} |N, i\rangle \langle N, i| e^{-\beta(\hat{H} - \mu \hat{N})} |N', j\rangle \langle N', j| \\ &\quad \left( \because \langle N, i| e^{-\beta(\hat{H} - \mu \hat{N})} |N', j\rangle = e^{-\beta(E_{N,i} - N\mu)} \delta_{NN'} \delta_{ij} \right) \\ &= \frac{1}{\Xi_V} e^{-\beta(\hat{H} - \mu \hat{N})} \left( \because \sum_N \sum_i |N, i\rangle \langle N, i| = \hat{I} \right)\end{aligned}$$

となり、この  $\hat{\rho}_{\text{gc}}$  と Fock 空間上の正規直交基底を用いて行うトレース演算によりグランドポテンシャル  $J(T, \mu; V)$  は、

$$J(T, \mu; V) = \text{Tr}_V [\hat{\rho}_{\text{gc}} (\hat{H} - \mu \hat{N})] + k_B T \text{Tr}_V [\hat{\rho}_{\text{gc}} \ln \hat{\rho}_{\text{gc}}]$$

で与えられる。実際、

$$\begin{aligned}\text{Tr}_V [\hat{\rho}_{\text{gc}} \ln \hat{\rho}_{\text{gc}}] &= \sum_N \sum_i \frac{e^{-\beta(E_{N,i} - \mu N)}}{\Xi_V} \ln \frac{e^{-\beta(E_{N,i} - \mu N)}}{\Xi_V} \\ &= -\frac{\beta}{\Xi_V} \sum_N \sum_i E_{N,i} e^{-\beta(E_{N,i} - \mu N)} - \ln \Xi_V\end{aligned}$$

および

$$\mathrm{Tr}_V \left[ \hat{\rho}_{\mathrm{gc}} \left( \hat{H} - \mu \hat{N} \right) \right] = \frac{1}{\Xi_V} \sum_N \sum_i E_{N,i} e^{-\beta(E_{N,i} - \mu N)}$$

から表式が従う。また、 $\Xi_V = \mathrm{Tr}_V [e^{-\beta(\hat{H} - \mu \hat{N})}]$  である。ここで、 $\hat{\mathcal{H}} \equiv \hat{H} - \mu \hat{N}$  は生成消滅演算子を用いると

$$\hat{H} = \sum_i \epsilon_i \hat{a}_i^\dagger \hat{a}_i + \hat{V}, \quad \hat{N} = \sum_i \hat{a}_i^\dagger \hat{a}_i$$

と表されることから、元のハミルトニアン  $\hat{H}$  において 1 粒子状態のエネルギー準位  $\epsilon_i$  を  $\mu$  だけずらしたものである。このため、 $T, \mu$  が与えられた系では  $\hat{H}$  の代わりに  $\hat{\mathcal{H}}$  をハミルトニアンとみなすこともある。

#### 1.4.4 同種粒子系の統計性

相互作用のない多粒子系においては、系の固有状態  $(N, i)$  は各粒子の 1 粒子固有状態の組み合わせで与えられる。その結果大分配関数が

$$\Xi_V = \sum_N \sum_{\{n_i\}} \prod_i e^{-\beta(\epsilon_i - \mu)n_i} = \prod_i \sum_n e^{-\beta(\epsilon_i - \mu)n}$$

と表せるようになる。ここで  $\{n_i\} = \{n_1, n_2, \dots | \sum_i n_i = N\}$ 、 $n_i$  はエネルギー固有値  $\epsilon_i$  の 1 粒子固有状態をとる粒子数で、これは Bose 粒子系か Fermi 粒子系かで値域が変わるのだった。このため、

$$\Xi_V^{\mathrm{Bose}} = \prod_i \sum_{n=0}^{\infty} e^{-\beta(\epsilon_i - \mu)n} = \prod_i \frac{1}{1 - e^{-\beta(\epsilon_i - \mu)}}, \quad \Xi_V^{\mathrm{Fermi}} = \prod_i \left( 1 + e^{-\beta(\epsilon_i - \mu)} \right)$$

と、大分配関数も場合分けが生じる。よって 1 粒子固有状態  $i$  をとる粒子数の期待値

$$\begin{aligned} \langle n_j \rangle &\equiv \frac{1}{\Xi_V} \sum_N \sum_{\{n_i\}} \prod_i n_j e^{-\beta(\epsilon_i - \mu)n_i} \\ &= \sum_n n e^{-\beta(\epsilon_j - \mu)n} \left( \sum_n e^{-\beta(\epsilon_j - \mu)n} \right)^{-1} \\ &= \frac{1}{\beta} \frac{\partial}{\partial \mu} \ln \left( \sum_n e^{-\beta(\epsilon_j - \mu)n} \right) \end{aligned}$$

も、Bose 粒子系か Fermi 粒子系かによって

$$\begin{aligned} \langle n_j \rangle^{\mathrm{Bose}} &= -\frac{1}{\beta} \frac{\partial}{\partial \mu} \ln \left( 1 - e^{-\beta(\epsilon_j - \mu)} \right) = \frac{e^{-\beta(\epsilon_j - \mu)}}{1 - e^{-\beta(\epsilon_j - \mu)}} = \frac{1}{e^{\beta(\epsilon_j - \mu)} - 1} \\ \langle n_j \rangle^{\mathrm{Fermi}} &= \frac{1}{\beta} \frac{\partial}{\partial \mu} \ln \left( 1 + e^{-\beta(\epsilon_j - \mu)} \right) = \frac{e^{-\beta(\epsilon_j - \mu)}}{1 + e^{-\beta(\epsilon_j - \mu)}} = \frac{1}{e^{\beta(\epsilon_j - \mu)} + 1} \end{aligned}$$

と関数形が変わる。またこの結果は、相互作用のない Bose/Fermi 気体のエネルギーに対する粒子数の分布関数が

$$b_{\beta, \mu}(\epsilon) = \frac{1}{e^{\beta(\epsilon - \mu)} - 1}, \quad f_{\beta, \mu}(\epsilon) = \frac{1}{e^{\beta(\epsilon - \mu)} + 1}$$

と与えられることを示す。この分配関数をそれぞれ Bose 分布関数、Fermi 分布関数という。

相互作用のない Fermi 粒子系では  $\beta$  が大きくなるにつれて分布関数  $f_{\beta, \mu}(\epsilon)$  が階段関数  $\Theta(\mu - \epsilon)$  に近づいていく。Pauli の排他律から励起の際は必ず空いている準位へと移らなければならないが、



$\epsilon = \mu$  付近を除いて  $\epsilon < \mu$  の固有状態は全て占有されているため、励起が可能なのは  $\epsilon = \mu$  付近の状態を占める Fermi 粒子のみである。このような状態を Fermi 縮退といい、 $\epsilon_F = \mu$  を Fermi エネルギーという。

相互作用のない Bose 粒子系は、分布関数  $b_{\beta, \mu}(\epsilon)$  が正でなければならないことから系の 1 粒子基底状態  $\epsilon_0$  に対して必ず  $\mu < \epsilon_0$  が満たされる。 $\beta \gg 1$ ,  $\mu \simeq \epsilon_0$  の低温高密度の環境では、

$$\langle N \rangle = \frac{1}{e^{\beta(\epsilon_0 - \mu)} - 1} + \int_{\epsilon_0}^{\infty} d\epsilon \frac{D(\epsilon)}{e^{\beta(\epsilon - \mu)} - 1}$$

で与えられる系の粒子数の内、1 粒子励起状態を占める粒子数を表す第 2 項が小さくなり、

$$\langle N \rangle \simeq \frac{1}{e^{\beta(\epsilon_0 - \mu)} - 1}$$

というように 1 粒子基底状態をとる粒子数が巨視的量となるような状態が実現する。状態密度  $D(\epsilon)$  は  $(\epsilon - \epsilon_0)^\alpha$  ( $\alpha > 0$ ) の形で表され<sup>13)</sup>、 $\epsilon = \epsilon_0$  に比べて  $\epsilon > \epsilon_0$  の準位は圧倒的に多いにもかかわらず、そのほとんどが空になるという非常に特異な現象であり、Bose-Einstein 凝縮という。

#### 1.4.5 熱的純粋量子状態による熱平衡状態の表現

#### 1.4.6 熱ゆらぎと非平衡過程

### 1.5 径路積分

量子力学は、物理量を Hilbert 空間上の状態ベクトルに作用させる演算子に対応させることで理論が展開される。しかし、演算子形式に移行せずに物理量を数として扱ったまま量子力学を構成することもでき、ここで導入する径路積分はそのような構成法の道具として重要なものである。多粒子系を場の理論に移行して扱う際には径路積分を用いたほうが演算子形式より見通しが良いことがある。

#### 1.5.1 1 粒子系の径路積分 (導入)

1 粒子の位置  $\mathbf{x}$  から  $\mathbf{x}'$  への遷移振幅  $U(t, \mathbf{x}; t', \mathbf{x}') \equiv \langle \mathbf{x} | e^{-i\hat{H}(t-t')/\hbar} | \mathbf{x}' \rangle$  は、 $|\mathbf{x}\rangle$  の完全性関係 (1.3.2) を用いることで、

$$U(t, \mathbf{x}; t', \mathbf{x}') = \langle \mathbf{x} | \left( \prod_{k=1}^{N-1} \int_V d^3 \mathbf{x}_k e^{-i\hat{H} \Delta t / \hbar} | \mathbf{x}_k \rangle \langle \mathbf{x}_k | \right) e^{-i\hat{H} \Delta t / \hbar} | \mathbf{x}' \rangle$$

と表せ ( $\Delta t \equiv (t - t')/N$ )、さらに  $|\mathbf{x}\rangle$  の完全性関係 (1.3.2) に (1.3.3) を用いることで得られる  $|\mathbf{p}\rangle$  の完全性関係

$$\sum_{\mathbf{p}} |\mathbf{p}\rangle \langle \mathbf{p}| = \hat{I} \quad (1.5.1)$$

13) 3次元系の場合。2次元以下の系では  $\alpha \leq 0$  となり、積分が収束しない (C.1 節参照)。

を用いることで、

$$\begin{aligned} U(t, \mathbf{x}; t', \mathbf{x}') &= \langle \mathbf{x} | \left( \prod_{k=1}^{N-1} \int_V d^3 \mathbf{x}_k \sum_{\mathbf{p}_k} |\mathbf{p}_k\rangle \langle \mathbf{p}_k| e^{-i \frac{\hat{H} \Delta t}{\hbar}} |\mathbf{x}_k\rangle \langle \mathbf{x}_k| \right) \sum_{\mathbf{p}_0} |\mathbf{p}_0\rangle \langle \mathbf{p}_0| e^{-i \frac{\hat{H} \Delta t}{\hbar}} | \mathbf{x}' \rangle \\ &= \frac{1}{\sqrt{V}} \int_V \frac{d^3 \mathbf{x}_{N-1}}{\sqrt{V}} \cdots \int_V \frac{d^3 \mathbf{x}_1}{\sqrt{V}} \sum_{\mathbf{p}_{N-1}} \cdots \sum_{\mathbf{p}_0} \left( \prod_{k=0}^{N-1} e^{i \mathbf{p}_k \cdot \mathbf{x}_{k+1} / \hbar} \langle \mathbf{p}_k | e^{-i \hat{H} \Delta t / \hbar} | \mathbf{x}_k \rangle \right) \end{aligned}$$

と表せる。ここで、積分は  $\mathbf{x}_0 \equiv \mathbf{x}'$ ,  $\mathbf{x}_N \equiv \mathbf{x}$  を満たすようにとられた相空間上の任意の経路にわたって取られている。 $N \gg 1$  であれば  $e^{-i \hat{H} \Delta t / \hbar} \simeq \hat{1} - i \hat{H} \Delta t / \hbar$  と近似出来て、 $\hat{H} = H(\hat{\mathbf{x}}, \hat{\mathbf{p}})$  なら

$$\begin{aligned} \langle \mathbf{p}_k | e^{-i \hat{H} \Delta t / \hbar} | \mathbf{x}_k \rangle &\simeq \frac{1}{\sqrt{V}} \langle \mathbf{p}_k | \mathbf{x}_k \rangle - i (\Delta t / \hbar) \langle \mathbf{p}_k | \hat{H} | \mathbf{x}_k \rangle \\ &= \frac{1}{\sqrt{V}} e^{-i \mathbf{p}_k \cdot \mathbf{x}_k / \hbar} (1 - i H(\mathbf{x}_k, \mathbf{p}_k) \Delta t / \hbar) \\ &\simeq \frac{1}{\sqrt{V}} e^{-i [\mathbf{p}_k \cdot \mathbf{x}_k + H(\mathbf{x}_k, \mathbf{p}_k) \Delta t] / \hbar} \end{aligned}$$

となるので、

$$\begin{aligned} U(t, \mathbf{x}; t', \mathbf{x}') &= \frac{1}{V} \int_V \frac{d^3 \mathbf{x}_{N-1}}{V} \cdots \int_V \frac{d^3 \mathbf{x}_1}{V} \sum_{\mathbf{p}_{N-1}} \cdots \sum_{\mathbf{p}_0} \\ &\quad \times \exp \left\{ \frac{i}{\hbar} \sum_{k=0}^{N-1} \left[ \mathbf{p}_k \cdot \frac{\mathbf{x}_{k+1} - \mathbf{x}_k}{\Delta t} - H(\mathbf{x}_k, \mathbf{p}_k) \right] \Delta t \right\} \end{aligned}$$

と表されるようになる。 $V$  が十分大きいとして、

$$\frac{1}{V} \sum_{\mathbf{p}} \longrightarrow \frac{1}{(2\pi\hbar)^3} \int d^3 \mathbf{p}$$

と連続化すると、次のようにも表せる。

$$\begin{aligned} U(t, \mathbf{x}; t', \mathbf{x}') &= \int_V d^3 \mathbf{x}_{N-1} \cdots \int_V d^3 \mathbf{x}_1 \int \frac{d^3 \mathbf{p}_{N-1}}{(2\pi\hbar)^3} \cdots \int \frac{d^3 \mathbf{p}_0}{(2\pi\hbar)^3} \\ &\quad \times \exp \left\{ \frac{i}{\hbar} \sum_{k=0}^{N-1} \left[ \mathbf{p}_k \cdot \frac{\mathbf{x}_{k+1} - \mathbf{x}_k}{\Delta t} - H(\mathbf{x}_k, \mathbf{p}_k) \right] \Delta t \right\} \end{aligned}$$

この  $N \rightarrow \infty$  の極限をとり、積分としてとった径路を連続化したものを一般に径路積分という。連続化された経路にわたる積分因子を

$$\int_V d^3 \mathbf{x}_{N-1} \cdots \int_V d^3 \mathbf{x}_1 \int \frac{d^3 \mathbf{p}_{N-1}}{(2\pi\hbar)^3} \cdots \int \frac{d^3 \mathbf{p}_0}{(2\pi\hbar)^3} \longrightarrow \int \mathcal{D}\mathbf{x}(t) \mathcal{D}\mathbf{p}(t)$$

と表すことにする。 $N \rightarrow \infty$  では  $\Delta t \rightarrow 0$ 、 $(\mathbf{x}_{k+1} - \mathbf{x}_k) / \Delta t \rightarrow \dot{\mathbf{x}}(t)$  となるため、径路積分としては

$$U(t, \mathbf{x}; t', \mathbf{x}') = \frac{1}{V} \int \mathcal{D}\mathbf{x}(t'') \mathcal{D}\mathbf{p}(t'') \exp \left[ \frac{i}{\hbar} \int_{t'}^t dt'' (\mathbf{p}(t'') \cdot \dot{\mathbf{x}}(t'') - H(\mathbf{x}(t''), \mathbf{p}(t''))) \right]$$

と表される。

1 粒子系では  $H(\mathbf{x}, \mathbf{p}) = \mathbf{p}^2/2m + V(\mathbf{x})$  と表されることから、 $N \rightarrow \infty$  の極限をとる前に  $\mathbf{p}_k$  に対して積分を実行することができる。実際、 $\mathbf{p}_k$  に関与する因子について抜き出すと、

$$\begin{aligned} & \int \frac{d^3 \mathbf{p}_k}{(2\pi\hbar)^3} \exp \left[ \frac{i}{\hbar} \left( \mathbf{p}_k \cdot \frac{\mathbf{x}_{k+1} - \mathbf{x}_k}{\Delta t} - \frac{1}{2m} \mathbf{p}_k^2 \right) \Delta t \right] \\ &= \int \frac{d^3 \mathbf{p}_k}{(2\pi\hbar)^3} \exp \left\{ -\frac{i}{\hbar} \left[ \frac{1}{2m} \left| \mathbf{p}_k - m \frac{\mathbf{x}_{k+1} - \mathbf{x}_k}{\Delta t} \right|^2 - \frac{m}{2} \left| \frac{\mathbf{x}_{k+1} - \mathbf{x}_k}{\Delta t} \right|^2 \right] \Delta t \right\} \\ &= \left( \frac{m}{2\pi i \hbar \Delta t} \right)^{3/2} \exp \left( \frac{i}{\hbar} \frac{m}{2} \left| \frac{\mathbf{x}_{k+1} - \mathbf{x}_k}{\Delta t} \right|^2 \Delta t \right) \end{aligned}$$

というように Gauss 積分として実行できる。その結果、

$$U(t, \mathbf{x}; t', \mathbf{x}') = \left( \frac{m}{2\pi i \hbar \Delta t} \right)^{3N/2} \int_V d^3 \mathbf{x}_{N-1} \cdots \int_V d^3 \mathbf{x}_1 \exp \left\{ \sum_{k=0}^{N-1} \frac{i}{\hbar} \left[ \frac{m}{2} \left| \frac{\mathbf{x}_{k+1} - \mathbf{x}_k}{\Delta t} \right|^2 - V(\mathbf{x}_k) \right] \Delta t \right\}$$

と表せて、 $N \rightarrow \infty$  の極限をとって径路積分として表すと、

$$U(t, \mathbf{x}; t', \mathbf{x}') = \mathcal{N} \int \mathcal{D}\mathbf{x}(t'') \exp \left[ \frac{i}{\hbar} \int_{t'}^t dt'' \left( \frac{m}{2} \dot{\mathbf{x}}(t'')^2 - V(\mathbf{x}(t'')) \right) \right] = \mathcal{N} \int \mathcal{D}\mathbf{x} e^{iS[\mathbf{x}]/\hbar}$$

というふうに作用  $S$  を用いて遷移確率を表現できるようになる。ここで、

$$\mathcal{N} = \lim_{N \rightarrow \infty} \left( \frac{m}{2\pi i \hbar \Delta t} \right)^{\frac{3N}{2}}$$

である<sup>14)</sup>。作用  $S$  を用いたことにより、この遷移振幅で最大の寄与を与える積分因子が  $S$  が停留する経路  $\mathbf{x}(t)$  のものとわかるため、最小作用の原理の量子論的拡張となっている。

径路積分による定式化の応用例の一つに、前節における分配関数  $Z_V$  を表現できることが挙げられる。1 粒子状態のみで張られる状態空間上のトレース演算は、 $|\mathbf{x}\rangle$  の完全性関係 (1.3.2) から

$$Z_V \equiv \text{Tr}_V \left[ e^{-\beta \hat{H}} \right] = \int_V d^3 \mathbf{x} \langle \mathbf{x} | e^{-\beta \hat{H}} | \mathbf{x} \rangle$$

と表せることから、対角成分を  $\mathbf{x}_0 = \mathbf{x}$  から  $\mathbf{x}_N = \mathbf{x}$  への周回路上の径路積分として表せ、分配関数自体は任意の周回路に対する径路積分となるからである。実際に遷移振幅の場合と同様に、 $|\mathbf{x}\rangle$  と  $|\mathbf{p}\rangle$  の完全性関係 (1.3.2), (1.5.1) を用いた計算を行うと、

$$\begin{aligned} Z_V &= \int_V d^3 \mathbf{x} \langle \mathbf{x} | \left( \prod_{k=1}^{N-1} \int_V d^3 \mathbf{x}_k \sum_{\mathbf{p}_k} |\mathbf{p}_k\rangle \langle \mathbf{p}_k| e^{-\hat{H} \Delta u} |\mathbf{x}_k\rangle \langle \mathbf{x}_k| \right) \sum_{\mathbf{p}_0} |\mathbf{p}_0\rangle \langle \mathbf{p}_0| e^{-\hat{H} \Delta u} | \mathbf{x} \rangle \\ &= \int_V \frac{d^3 \mathbf{x}_{N-1}}{\sqrt{V}} \cdots \int_V \frac{d^3 \mathbf{x}_0}{\sqrt{V}} \sum_{\mathbf{p}_{N-1}} \cdots \sum_{\mathbf{p}_0} \left( \prod_{k=0}^{N-1} e^{i\mathbf{p}_k \cdot \mathbf{x}_{k+1}/\hbar} \langle \mathbf{p}_k | e^{-\hat{H} \Delta u} | \mathbf{x}_k \rangle \right) \end{aligned}$$

と表せ ( $\Delta u \equiv \beta/N$ ,  $\mathbf{x}_0 = \mathbf{x}_N = \mathbf{x}$ )、 $N \gg 1$  であれば  $e^{-\hat{H} \Delta u} = \hat{I} - \hat{H} \Delta u$  と近似できて、

$$\begin{aligned} \langle \mathbf{p}_k | e^{-\hat{H} \Delta u} | \mathbf{x}_k \rangle &\simeq \langle \mathbf{p}_k | \mathbf{x}_k \rangle - \Delta u \langle \mathbf{p}_k | \hat{H} | \mathbf{x}_k \rangle \\ &= \frac{1}{\sqrt{V}} e^{-i\mathbf{p}_k \cdot \mathbf{x}_k/\hbar} (1 - H(\mathbf{x}_k, \mathbf{p}_k) \Delta u) \\ &\simeq \frac{1}{\sqrt{V}} e^{-[i\mathbf{p}_k \cdot \mathbf{x}_k/\hbar + H(\mathbf{x}_k, \mathbf{p}_k) \Delta u]} \end{aligned}$$

14) 径路積分が有限に収まるようにこの定数が満たすべき条件が、正準量子化に代わる径路積分を用いた量子化の条件だと考えることもできる。

となるので、分配関数  $Z_V$  は

$$Z_V = \int_V \frac{d^3 \mathbf{x}_{N-1}}{V} \cdots \int_V \frac{d^3 \mathbf{x}_0}{V} \sum_{\mathbf{p}_{N-1}} \cdots \sum_{\mathbf{p}_0} \exp \left\{ \sum_{k=0}^{N-1} \left[ \frac{i}{\hbar} \mathbf{p}_k \cdot \frac{\mathbf{x}_{k+1} - \mathbf{x}_k}{\Delta u} - H(\mathbf{x}_k, \mathbf{p}_k) \right] \Delta u \right\}$$

と表され、 $\mathbf{p}_k$  を連続変数化して和を積分に置き換えれば、

$$Z_V = \int_V d^3 \mathbf{x}_{N-1} \cdots \int_V d^3 \mathbf{x}_0 \int \frac{d^3 \mathbf{p}_{N-1}}{(2\pi\hbar)^3} \cdots \int \frac{d^3 \mathbf{p}_0}{(2\pi\hbar)^3} \exp \left\{ \sum_{k=0}^{N-1} \left[ \frac{i}{\hbar} \mathbf{p}_k \cdot \frac{\mathbf{x}_{k+1} - \mathbf{x}_k}{\Delta u} - H(\mathbf{x}_k, \mathbf{p}_k) \right] \Delta u \right\}$$

となる。 $N \rightarrow \infty$  の極限では  $(\mathbf{x}_{k+1} - \mathbf{x}_k)/\Delta u \rightarrow \dot{\mathbf{x}}(u)$  とすると、

$$Z_V = \int \mathcal{D}\mathbf{x}(u) \mathcal{D}\mathbf{p}(u) \exp \left[ \int_0^\beta du \left( \frac{i}{\hbar} \mathbf{p}(u) \cdot \dot{\mathbf{x}}(u) - H(\mathbf{x}(u), \mathbf{p}(u)) \right) \right] \quad (1.5.2)$$

と径路積分で表されることがわかる。積分範囲は、周期境界条件  $\mathbf{x}(0) = \mathbf{x}(\beta)$  を満たす任意の径路である。

$U(t, \mathbf{x}; t', \mathbf{x})$  の計算のときと同様に、 $H(\mathbf{x}, \mathbf{p}) = \mathbf{p}^2/2m + V(\mathbf{x})$  を代入して、 $N \rightarrow \infty$  の極限をとる前に  $\mathbf{p}_k$  に対して積分を実行する。 $\mathbf{p}_k$  に関する因子について抜き出すと、

$$\begin{aligned} & \int \frac{d^3 \mathbf{p}_k}{(2\pi\hbar)^3} \exp \left[ \left( \frac{i}{\hbar} \mathbf{p}_k \cdot \frac{\mathbf{x}_{k+1} - \mathbf{x}_k}{\Delta u} - \frac{1}{2m} \mathbf{p}_k^2 \right) \Delta u \right] \\ &= \int \frac{d^3 \mathbf{p}_k}{(2\pi\hbar)^3} \exp \left[ - \left( \frac{1}{2m} \left| \mathbf{p}_k - i \frac{m}{\hbar} \frac{\mathbf{x}_{k+1} - \mathbf{x}_k}{\Delta u} \right|^2 + \frac{m}{2\hbar^2} \left| \frac{\mathbf{x}_{k+1} - \mathbf{x}_k}{\Delta u} \right|^2 \right) \Delta u \right] \\ &= \left( \frac{m}{2\pi\hbar^2 \Delta u} \right)^{3/2} \exp \left( - \frac{m}{2\hbar^2} \left| \frac{\mathbf{x}_{k+1} - \mathbf{x}_k}{\Delta u} \right|^2 \Delta u \right) \end{aligned}$$

というように Gauss 積分として実行できて、その結果、

$$Z_V = \left( \frac{m}{2\pi\hbar^2 \Delta t} \right)^{3N/2} \int_V d^3 \mathbf{x}_{N-1} \cdots \int_V d^3 \mathbf{x}_1 \exp \left\{ - \sum_{k=0}^{N-1} \left[ \frac{m}{2\hbar^2} \left| \frac{\mathbf{x}_{k+1} - \mathbf{x}_k}{\Delta u} \right|^2 + V(\mathbf{x}_k) \right] \Delta u \right\}$$

と表せる。 $N \rightarrow \infty$  の極限をとって径路積分として表すと、

$$Z_V = \mathcal{N}' \int \mathcal{D}\mathbf{x}(u) \exp \left[ - \int_0^\beta du \left( \frac{m}{2\hbar^2} \dot{\mathbf{x}}(u)^2 + V(\mathbf{x}(u)) \right) \right]$$

という形になる。ここで、

$$\mathcal{N}' = \lim_{N \rightarrow \infty} \left( \frac{m}{2\pi\hbar^2 \Delta u} \right)^{\frac{3N}{2}}$$

である。分配関数  $Z_V$  の値に最も寄与の大きい径路  $\mathbf{x}(u)$  では指数関数の肩の積分が停留するので、その径路は

$$0 = \frac{\delta}{\delta \mathbf{x}(u)} \left[ \int_0^\beta du \left( \frac{m}{2\hbar^2} \dot{\mathbf{x}}(u)^2 + V(\mathbf{x}(u)) \right) \right] = - \frac{m}{\hbar^2} \ddot{\mathbf{x}}(u) + \nabla V(\mathbf{x}(u))$$

という方程式で定まる。定義に  $\hbar$  を含むためにこの径路は古典的運動の軌道ではない。また、時間に当たるパラメータ  $u$  は逆温度の次元である。このような解軌道はインスタントン解と呼ばれる。

### 1.5.2 Bose 粒子系の経路積分

多粒子系における経路積分による表現は、場の演算子  $\hat{\Psi}(\mathbf{x}), \hat{\Psi}^\dagger(\mathbf{x})$  が与える量  $\Psi(\mathbf{x}), \bar{\Psi}(\mathbf{x})$  に着目して構成するのが良い。実際、多粒子系でのハミルトニアンは、1.3 節の議論から

$$H = \int_V d^3\mathbf{x} \mathcal{H}(\Psi(t, \mathbf{x}), \bar{\Psi}(t, \mathbf{x}))$$

と表せて、 $\Psi(t, \mathbf{x})$  の共役運動量として  $i\hbar\bar{\Psi}(t, \mathbf{x})$  を必ずとることができる。よって、1 粒子系での分配関数  $Z_V$  を経路積分で表した (1.5.2) における  $\mathbf{x}, \mathbf{p}$  にそれぞれ  $\Psi(t, \mathbf{x}), \bar{\Psi}(t, \mathbf{x})$  を対応させて、

$$\Xi_V = \int \mathcal{D}(\Psi, \bar{\Psi}) \exp \left\{ - \int_0^\beta du \int_V d^3\mathbf{x} [\bar{\Psi}(u, \mathbf{x}) \partial_u \Psi(u, \mathbf{x}) + \mathcal{H}(\Psi(u, \mathbf{x}), \bar{\Psi}(u, \mathbf{x})) - \mu \bar{\Psi}(u, \mathbf{x}) \Psi(u, \mathbf{x})] \right\} \quad (1.5.3)$$

で大分配関数を与えることができると考えられる。このとき、 $\Xi_V$  の積分経路には 4 次元時空の無限遠での境界条件が課されることになる。

この表式を導くため、まずは 1 準位 Bose 多体系から考えてみる。すなわちハミルトニアンが

$$\hat{\mathcal{H}} = \hat{H} - \mu \hat{N} = H(\hat{a}, \hat{a}^\dagger) - \mu \hat{a}^\dagger \hat{a} \quad ([\hat{a}, \hat{a}^\dagger] = \hat{I})$$

と表されるような系である。 $\hat{a}, \hat{a}^\dagger$  に対して次式を満たす状態  $|\alpha\rangle$  をコヒーレント状態という。

$$\hat{a}|\alpha\rangle = \alpha|\alpha\rangle \quad (\alpha \in \mathbb{C})$$

コヒーレント状態は生成消滅演算子  $\hat{a}, \hat{a}^\dagger$  の固有状態であり、1 粒子系での導入の際の  $|\mathbf{x}\rangle$  にあたる。 $|\alpha\rangle$  の完全性関係を求めるために、まずコヒーレント状態の表現を考える。生成消滅演算子に対して固有状態となることから、コヒーレント状態は異なる粒子数状態の重ね合わせであると考えられるので、

$$|\alpha\rangle = \sum_{n \geq 0} c_n (\hat{a}^\dagger)^n |0\rangle$$

と  $|\alpha\rangle$  が展開できる。すると、

$$\sum_{n \geq 0} \alpha c_n (\hat{a}^\dagger)^n |0\rangle = \alpha |\alpha\rangle = \hat{a} |\alpha\rangle = \sum_{n \geq 0} c_n \hat{a} (\hat{a}^\dagger)^n |0\rangle = \sum_{n \geq 1} n c_n (\hat{a}^\dagger)^{n-1} |0\rangle$$

となつて、最左辺と最右辺を  $\langle 0 | (\hat{a})^m$  と内積をとって比較すると、 $\alpha c_m = (m+1) c_{m+1}$  が導かれる。 $b_m \equiv (m!) c_m$  を定義すれば  $b_{m+1} = \alpha b_m$  とわかり、直ちに

$$b_m = b_0 \alpha^m, \quad c_m = \frac{\alpha^m}{m!} c_0 \quad (b_0 = (0!) c_0)$$

と一般の  $c_m$  がわかる。よってコヒーレント状態  $|\alpha\rangle$  は、

$$|\alpha\rangle = c_0 \sum_{n \geq 0} \frac{\alpha^n}{n!} (\hat{a}^\dagger)^n |0\rangle$$

と表せるとわかる。さらに規格化条件  $\langle \alpha | \alpha \rangle = 1$  も課すと、

$$|c_0|^2 \sum_{n \geq 0} \frac{(\bar{\alpha} \alpha)^n}{n!} = |c_0|^2 e^{\bar{\alpha} \alpha} = 1$$

となるため、 $c_0 = e^{-\bar{\alpha}\alpha/2}$  と定められる。コヒーレント状態  $|\alpha\rangle$  の表式が得られたので、考えている系の Fock 空間全体に対する完全性関係

$$\sum_{n \geq 0} \frac{1}{n!} (\hat{a}^\dagger)^n |0\rangle \langle 0| \hat{a}^n = \hat{I}$$

をこの  $|\alpha\rangle$  で表すことを考えると、

$$|\alpha\rangle \langle \alpha| = e^{-\bar{\alpha}\alpha} \sum_{n \geq 0} \sum_{m \geq 0} \frac{\alpha^n}{n!} \frac{\bar{\alpha}^m}{m!} (\hat{a}^\dagger)^n |0\rangle \langle 0| \hat{a}^m$$

に対して、複素平面全体での積分公式

$$\sum_{n \geq 0} \sum_{m \geq 0} \int d(\alpha, \bar{\alpha}) e^{-\bar{\alpha}\alpha} \frac{\alpha^n}{n!} \frac{\bar{\alpha}^m}{m!} = \sum_{n \geq 0} \sum_{m \geq 0} \frac{\pi}{n!} \delta_{nm}$$

が成り立つ (付録 C.1 節参照) ため、

$$\frac{1}{\pi} \int d(\alpha, \bar{\alpha}) |\alpha\rangle \langle \alpha| = \hat{I}$$

とわかる。最後に、任意の複素数  $\alpha, \beta$  に対して、コヒーレント状態  $|\alpha\rangle, |\beta\rangle$  の内積が、

$$\langle \alpha | \beta \rangle = e^{-(\bar{\alpha}\alpha + \bar{\beta}\beta)/2} \sum_{n \geq 0} \frac{(\bar{\alpha}\beta)^n}{n!} = e^{-\bar{\alpha}(\alpha - \beta)/2 + (\bar{\alpha} - \bar{\beta})\beta/2} \quad (1.5.4)$$

で与えられることを注意しておく。さて、大分配関数  $\Xi_V$  の計算に移ると、

$$\begin{aligned} \Xi_V &\equiv \text{Tr} \left[ e^{-\beta(\hat{H} - \mu\hat{N})} \right] = \frac{1}{\pi} \int d(\alpha_0, \bar{\alpha}_0) \langle \alpha_0 | e^{-\beta(\hat{H} - \mu\hat{N})} | \alpha_0 \rangle \\ &= \int \frac{d(\alpha_0, \bar{\alpha}_0)}{\pi} \langle \alpha_0 | \left( \prod_{k=1}^{N-1} \frac{d(\alpha_k, \bar{\alpha}_k)}{\pi} e^{-(\hat{H} - \mu\hat{N})\Delta u} | \alpha_k \rangle \langle \alpha_k | \right) e^{-(\hat{H} - \mu\hat{N})\Delta u} | \alpha_0 \rangle \\ &= \int \frac{d(\alpha_{N-1}, \bar{\alpha}_{N-1})}{\pi} \dots \frac{d(\alpha_0, \bar{\alpha}_0)}{\pi} \prod_{k=0}^{N-1} \langle \alpha_{k+1} | e^{-(\hat{H} - \mu\hat{N})\Delta u} | \alpha_k \rangle \end{aligned}$$

となり ( $\Delta u = \beta/N$ )、 $N \gg 1$  で  $e^{-(\hat{H} - \mu\hat{N})\Delta u} \simeq \hat{I} - (\hat{H} - \mu\hat{N})\Delta u$  の近似を行う際には、 $H(\hat{a}, \hat{a}^\dagger)$  の関数形が  $\hat{a}$  の右側に  $\hat{a}^\dagger$  がないようなもの (正規順序という) であれば、

$$\begin{aligned} &\langle \alpha_{k+1} | e^{-(\hat{H} - \mu\hat{N})\Delta u} | \alpha_k \rangle \\ &\simeq \langle \alpha_{k+1} | \left[ \hat{I} - (H(\hat{a}, \hat{a}^\dagger) - \mu\hat{a}^\dagger\hat{a}) \Delta u \right] | \alpha_k \rangle \\ &= \langle \alpha_{k+1} | \alpha_k \rangle \{ 1 - [H(\alpha_k, \bar{\alpha}_{k+1}) - \mu\bar{\alpha}_{k+1}\alpha_k] \Delta u \} \\ &\simeq \exp \left\{ -\bar{\alpha}_{k+1} \frac{\alpha_{k+1} - \alpha_k}{2} + \frac{\bar{\alpha}_{k+1} - \bar{\alpha}_k}{2} \alpha_k - [H(\alpha_k, \bar{\alpha}_{k+1}) - \mu\bar{\alpha}_{k+1}\alpha_k] \Delta u \right\} \end{aligned}$$

となるので、

$$\begin{aligned} \Xi_V &= \int \frac{d(\alpha_{N-1}, \bar{\alpha}_{N-1})}{\pi} \dots \frac{d(\alpha_0, \bar{\alpha}_0)}{\pi} \\ &\quad \times \exp \left\{ - \sum_{k=0}^N \left[ \bar{\alpha}_{k+1} \frac{\alpha_{k+1} - \alpha_k}{2\Delta u} - \frac{\bar{\alpha}_{k+1} - \bar{\alpha}_k}{2\Delta u} \alpha_k + H(\alpha_k, \bar{\alpha}_{k+1}) - \mu\bar{\alpha}_{k+1}\alpha_k \right] \Delta u \right\} \end{aligned}$$

$N \rightarrow \infty$  の極限をとって  $\alpha_k$  の添字を連続変数化し、

$$\begin{cases} \frac{\alpha_{k+1} - \alpha_k}{\Delta u} \rightarrow \partial_u \alpha(u), & \frac{\bar{\alpha}_{k+1} - \bar{\alpha}_k}{\Delta u} \rightarrow \partial_u \bar{\alpha}(u) \\ \int \frac{d(\alpha_{N-1}, \bar{\alpha}_{N-1})}{\pi} \dots \frac{d(\alpha_0, \bar{\alpha}_0)}{\pi} \rightarrow \int \mathcal{D}(\alpha, \bar{\alpha}) \end{cases}$$

と表すことにすると、

$$\Xi_V = \int \mathcal{D}(\alpha, \bar{\alpha}) \exp \left[ - \int_0^\beta du \left( \frac{1}{2} \bar{\alpha}(u) \partial_u \alpha(u) - \frac{1}{2} \alpha(u) \partial_u \alpha(u) + H(\alpha(u), \bar{\alpha}(u)) - \mu \bar{\alpha}(u) \alpha(u) \right) \right]$$

と径路積分で表されることがわかる。積分範囲は、周期境界条件  $\alpha(0) = \alpha(\beta)$ ,  $\bar{\alpha}(0) = \bar{\alpha}(\beta)$  を満たす任意の径路である。このことを用いると  $u$  の被積分関数部が

$$\begin{aligned} \int_0^\beta du \left( \frac{1}{2} \bar{\alpha}(u) \partial_u \alpha(u) - \frac{1}{2} \alpha(u) \partial_u \alpha(u) \right) &= \int_0^\beta du \left[ \bar{\alpha}(u) \partial_u \alpha(u) - \frac{1}{2} \frac{d}{du} (\bar{\alpha}(u) \alpha(u)) \right] \\ &= \int_0^\beta du \bar{\alpha}(u) \partial_u \alpha(u) - \frac{1}{2} [\bar{\alpha}(u) \alpha(u)]_0^\beta \\ &= \int_0^\beta du \bar{\alpha}(u) \partial_u \alpha(u) \end{aligned}$$

と変形できることもわかる。よって  $\Xi_V$  の径路積分はさらに簡略化できて、

$$\Xi_V = \int \mathcal{D}(\alpha, \bar{\alpha}) \exp \left[ - \int_0^\beta du (\bar{\alpha}(u) \partial_u \alpha(u) + H(\alpha(u), \bar{\alpha}(u)) - \mu \bar{\alpha}(u) \alpha(u)) \right]$$

となる。

多準位、あるいは離散無限準位の場合については、全準位の消滅演算子に対するコヒーレント状態

$$\hat{a}_i |\alpha_1, \alpha_2, \dots\rangle = \alpha_i |\alpha_1, \alpha_2, \dots\rangle, \quad |\alpha_1, \alpha_2, \dots\rangle = \exp \left( \sum_i \bar{\alpha}_i \alpha_i \right) \prod_i \sum_{n_i \geq 0} \frac{\alpha_i^{n_i}}{n_i!} (\hat{a}_i^\dagger)^{n_i} |0\rangle$$

を定義することで同様に証明される。その際の大分配関数  $\Xi_V$  の径路積分表示は

$$\Xi_V = \int \mathcal{D}(\alpha_i, \bar{\alpha}_i) \exp \left[ - \int_0^\beta du \left( \sum_i \bar{\alpha}_i(u) \partial_u \alpha_i(u) + H(\alpha_i(u), \bar{\alpha}_i(u)) - \mu \sum_i \bar{\alpha}_i(u) \alpha_i(u) \right) \right]$$

となるため、連続準位極限をとると (1.5.3) のようになることが理解できる。また (1.5.3) での積分径路は  $\Psi(0, \mathbf{x}) = \Psi(\beta, \mathbf{x})$ ,  $\bar{\Psi}(0, \mathbf{x}) = \bar{\Psi}(\beta, \mathbf{x})$  を満たす任意の径路にわたるとわかる。

### 1.5.3 Fermi 粒子系の径路積分

しかし上の議論が成り立つのは、場の演算子が交換する Bose 粒子系のときのみである。場の演算子が反交換する Fermi 粒子系での径路積分表示を次に考える。

再度、簡単のために 1 準位 Fermi 多体系<sup>15)</sup>を考える。このとき系のハミルトニアンは、

$$\hat{\mathcal{H}} = \hat{H} - \mu \hat{N} = H(\hat{a}, \hat{a}^\dagger) - \mu \hat{a}^\dagger \hat{a} \quad (\{\hat{a}, \hat{a}^\dagger\} = \hat{I})$$

15) 1 準位 Fermi 粒子系は Pauli の排他律から 2 粒子以上存在する状態が許されないので多体系とは本来呼べないが、分配関数は定義可能である (熱力学関数と結びつけることはできない)。

というように反交換する生成消滅演算子  $\hat{a}, \hat{a}^\dagger$  で表される。先のコヒーレント状態を用いた導出そのものは Fermi 系の場合でも有効だが、問題となるのはそのコヒーレント状態の性質である。

$$\hat{a}|\alpha\rangle = \alpha|\alpha\rangle \quad (\alpha \in \mathbb{C})$$

Fermi 系は Pauli の排他原理により 2 粒子以上は同じ準位を占められない。その結果、コヒーレント状態の展開は

$$|\alpha\rangle = \left(\hat{I} + c_1 \hat{a}^\dagger\right)|0\rangle$$

となり、Bose 系のときと同様に上式両辺に  $\hat{a}$  を作用させると、

$$\alpha \left(\hat{I} + c_1 \hat{a}^\dagger\right)|0\rangle = \alpha|\alpha\rangle = \hat{a}|\alpha\rangle = (\hat{a} + c_1 \hat{a} \hat{a}^\dagger)|0\rangle = c_1|0\rangle$$

となって、 $c_1 = \alpha$  とともに  $\alpha^2 = 0$  という結果が導かれる。これは反交換する消滅演算子の固有値として  $\alpha$  が積について反交換する数であることためである。このような数は Grassmann 数と呼ばれる。 $|\alpha\rangle$  に規格化条件  $\langle\alpha|\alpha\rangle = 1$  を課すと、

$$\langle 0| \left(\hat{I} + \hat{a} \bar{\alpha}\right) \left(\hat{I} + \alpha \hat{a}^\dagger\right) |0\rangle = \langle 0|0\rangle + \bar{\alpha} \alpha \langle 0|\hat{a} \hat{a}^\dagger|0\rangle = 1 + \bar{\alpha} \alpha$$

より規格化因子が  $(1 + \bar{\alpha} \alpha)^{-1/2}$  とわかるが、 $\alpha^2 = 0$  であることから、

$$e^{\bar{\alpha} \alpha} = \sum_{n \geq 0} \frac{(\bar{\alpha} \alpha)^n}{n!} = 1 + \bar{\alpha} \alpha$$

より、 $e^{-\bar{\alpha} \alpha/2}$  としてもかまわないことがわかる。すなわち規格化された Fermi 系のコヒーレント状態は、

$$|\alpha\rangle = e^{-\bar{\alpha} \alpha/2} \left(\hat{I} + \alpha \hat{a}^\dagger\right) |0\rangle$$

で与えられることになる。

今考えている系の完全性関係

$$|0\rangle\langle 0| + \hat{a}^\dagger|0\rangle\langle 0|\hat{a} = \hat{I}$$

をコヒーレント状態  $|\alpha\rangle$  で表すには、Grassmann 数を変数とする微積分演算を定義する必要がある。積分演算は積で定義されるため反交換すべきで、 $\alpha$  と独立な Grassmann 数  $\beta$  に対し、

$$\int d\alpha \alpha \beta = - \int d\alpha \beta \alpha = \beta \int d\alpha \alpha \quad (1.5.5)$$

が満たされるはずである。また、微分演算子も反交換性を満たすべきであるため、

$$\left(\frac{\partial}{\partial \alpha}\alpha\right)\beta = -\frac{\partial}{\partial \alpha}(\beta\alpha) = \beta\left(\frac{\partial}{\partial \alpha}\alpha\right) \quad (1.5.6)$$

となる。一般に 2 つの Grassmann 数の積は他の Grassmann 数に対し符号を変えず交換し、代数的に普通の数として扱える。微積分演算の結果も同じように普通の数として扱えるわけだが、(1.5.5), (1.5.6) は

$$\int d\alpha \alpha, \quad \frac{\partial}{\partial \alpha} \alpha$$

がともに Grassmann 代数の乗法単位元 1 を与えることを示している。また、乗法単位元 1 の積分は

$$\int d\alpha 1 = \int d\alpha \frac{\partial}{\partial \alpha} \alpha = -\frac{\partial}{\partial \alpha} \int d\alpha \alpha = -\frac{\partial}{\partial \alpha} 1 = 0$$



より加法単位元 0 を与える。最後の式は微分として自然な計算であり、

$$\int d\alpha \beta = -\beta \int d\alpha = 0$$

という自然な積分演算を与えるようになっている。

以上を踏まえて、 $|\alpha\rangle$  の完全性関係を導く。Grassmann 数と生成消滅演算子も反交換することと、任意の Grassmann 数  $\alpha, \beta \in \mathbb{C}$  に対して  $\overline{\alpha\beta} = \bar{\beta}\bar{\alpha}$  であることに注意すると、

$$\begin{aligned} |\alpha\rangle\langle\alpha| &= e^{-\bar{\alpha}\alpha} \left( \hat{I} + \alpha\hat{a}^\dagger \right) |0\rangle\langle 0| \left( \hat{I} + \hat{a}\bar{\alpha} \right) \\ &= e^{-\bar{\alpha}\alpha} (|0\rangle\langle 0| + \alpha\hat{a}^\dagger |0\rangle\langle 0| + |0\rangle\langle 0| \hat{a}\bar{\alpha} + \alpha\hat{a}^\dagger |0\rangle\langle 0| \hat{a}\bar{\alpha}) \\ &= e^{-\bar{\alpha}\alpha} (|0\rangle\langle 0| + \alpha\bar{\alpha}\hat{a}^\dagger |0\rangle\langle 0| \hat{a}) \end{aligned}$$

とわかり、これに対して複素平面全体での積分

$$\int d(\alpha, \bar{\alpha}) e^{-\bar{\alpha}\alpha} = \int d(\alpha, \bar{\alpha}) (1 + \alpha\bar{\alpha}) = 1, \quad \int d(\alpha, \bar{\alpha}) e^{-\bar{\alpha}\alpha} \alpha\bar{\alpha} = \int d(\alpha, \bar{\alpha}) \alpha\bar{\alpha} = 1$$

が成り立つことから (付録 C.1 節参照)、

$$\int d(\alpha, \bar{\alpha}) |\alpha\rangle\langle\alpha| = \hat{I}$$

で完全性関係が与えられるとわかる。大分配関数  $\Xi_V$  を計算する際には、トレース演算の可換性を用いるときに、

$$\begin{aligned} \text{Tr} \hat{A} &\equiv \sum_n \langle n | \hat{A} | n \rangle = \int d(\alpha, \bar{\alpha}) \sum_n \langle n | \hat{A} | \alpha \rangle \langle \alpha | n \rangle \\ &= \int d(\alpha, \bar{\alpha}) e^{-\bar{\alpha}\alpha} \sum_n \langle n | \hat{A} \left( \hat{I} + \alpha\hat{a}^\dagger \right) | 0 \rangle \langle 0 | \left( \hat{I} + \hat{a}\bar{\alpha} \right) | n \rangle \\ &= \int d(\alpha, \bar{\alpha}) e^{-\bar{\alpha}\alpha} \sum_n \langle 0 | \left( \hat{I} - \hat{a}\bar{\alpha} \right) | n \rangle \langle n | \hat{A} \left( \hat{I} + \alpha\hat{a}^\dagger \right) | 0 \rangle \\ &= \int d(\alpha, \bar{\alpha}) e^{-\bar{\alpha}\alpha} \langle -\alpha | \hat{A} | \alpha \rangle \end{aligned}$$

というように Grassmann 数の反可換性が効くことに注意すると、

$$\begin{aligned} \Xi_V &= \text{Tr} \left[ e^{-\beta(\hat{H} - \mu\hat{N})} \right] = \int d(\alpha_0, \bar{\alpha}_0) \langle -\alpha_0 | e^{-\beta(\hat{H} - \mu\hat{N})} | \alpha_0 \rangle \\ &= \int d(\alpha_0, \bar{\alpha}_0) \langle \alpha_0 | \left( \prod_{k=1}^{N-1} d(\alpha_k, \bar{\alpha}_k) e^{-(\hat{H} - \mu\hat{N})\Delta u} | \alpha_k \rangle \langle \alpha_k | \right) e^{-(\hat{H} - \mu\hat{N})\Delta u} | \alpha_0 \rangle \\ &= \int d(\alpha_{N-1}, \bar{\alpha}_{N-1}) \cdots d(\alpha_0, \bar{\alpha}_0) \prod_{k=0}^{N-1} \langle \alpha_{k+1} | e^{-(\hat{H} - \mu\hat{N})\Delta u} | \alpha_k \rangle \end{aligned}$$

となり ( $\Delta u = \beta/N$ )、 $N \gg 1$  で  $e^{-(\hat{H} - \mu\hat{N})\Delta u} \simeq \hat{I} - (\hat{H} - \mu\hat{N})\Delta u$  の近似を行う際には、コヒーレント状態の内積が Bose 粒子系と同じく (1.5.4) で与えられるため、 $\hat{H}(\hat{a}, \hat{a}^\dagger)$  の関数形が正規順序をとっていれば 1.5.2 項と同様に、

$$\begin{aligned} \Xi_V &= \int d(\alpha_{N-1}, \bar{\alpha}_{N-1}) \cdots d(\alpha_0, \bar{\alpha}_0) \\ &\quad \times \exp \left\{ - \sum_{k=0}^N \left[ \bar{\alpha}_{k+1} \frac{\alpha_{k+1} - \alpha_k}{2\Delta u} - \frac{\bar{\alpha}_{k+1} - \bar{\alpha}_k}{2\Delta u} \alpha_k + H(\alpha_k, \bar{\alpha}_{k+1}) - \mu \bar{\alpha}_{k+1} \alpha_k \right] \Delta u \right\} \end{aligned}$$

$N \rightarrow \infty$  の極限をとって  $u$  を連続変数化し、

$$\begin{cases} \frac{\alpha_{k+1} - \alpha_k}{\Delta u} \rightarrow \partial_u \alpha(u), & \frac{\bar{\alpha}_{k+1} - \bar{\alpha}_k}{\Delta u} \rightarrow \partial_u \bar{\alpha}(u) \\ \int d(\alpha_{N-1}, \bar{\alpha}_{N-1}) \cdots d(\alpha_0, \bar{\alpha}_0) \rightarrow \int \mathcal{D}(\alpha, \bar{\alpha}) \end{cases}$$

と表すことにすると、

$$\Xi_V = \int \mathcal{D}(\alpha, \bar{\alpha}) \exp \left[ - \int_0^\beta du \left( \frac{1}{2} \bar{\alpha}(u) \partial_u \alpha(u) - \frac{1}{2} \alpha(u) \partial_u \alpha(u) + H(\alpha(u), \bar{\alpha}(u)) - \mu \bar{\alpha}(u) \alpha(u) \right) \right]$$

と径路積分で表されることがわかる。積分範囲は、反周期境界条件  $\alpha_0 = -\alpha(\beta)$ ,  $\bar{\alpha}_0 = -\bar{\alpha}(\beta)$  を満たす任意の径路である。このことを用いると  $u$  の被積分関数部が

$$\begin{aligned} \int_0^\beta du \left( \frac{1}{2} \bar{\alpha}(u) \partial_u \alpha(u) - \frac{1}{2} \alpha(u) \partial_u \alpha(u) \right) &= \int_0^\beta du \left[ \bar{\alpha}(u) \partial_u \alpha(u) - \frac{1}{2} \frac{d}{du} (\bar{\alpha}(u) \alpha(u)) \right] \\ &= \int_0^\beta du \bar{\alpha}(u) \partial_u \alpha(u) - \frac{1}{2} [\bar{\alpha}(u) \alpha(u)]_0^\beta \\ &= \int_0^\beta du \bar{\alpha}(u) \partial_u \alpha(u) \end{aligned}$$

と変形できることもわかる。よって  $\Xi_V$  の径路積分はさらに簡略化できて、

$$\Xi_V = \int \mathcal{D}(\alpha, \bar{\alpha}) \exp \left[ - \int_0^\beta du (\bar{\alpha}(u) \partial_u \alpha(u) + H(\alpha(u), \bar{\alpha}(u)) - \mu \bar{\alpha}(u) \alpha(u)) \right]$$

となる。

結局 1 準位 Bose 多体系と同じ  $\Xi_V$  の表式を得たため、多準位、あるいは離散無限準位の場合について全準位の消滅演算子に対するコヒーレント状態

$$\hat{a}_i |\alpha_1, \alpha_2, \dots\rangle = \alpha_i |\alpha_1, \alpha_2, \dots\rangle, \quad |\alpha_1, \alpha_2, \dots\rangle = \exp \left( \sum_i \bar{\alpha}_i \alpha_i \right) \prod_i (\hat{I} + \alpha_i \hat{a}_i^\dagger) |0\rangle$$

を定義して示される多準位系での  $\Xi_V$ 、および連続準位極限をとったときの  $\Xi_V$  も Bose 粒子系のもと同じ形式 (1.5.3) になる。しかし、Bose 粒子系の場合と違って Fermi 粒子系の場合  $\Psi(u, \mathbf{x}), \bar{\Psi}(u, \mathbf{x})$  は Grassmann 数である。また、足し上げる径路は  $\Psi(0, \mathbf{x}) = -\Psi(\beta, \mathbf{x})$ ,  $\bar{\Psi}(0, \mathbf{x}) = -\bar{\Psi}(\beta, \mathbf{x})$  を満たす任意の径路になる。

#### 1.5.4 スピン系の径路積分

## 第 2 章 量子多体系の解析手法

量子多体系を解析する際に用いられる理論手法・定理または公式等について述べる。

### 2.1 Rayleigh-Schrödinger の摂動論

多体状態の時間発展は 1 粒子系の量子力学と全く同じ形式の Schrödinger 方程式で記述されることから、1 粒子系の量子力学で用いられる解析手法はそのまま多体系にも適用ができる。本節では、いわゆる「時間に依存しない摂動論」である Rayleigh-Schrödinger の摂動論について述べる。

系のハミルトニアンを  $\hat{H}(\lambda) = \hat{H}_0 + \lambda\hat{V}$  と分け、 $\hat{V}$  を摂動項として摂動パラメータ  $\lambda$  のべきで  $\hat{H}(\lambda)$  の固有状態およびエネルギー固有値を展開する。すなわち、 $\hat{H}(\lambda)$  の固有値方程式  $\hat{H}(\lambda)|\psi\rangle = E|\psi\rangle$  について、

$$|\psi\rangle = |\psi^{(0)}\rangle + \lambda|\psi^{(1)}\rangle + \lambda^2|\psi^{(2)}\rangle + \dots, \quad E = E^{(0)} + \lambda E^{(1)} + \lambda^2 E^{(2)} + \dots$$

と  $\lambda$  のべきで展開されるとして、

$$\begin{aligned} (\hat{H}_0 + \lambda\hat{V}) (|\psi^{(0)}\rangle + \lambda|\psi^{(1)}\rangle + \lambda^2|\psi^{(2)}\rangle + \dots) \\ = (E^{(0)} + \lambda E^{(1)} + \lambda^2 E^{(2)} + \dots) (|\psi^{(0)}\rangle + \lambda|\psi^{(1)}\rangle + \lambda^2|\psi^{(2)}\rangle + \dots) \end{aligned}$$

の両辺の  $\lambda$  の同次項の係数を比較して各展開係数を求める。

$\hat{H}_0$  の固有状態とエネルギー固有値をそれぞれ  $|n\rangle$ ,  $E_n$  とおき、まず縮退がない場合を考える。まず 0 次項からは

$$\hat{H}_0|\psi^{(0)}\rangle = E^{(0)}|\psi^{(0)}\rangle \quad (2.1.1)$$

が得られて、 $|\psi^{(0)}\rangle$  は  $\hat{H}_0$  の固有状態  $|n\rangle$ 、 $E^{(0)}$  は対応するエネルギー固有値  $E_n$  とわかる。次に 1 次項を比較すると、

$$\hat{H}_0|\psi^{(1)}\rangle + \hat{V}|\psi^{(0)}\rangle = E^{(0)}|\psi^{(1)}\rangle + E^{(1)}|\psi^{(0)}\rangle \quad (2.1.2)$$

を得る。両辺  $|\psi^{(0)}\rangle = |n\rangle$  と内積をとり、 $E^{(0)} = E_n$  を代入すると  $E^{(1)} = \langle n|\hat{V}|n\rangle (\equiv V_{nn})$  を得る。 $|n\rangle$  と直交する別の固有状態  $|m\rangle$  ( $m \neq n$ ) との内積をとると、

$$E_m \langle m|\psi^{(1)}\rangle + \langle m|\hat{V}|n\rangle = E_n \langle m|\psi^{(1)}\rangle \quad \therefore \langle m|\psi^{(1)}\rangle = \frac{V_{mn}}{E_n - E_m} \quad (V_{mn} \equiv \langle m|\hat{V}|n\rangle)$$

を得る。固有状態  $|n\rangle$  の全体は完全系を張るから、この関係式より

$$|\psi^{(1)}\rangle = \sum_m |m\rangle \langle m|\psi^{(1)}\rangle = C|n\rangle + \sum_{m \neq n} \frac{V_{mn}}{E_n - E_m} |m\rangle$$

を得る ( $C$  は適当な複素数)。2 次項の比較からは、

$$\hat{H}_0|\psi^{(2)}\rangle + \hat{V}|\psi^{(1)}\rangle = E^{(0)}|\psi^{(2)}\rangle + E^{(1)}|\psi^{(1)}\rangle + E^{(2)}|\psi^{(0)}\rangle$$

が得られて、両辺  $|n\rangle$  との内積をとった式に 0,1 次項の結果を用いると、

$$E^{(2)} = \sum_{m \neq n} \frac{|V_{mn}|^2}{E_n - E_m}$$

を得る。 $|n\rangle$  が基底状態のときにはこの項は必ず負になる。

$\hat{H}_0$  の固有状態に縮退があった場合を考える。 $|n_1\rangle, |n_2\rangle, \dots$  が全てエネルギー固有値  $E_n$  で縮退していて、また全て直交しているとする、 $\lambda$  の 1 次項の係数比較の結果 (2.1.1) からは

$$|\psi^{(0)}\rangle = \sum_i c_i |n_i\rangle$$

が結論づけられる ( $E^{(0)} = E_n$  は同じ)。1 次の係数比較 (2.1.2) では、 $|n_i\rangle$  との内積から

$$\sum_i c_i \langle n_j | \hat{V} | n_i \rangle = E^{(1)} c_j$$

が得られる。この固有値方程式を解いて得られる固有ベクトル  $(c_1, c_2, \dots)$  に対応した  $|\psi^{(0)}\rangle$  ごとに、系は縮退が解ける。

## 2.2 時間に依存する摂動論

この節では、相互作用描像に移ることで、時間変化する系に対して摂動論が展開できることを説明する。

### 2.2.1 相互作用描像

ハミルトニアンが  $\hat{H}(t) = \hat{H}_0 + \hat{V}(t)$  で与えられるような、時間に依存する外場が加わる系を考える際には、Schrödinger 描像の任意の状態  $|\psi(t)\rangle$  および任意の演算子  $\hat{A}$  に対する次のような変換で移る新たな描像が有用である：

$$|\psi(t)\rangle_I \equiv e^{i\hat{H}_0 t/\hbar} |\psi(t)\rangle, \quad \hat{A}_I(t) \equiv e^{i\hat{H}_0 t/\hbar} \hat{A} e^{-i\hat{H}_0 t/\hbar}$$

この時間発展の描像は相互作用描像<sup>1)</sup>という。相互作用描像においては状態と演算子が両方時間発展するため、Schrödinger 方程式と Heisenberg 方程式の両方で時間発展が記述されることになる。Schrödinger 方程式については、

$$\begin{aligned} i\hbar \frac{d}{dt} |\psi(t)\rangle &= i\hbar \frac{d}{dt} \left( e^{-i\hat{H}_0 t/\hbar} |\psi(t)\rangle_I \right) \\ &= i\hbar e^{-i\hat{H}_0 t/\hbar} \frac{d}{dt} |\psi(t)\rangle_I + e^{-i\hat{H}_0 t/\hbar} \hat{H}_0 |\psi(t)\rangle_I \\ \hat{H}(t) |\psi(t)\rangle &= \left( \hat{H}_0 + \hat{V}(t) \right) e^{-i\hat{H}_0 t/\hbar} |\psi(t)\rangle_I \\ &= e^{-i\hat{H}_0 t/\hbar} \left( \hat{H}_0 + \hat{V}_I(t) \right) |\psi(t)\rangle_I \end{aligned}$$

より、

$$i\hbar \frac{d}{dt} |\psi(t)\rangle_I = \hat{V}_I(t) |\psi(t)\rangle_I \quad (2.2.1)$$

1) 以降、添え字のない状態と演算子は Schrödinger 描像のものとする。

が従う。Heisenberg 方程式は次で与えられる。

$$i\hbar \frac{d}{dt} \hat{A}_I(t) = [\hat{A}_I(t), \hat{H}_0]$$

Schrödinger 方程式 (2.2.1) の解は、

$$|\psi(t)\rangle_I = T \exp \left[ -\frac{i}{\hbar} \int_0^t dt' \hat{V}_I(t') \right] |\psi(0)\rangle_I$$

で与えられるとすぐわかる。\$|\psi(0)\rangle\_I = |\psi(0)\rangle\$ であり、\$T\$-指数関数は

$$\begin{aligned} T \exp \left[ -\frac{i}{\hbar} \int_0^t dt' \hat{V}_I(t') \right] &\equiv \hat{I} + \sum_{n=1}^{\infty} \frac{1}{n!} \left( -\frac{i}{\hbar} \right)^n \int_0^t dt_1 \int_0^{t_1} dt_2 \cdots \int_0^{t_{n-1}} dt_n T [\hat{V}_I(t_1) \hat{V}_I(t_2) \cdots \hat{V}_I(t_n)] \\ &= \hat{I} + \sum_{n=1}^{\infty} \left( -\frac{i}{\hbar} \right)^n \int_0^t dt_1 \int_0^{t_1} dt_2 \cdots \int_0^{t_{n-1}} dt_n \hat{V}_I(t_1) \hat{V}_I(t_2) \cdots \hat{V}_I(t_n) \end{aligned}$$

で与えられるから、この級数展開を打ち切ることによって摂動論が導かれる。

## 2.2.2 Fermi の黄金律

2.2.1 項の摂動論において、無摂動項 \$\hat{H}\_0\$ の固有状態と対応するエネルギー固有値をそれぞれ \$|n\rangle, E\_n\$ とおくと、始状態が \$|\psi(0)\rangle = |n\rangle\$ のときに \$|\psi(t)\rangle = |j\rangle\$ となる確率 \$P\_{n \rightarrow j}(t)\$ は、

$$\begin{aligned} P_{n \rightarrow j}(t) &\equiv \left| {}_I \langle j(t) | T \exp \left[ -\frac{i}{\hbar} \int_0^t dt' \hat{V}_I(t') \right] | n \rangle \right|^2 \\ &= \left| \delta_{jn} + \sum_{n=1}^{\infty} \left( -\frac{i}{\hbar} \right)^n \int_0^t dt_1 \int_0^{t_1} dt_2 \cdots \int_0^{t_{n-1}} dt_n \langle j | \hat{V}_I(t_1) \hat{V}_I(t_2) \cdots \hat{V}_I(t_n) | n \rangle \right|^2 \end{aligned}$$

で与えられるとわかる。外場が時間に陽に依存しない場合に \$\hat{V}\$ の 3 次以上を無視して \$j \neq n\$ の場合の \$P\_{n \rightarrow j}(t)\$ を計算すると、

$$\begin{aligned} P_{n \rightarrow j}(t) &= \left| \frac{1}{i\hbar} \int_0^t dt_1 \langle j | \hat{V}_I(t_1) | n \rangle \right|^2 + \mathcal{O}(V^3) \\ &= \left| \frac{1}{i\hbar} \langle j | \hat{V} | n \rangle \int_0^t dt_1 e^{i(E_j - E_n)t_1/\hbar} \right|^2 + \mathcal{O}(V^3) \\ &= \left| \frac{\langle j | \hat{V} | n \rangle}{E_j - E_n} \left( 1 - e^{i(E_j - E_n)t/\hbar} \right) \right|^2 + \mathcal{O}(V^3) \\ &= \frac{2|V_{jn}|^2}{(E_j - E_n)^2} \left( 1 - \cos \frac{(E_j - E_n)t}{\hbar} \right) + \mathcal{O}(V^3) \\ &= \frac{4|V_{jn}|^2}{(E_j - E_n)^2} \sin^2 \frac{(E_j - E_n)t}{2\hbar} + \mathcal{O}(V^3) \end{aligned}$$

となる (\$V\_{jn} \equiv \langle j | \hat{V} | n \rangle\$)。一般的に多体系のエネルギー固有値は連続的で、エネルギースペクトル上で固有状態は密に分布している。あるエネルギー幅に属する状態への遷移確率 \$P\_{n \rightarrow \{j\}}(t)\$ を考えた場合には、系の状態密度 \$\rho(E)\$ を用いて

$$P_{n \rightarrow \{j\}}(t) \simeq \int \frac{4|V_{jn}(E_j)|^2}{(E_j - E_n)^2} \sin^2 \frac{(E_j - E_n)t}{2\hbar} \rho(E_j) dE_j \quad (2.2.2)$$

とすればよい。このとき様々な終状態  $|j\rangle$  を考えるために  $V_{jn}$  には  $E_j$  への依存性が現れている<sup>2)</sup>。

次の関数  $f(x)$  は、 $\alpha \rightarrow \infty$  でデルタ関数  $\delta(x)$  のようにふるまう。

$$f(x) = \left( \frac{\sin \alpha x}{x} \right)^2$$

また、 $x$  全域でこの  $f(x)$  を積分すると、

$$\int_{-\infty}^{\infty} f(x) dx = \text{Re} \left[ \int_{-\infty}^{\infty} \frac{1 - e^{2i\alpha x}}{2x^2} dx \right] = \pi\alpha$$

となる (Jordan の補題と留数定理を用いた) から、 $\alpha \rightarrow \infty$  での  $f(x)$  より正確なふるまいは、

$$f(x) \simeq \pi\alpha\delta(x)$$

と表される。(2.2.2) の  $P_{n \rightarrow \{j\}}(t)$  には  $\alpha = t$  とした  $f\left(\frac{E_j - E_n}{2\hbar}\right)$  が含まれているから、十分大きい  $t$  では

$$\begin{aligned} P_{n \rightarrow \{j\}}(t) &\simeq \int \frac{\pi t |V_{jn}(E_j)|^2}{\hbar^2} \delta\left(\frac{E_j - E_n}{2\hbar}\right) \rho(E_j) dE_j \\ &= \frac{2\pi t |V_{jn}(E_n)|^2}{\hbar} \rho(E_n) \end{aligned}$$

というふるまうことになる。このように、十分長い時間外場のもとで時間発展したときの遷移は、始状態に非常に近い状態への遷移が支配的となる。 $P_{n \rightarrow j}(t)$  を時間で微分して単位時間あたりの遷移率  $w_{n \rightarrow j}(t)$  を求めると、

$$w_{n \rightarrow \{j\}}(t) = \frac{d}{dt} P_{n \rightarrow \{j\}}(t) \simeq \frac{2\pi |V_{jn}|^2}{\hbar} \rho(E_n)$$

と一定になる。この式、および終状態を1つの  $|j\rangle$  に絞った際の表式

$$w_{n \rightarrow j}(t) = \frac{2\pi |V_{jn}|^2}{\hbar} \delta(E_j - E_n) \quad (2.2.3)$$

は Fermi の黄金律と呼ばれる。

実際には  $t \rightarrow \infty$  とすることは不可能であるため、Fermi の黄金律 (2.2.3) に現れたデルタ関数はあくまで見做しのものであることに注意する。 $\alpha$  を十分に大きくして  $f(x) \sim \pi\alpha\delta(x)$  とみなせるようになって、 $f(0) = \alpha^2$  より実際には

$$\Delta x \sim \frac{\pi}{\alpha}$$

のピーク幅が  $x = 0$  周りにある。よって、Fermi の黄金律 (2.2.3) におけるデルタ関数  $\delta(E_j - E_n)$  にも、実際には  $E_j = E_n$  周りで

$$\Delta E \sim \frac{2\pi\hbar}{t} = \frac{h}{t}$$

のピーク幅が存在している。

---

2) 本来は  $|j\rangle$  は  $E_j$  のみに依存するものではなく、同じエネルギー固有値  $E_j$  をとる状態が互いに直交して縮退している。しかし熱力学的な系を考えていけば典型性によりそれらの状態は全て同じような性質を満たすことが期待されるため、 $V_{jn} = \langle j|\hat{V}|n\rangle$  は  $E_j$  のみに依存する。

### 2.2.3 調和摂動

摂動項  $\hat{V}(t)$  が

$$\hat{V}(t) = \hat{A}e^{-i\omega t} + \hat{A}^\dagger e^{i\omega t}$$

というように周波数  $\omega$  の振動で表されていた場合には、 $\hat{V}(t)$  の 1 次の摂動論で求めた遷移確率  $P_{n \rightarrow j}(t)$  ( $n \neq j$ ) が、

$$\begin{aligned} P_{n \rightarrow j}(t) &= \left| \frac{1}{i\hbar} \int_0^t dt_1 \langle j | \hat{V}_I(t_1) | n \rangle \right|^2 + \mathcal{O}(V^3) \\ &= \left| \frac{1}{i\hbar} \left( \langle j | \hat{A} | n \rangle \int_0^t dt_1 e^{i(E_j - E_n - \hbar\omega)t_1/\hbar} + \langle j | \hat{A}^\dagger | n \rangle \int_0^t dt_1 e^{i(E_j - E_n + \hbar\omega)t_1/\hbar} \right) \right|^2 + \mathcal{O}(V^3) \\ &= \left| \frac{\langle j | \hat{A} | n \rangle}{E_j - E_n - \hbar\omega} \left( 1 - e^{\frac{i}{\hbar}(E_j - E_n - \hbar\omega)t} \right) + \frac{\langle n | \hat{A} | j \rangle}{E_j - E_n + \hbar\omega} \left( 1 - e^{\frac{i}{\hbar}(E_j - E_n + \hbar\omega)t} \right) \right|^2 + \mathcal{O}(V^3) \\ &= \frac{4|A_{jn}|^2}{(E_j - E_n - \hbar\omega)^2} \sin^2 \frac{(E_j - E_n - \hbar\omega)t}{2\hbar} + \frac{4|A_{nj}|^2}{(E_j - E_n + \hbar\omega)^2} \sin^2 \frac{(E_j - E_n + \hbar\omega)t}{2\hbar} \\ &\quad + \frac{(A_{jn})^2}{(E_j - E_n)^2 - (\hbar\omega)^2} \left( 1 - e^{\frac{i}{\hbar}(E_j - E_n + \hbar\omega)t} \right) \left( 1 - e^{-\frac{i}{\hbar}(E_j - E_n - \hbar\omega)t} \right) \\ &\quad + \frac{(A_{jn}^*)^2}{(E_j - E_n)^2 - (\hbar\omega)^2} \left( 1 - e^{-\frac{i}{\hbar}(E_j - E_n + \hbar\omega)t} \right) \left( 1 - e^{\frac{i}{\hbar}(E_j - E_n - \hbar\omega)t} \right) + \mathcal{O}(V^3) \end{aligned}$$

となるので、遷移過程は  $E_j \simeq E_n \pm \hbar\omega$  の準位へのものが支配的であるとわかる。この条件を満たす  $E_j$  について

$$1 - e^{\frac{i}{\hbar}(E_j - E_n \mp \hbar\omega)t} \ll 1, \quad E_j - E_n \mp \hbar\omega \ll E_j E_n \pm \hbar\omega$$

が成り立つから、上式の  $P_{n \rightarrow j}(t)$  は近似的に

$$P_{n \rightarrow j}(t) \simeq \begin{cases} \frac{4|A_{jn}|^2}{(E_j - E_n - \hbar\omega)^2} \sin^2 \frac{(E_j - E_n - \hbar\omega)t}{2\hbar} & (E_j \simeq E_n + \hbar\omega) \\ \frac{4|A_{nj}|^2}{(E_j - E_n + \hbar\omega)^2} \sin^2 \frac{(E_j - E_n + \hbar\omega)t}{2\hbar} & (E_j \simeq E_n - \hbar\omega) \\ 0 & (\text{otherwise}) \end{cases}$$

と表せる。この表式には前節の議論をそのまま適用することができるので、 $t$  が十分大きい場合には

$$\begin{aligned} P_{n \rightarrow j}(t) &= \frac{2\pi t |A_{jn}|^2}{\hbar} \delta(E_j - E_n - \hbar\omega) + \frac{2\pi t |A_{nj}|^2}{\hbar} \delta(E_j - E_n + \hbar\omega) \\ \therefore w_{n \rightarrow j}(t) &= \frac{2\pi |A_{jn}|^2}{\hbar} \delta(E_j - E_n - \hbar\omega) + \frac{2\pi |A_{nj}|^2}{\hbar} \delta(E_j - E_n + \hbar\omega) \end{aligned}$$

と単位時間当たりの遷移率の表式が表せるとわかる。このように周波数  $\omega$  で振動する弱い摂動が加わった場合には、 $\hbar\omega$  だけエネルギーを吸収・放出する過程が生じる。

## 2.3 線形応答理論

定常系に物理量  $X$  で表される外力を加えたとき、応答としてある物理量  $y$  が変化する、という関係が成り立っているときを考える。線形応答理論はこのような関係のうち、

$$\begin{aligned} & (\text{外力 } X_1 \text{ に対し応答 } Y_1 \text{ が得られる}) \wedge (\text{外力 } X_2 \text{ に対し応答 } Y_2 \text{ が得られる}) \\ & \implies \text{外力 } \alpha X_1 + \beta X_2 \text{ に対し応答 } \alpha Y_1 + \beta Y_2 \text{ が得られる} \end{aligned}$$

という重ね合わせの原理が成り立つものを扱うものである。

### 2.3.1 応答関数

外力および応答が時間的に変化させられる場合、撃力的な外力  $X(t) = \delta(t - t_0)$  に対する応答が  $Y(t) = \phi_{YX}(t, t_0)$  で与えられたなら、重ね合わせの原理から一般の外力  $X(t)$  に対する応答  $Y(t)$  は

$$Y(t) = \int_{-\infty}^t dt' X(t') \phi_{YX}(t, t') \quad (2.3.1)$$

で表せることになる。外力と応答の関係を与える上で  $\phi_{YX}(t, t')$  は重要であり、応答関数と呼ばれる。ここで、 $t < t_0$  で  $\phi_{YX}(t, t_0) = 0$  であるという物理的に自然な条件を用いて積分範囲に制限をつけていることに注意する。この仮定は因果律と呼ばれる。

系が時間的に一様であれば、

$$\phi_{YX}(t, t_0) = \phi_{YX}(t - t_0)$$

というように応答は外力との相対的な時間にしか依存しなくなる。このとき (2.3.1) は、

$$\begin{aligned} Y(t) &= \int_{-\infty}^t dt' X(t') \phi_{YX}(t - t') \\ &= \int_0^{\infty} dt' X(t - t') \phi_{YX}(t') \end{aligned}$$

という畳み込み積分で表されているので、Fourier 級数展開

$$\begin{aligned} X(t) &= \int_{-\infty}^{\infty} d\omega \tilde{X}(\omega) e^{-i\omega t}, & Y(t) &= \int_{-\infty}^{\infty} d\omega \tilde{Y}(\omega) e^{-i\omega t}, \\ \tilde{X}(\omega) &\equiv \frac{1}{2\pi} \int_{-\infty}^{\infty} dt X(t) e^{i\omega t}, & \tilde{Y}(\omega) &\equiv \frac{1}{2\pi} \int_{-\infty}^{\infty} dt Y(t) e^{i\omega t} \end{aligned}$$

を考えると、

$$\begin{aligned} \tilde{Y}(\omega) &= \frac{1}{2\pi} \int_{-\infty}^{\infty} dt \int_0^{\infty} dt' \int_{-\infty}^{\infty} d\omega' \tilde{X}(\omega') e^{-i\omega'(t-t')} \phi_{YX}(t') e^{i\omega t} \\ &= \int_0^{\infty} dt' \int_{-\infty}^{\infty} d\omega' \tilde{X}(\omega') e^{i\omega' t'} \phi_{YX}(t') \delta(\omega - \omega') \\ &= \tilde{X}(\omega) \int_0^{\infty} dt' \phi_{YX}(t') e^{i\omega t'} \end{aligned}$$

となることがわかる。

$$\chi_{YX}(\omega) \equiv \int_0^{\infty} dt \phi_{YX}(t) e^{i\omega t}$$



は複素アドミッタンスと呼ばれ、 $t \rightarrow \infty$  での収束因子を顕わにすると<sup>3)</sup>

$$\chi_{YX}(\omega) = \lim_{\delta \rightarrow +0} \int_0^\infty dt \phi_{YX}(t) e^{-i\omega t} e^{-\delta t} \quad (2.3.2)$$

で与えられる。 $\chi_{YX}(\omega)$  から  $\phi_{YX}(t)$  への Fourier 逆変換

$$\phi_{YX}(t) = \frac{1}{2\pi} \int_{-\infty}^\infty d\omega \chi_{YX}(\omega) e^{i\omega t}$$

を (2.3.2) に代入すると、

$$\begin{aligned} \chi_{YX}(\omega) &= \lim_{\delta \rightarrow +0} \int_0^\infty dt \left( \frac{1}{2\pi} \int_{-\infty}^\infty d\omega' \phi_{YX}(\omega') e^{i\omega' t} \right) e^{-i\omega t} e^{-\delta t} \\ &= \lim_{\delta \rightarrow +0} \frac{1}{2\pi} \int_{-\infty}^\infty d\omega' \int_0^\infty dt \chi_{YX}(\omega') e^{i(\omega' - \omega + i\delta)t} \\ &= - \lim_{\delta \rightarrow +0} \frac{i}{2\pi} \int_{-\infty}^\infty d\omega' \chi_{YX}(\omega') \frac{1}{\omega' - \omega + i\delta} \end{aligned}$$

と表せることがわかる。主値 (principal value) を用いた公式 (付録 C.1 節参照)

$$\lim_{\delta \rightarrow +0} \int_{-\infty}^\infty d\omega' \frac{f(\omega')}{\omega' - \omega + i\delta} = \mathcal{P} \int_{-\infty}^\infty d\omega' \frac{f(\omega')}{\omega' - \omega} - i\pi f(\omega) \quad (2.3.3)$$

を用いてさらに変形すると、

$$\begin{aligned} \chi_{YX}(\omega) &= -\frac{i}{2\pi} \mathcal{P} \int_{-\infty}^\infty d\omega' \frac{\chi_{YX}(\omega')}{\omega' - \omega} + \frac{1}{2} \chi_{YX}(\omega) \\ \therefore \chi_{YX}(\omega) &= -\frac{i}{\pi} \mathcal{P} \int_{-\infty}^\infty d\omega' \frac{\chi_{YX}(\omega')}{\omega' - \omega} \end{aligned}$$

であることがわかる。 $\chi_{YX}(\omega)$  の実部と虚部を

$$\chi'_{YX}(\omega) \equiv \text{Re} \chi_{YX}(\omega), \quad \chi''_{YX}(\omega) \equiv \text{Im} \chi_{YX}(\omega)$$

と表すと、

$$\chi'_{YX}(\omega) = \frac{1}{\pi} \mathcal{P} \int_{-\infty}^\infty d\omega' \frac{\chi''_{YX}(\omega')}{\omega' - \omega}, \quad \chi''_{YX}(\omega) = -\frac{1}{\pi} \mathcal{P} \int_{-\infty}^\infty d\omega' \frac{\chi'_{YX}(\omega')}{\omega' - \omega}$$

を得る。この関係式は Kramers-Krönig の関係式と呼ばれる。

### 2.3.2 量子系の線形応答と Green-久保の公式

量子多体系に線形応答理論を適用する際には、ハミルトニアン  $\hat{H}_0$  で熱平衡状態にあった系を外力の項

$$\hat{H}_1(t) = -AF(t)$$

を加えたハミルトニアンで時間発展させる場合を考えることが多い。密度行列での記述でも

$$\hat{\rho}_I(t) \equiv e^{i\hat{H}_0 t/\hbar} \hat{\rho}(t) e^{-i\hat{H}_0 t/\hbar}$$

---

3) 収束因子  $\delta$  は、撃力的な外力  $A(t, \mathbf{x}) = \delta(t - t_0) \delta^{(3)}(\mathbf{x} - \mathbf{x}_0)$  の影響が十分先の未来に残らないことを表したものである。

により相互作用描像 (2.2.1 項参照) に移行することができ、このときの von Neumann 方程式 (1.4.5) は、相互作用描像での Schrödinger 方程式 (2.2.1) より、

$$\begin{aligned} i\hbar \frac{d}{dt} \hat{\rho}_I(t) &= i\hbar \sum_i p_i \frac{d}{dt} \left( e^{i\hat{H}_0 t/\hbar} |\psi_i(t)\rangle \langle \psi_i(t)| e^{-i\hat{H}_0 t/\hbar} \right) \\ &= \sum_i p_i \left[ \left( i\hbar \frac{d}{dt} |\psi_i(t)\rangle \right)_I \langle \psi_i(t)| + |\psi_i(t)\rangle_I \left( i\hbar \frac{d}{dt} \langle \psi_i(t)| \right) \right] \\ &= \hat{H}_1(t) \hat{\rho}_I(t) - \hat{\rho}_I(t) \hat{H}_1(t) = [\hat{H}_1(t), \hat{\rho}_I(t)] \end{aligned}$$

となる。線形応答理論を適用するにはさらに

- ・ 始状態である熱平衡状態  $\hat{\rho}_{\text{eq}}$  は  $t = -\infty$  におく。
- ・ 状態の変化  $\delta\hat{\rho}(t) \equiv \hat{\rho}_I(t) - \hat{\rho}_{\text{eq}}$  は  $\hat{H}_1(t)$  の 1 次までの展開で近似する。

ことを仮定する必要がある。 $\hat{H}_1(t)\delta\hat{\rho}_I(t)$  は  $\hat{H}_1(t)$  の 2 次の項であるため、この仮定のもとでの von Neumann 方程式は

$$i\hbar \frac{d}{dt} \delta\hat{\rho}_I(t) = \hat{H}_1(t) \hat{\rho}_{\text{I,eq}}(t) - \hat{\rho}_{\text{I,eq}}(t) \hat{H}_1(t) = -e^{i\hat{H}_0 t/\hbar} [\hat{A}, \hat{\rho}_{\text{eq}}] e^{-i\hat{H}_0 t/\hbar} F(t)$$

となる。 $\hat{\rho}_{\text{eq}}$  は  $\hat{H}_0$  での時間発展のもとで定常的であるから  $[\hat{\rho}_{\text{eq}}, \hat{H}_0] = 0$  であることに注意すると、この解は

$$\delta\hat{\rho}_I(t) = -\frac{1}{i\hbar} \int_{-\infty}^t dt' e^{i\hat{H}_0 t'/\hbar} [\hat{A}, \hat{\rho}_{\text{eq}}] e^{-i\hat{H}_0 t'/\hbar} F(t')$$

で与えられ、Schrödinger 描像に戻れば、系の密度行列は、

$$\hat{\rho}(t) = \hat{\rho}_{\text{eq}} - \frac{1}{i\hbar} \int_{-\infty}^t dt' e^{-i\hat{H}_0(t-t')/\hbar} [\hat{A}, \hat{\rho}_{\text{eq}}] e^{i\hat{H}_0(t-t')/\hbar} F(t')$$

で与えられることになる。応答  $B(t)$  はその物理量を与える演算子  $\hat{B}$  の期待値をこの  $\hat{\rho}(t)$  を用いて計算すれば得られる。重ね合わせが成り立つために外力のない熱平衡状態での  $\hat{B}$  の期待値は 0 であることに注意すると、

$$\begin{aligned} \langle B(t) \rangle &= \text{Tr} [\hat{B} \hat{\rho}(t)] \\ &= \text{Tr} [\hat{B} \hat{\rho}_{\text{eq}}] - \frac{1}{i\hbar} \int_{-\infty}^t dt' \text{Tr} \left\{ \hat{B} e^{-i\hat{H}_0(t-t')/\hbar} [\hat{A}, \hat{\rho}_{\text{eq}}] e^{i\hat{H}_0(t-t')/\hbar} \right\} F(t') \\ &= -\frac{1}{i\hbar} \int_{-\infty}^t dt' \text{Tr} \left[ \hat{B}_I(t-t') (\hat{A} \hat{\rho}_{\text{eq}} - \hat{\rho}_{\text{eq}} \hat{A}) \right] F(t') \\ &= -\frac{1}{i\hbar} \int_{-\infty}^t dt' \text{Tr} \left[ (\hat{B}_I(t-t') \hat{A} - \hat{A} \hat{B}_I(t-t')) \hat{\rho}_{\text{eq}} \right] F(t') \\ &= -\frac{1}{i\hbar} \int_{-\infty}^t dt' \left\langle [\hat{B}_I(t-t'), \hat{A}] \right\rangle_{\text{eq}} F(t') \end{aligned} \tag{2.3.4}$$

となる。

撃力的な外力に対する応答が応答関数を与えたから、(2.3.4) において  $F(t) = \delta(t - t_0)$  とすれば  $\langle B(t) \rangle$  は応答関数を与えるはずである。代入して計算すると、

$$\begin{aligned} \phi(t - t_0) &= -\frac{1}{i\hbar} \int_{-\infty}^t dt' \left\langle [\hat{B}_I(t-t'), \hat{A}] \right\rangle_{\text{eq}} \delta(t' - t_0) \\ &= -\frac{1}{i\hbar} \left\langle [\hat{B}_I(t - t_0), \hat{A}] \right\rangle_{\text{eq}} \Theta(t - t_0) \end{aligned}$$

となることがわかる。相互作用描像であることを明記した演算子は、結局無摂動ハミルトニアンの下での熱平均としてしか計算しないため熱平衡状態での Heisenberg 描像演算子としてみなしてもよく、以降描像を明記しない。このようにして与えられる応答関数の量子論的表式は Green-久保の公式と呼ばれる。複素アドミッタンスの量子論的表式は

$$\chi(\omega) = -\frac{1}{i\hbar} \int_0^\infty dt \left\langle [\hat{B}(t), \hat{A}] \right\rangle_{\text{eq}} e^{i\omega t}$$

で与えられ、 $\langle B(t) \rangle$  と  $F(t)$  の Fourier 成分

$$\langle \tilde{B}(\omega) \rangle \equiv \int_{-\infty}^\infty dt \langle B(t) \rangle e^{i\omega t}, \quad \tilde{F}(\omega) \equiv \int_{-\infty}^\infty dt F(t) e^{i\omega t}$$

との間で  $\langle \tilde{B}(\omega) \rangle = \chi(\omega) \tilde{F}(\omega)$  を満たす。

### 2.3.3 Onsager の相反定理

## 2.4 位相幾何・多様体論的な解析手法

$m$  個のパラメータ  $R = \{R^\mu | \mu = 1, 2, \dots, m\} \in \mathbb{R}^m$  で指定される状態  $|\varphi(R)\rangle$  は一般に  $R$  を局所座標系とする位相多様体をなすと考えられ、多様体論の処方で解析を行うことができる。

### 2.4.1 Berry 接続・曲率

パラメータを動かした際の  $|\varphi(R)\rangle$  の変化を特徴づける量としてまず、パラメータ空間上の点列  $R_1, R_2 \dots R_n$  に対して次のような量を導入する。

$$e^\phi \equiv \prod_{i=1}^n \langle \varphi(R_{i+1}) | \varphi(R_i) \rangle$$

1 次元軌道  $C$  をなすように点列を連続化した際にこの量は、

$$\begin{aligned} \phi &= \sum_{j=1}^{n-1} \ln \langle \varphi(R_{j+1}) | \varphi(R_j) \rangle \\ &= \sum_{j=1}^{n-1} \ln [1 + (\langle \varphi(R_{j+1}) | - \langle \varphi(R_j) |) | \varphi(R_j) \rangle] \\ &\simeq \sum_{j=1}^{n-1} \ln \left[ 1 + \sum_{\mu=1}^m \langle \partial^\mu \varphi(R_j) | \varphi(R_j) \rangle (R_{j+1}^\mu - R_j^\mu) \right] \quad \left( \partial^\mu \equiv \frac{\partial}{\partial R^\mu} \right) \\ &\simeq \sum_{j=1}^{n-1} \sum_{\mu=1}^m \langle \partial^\mu \varphi(R_j) | \varphi(R_j) \rangle (R_{j+1}^\mu - R_j^\mu) \\ &\longrightarrow \int_C \sum_{\mu=1}^m dR^\mu \langle \partial^\mu \varphi(R) | \varphi(R) \rangle \end{aligned} \tag{2.4.1}$$

というように線積分で表せるようになり、被積分ベクトル場

$$A^\mu(R) \equiv \langle \partial^\mu \varphi(R) | \varphi(R) \rangle$$

が局所的な幾何学的位相を反映した量として得られる。 $A^\mu(R)$  は Berry 接続と呼ばれ、

$$\begin{aligned} 0 &= \frac{\partial}{\partial R^\mu} \langle \varphi(R) | \varphi(R) \rangle = \langle \partial^\mu \varphi(R) | \varphi(R) \rangle + \langle \varphi(R) | \partial^\mu \varphi(R) \rangle \\ &= \langle \partial^\mu \varphi(R) | \varphi(R) \rangle + (\langle \partial^\mu \varphi(R) | \varphi(R) \rangle)^* \\ &= 2\text{Re} \langle \partial^\mu \varphi(R) | \varphi(R) \rangle \end{aligned}$$

より、

$$A^\mu(R) = i \text{Im} \langle \partial^\mu \varphi(R) | \varphi(R) \rangle = -i \text{Im} \langle \varphi(R) | \partial^\mu \varphi(R) \rangle$$

である。またこれを積分した  $\phi$  も純虚数である。

(2.4.1) において積分経路  $C$  が閉経路であった場合には Stokes の定理を適用することができて、 $C$  を境界にもつ向き付け可能な 2 次元多様体  $S$  に対して、

$$\begin{aligned} \phi &= \int_S \sum_{\mu, \nu} dR^\mu \wedge dR^\nu \partial^\mu A^\nu(R) \\ &= \int_S \sum_{\mu, \nu} dR^\mu \wedge dR^\nu [\langle \partial^\mu \varphi(R) | \partial^\nu \varphi(R) \rangle + \langle \partial^\mu \partial^\nu \varphi(R) | \varphi(R) \rangle] \\ &= \int_S \sum_{\mu, \nu} dR^\mu \wedge dR^\nu \langle \partial^\mu \varphi(R) | \partial^\nu \varphi(R) \rangle \quad (\because dR^\nu \wedge dR^\mu = -dR^\mu \wedge dR^\nu) \end{aligned}$$

が成り立つとわかる (微分形式については C.4 節参照)。

$$\Omega^{\mu\nu}(R) \equiv \langle \partial^\mu \varphi(R) | \partial^\nu \varphi(R) \rangle$$

も  $A^\mu(R)$  と同様に  $|\varphi(R)\rangle$  の局所的なパラメータ依存性のみから定まる、幾何学的位相を反映した量である。また、 $\Omega^{\mu\nu}$  の反対称成分は

$$\begin{aligned} \sigma^{\mu\nu} &\equiv \frac{1}{2} (\Omega^{\mu\nu} - \Omega^{\nu\mu}) \\ &= \frac{1}{2} (\langle \partial^\mu \varphi | \partial^\nu \varphi \rangle - \langle \partial^\nu \varphi | \partial^\mu \varphi \rangle) \\ &= \frac{1}{2} [\langle \partial^\mu \varphi | \partial^\nu \varphi \rangle - (\langle \partial^\mu \varphi | \partial^\nu \varphi \rangle)^*] \\ &= i \text{Im} \langle \partial^\mu \varphi | \partial^\nu \varphi \rangle \end{aligned}$$

というように  $\Omega^{\mu\nu}(R)$  の虚部に一致し、かつ

$$\phi = \int_S \sum_{\mu, \nu} dR^\mu \wedge dR^\nu \sigma^{\mu\nu}(R)$$

で  $\phi$  を与える。 $\sigma^{\mu\nu}(R)$  は Berry 曲率と呼ばれる。

## 2.4.2 幾何学的位相と物理量

状態ベクトルの位相には不定性があり、その効果が物理量に現れることはない。このことを原理的に用いて、パラメータに依存した位相変換

$$|\varphi(R)\rangle \longrightarrow |\varphi'(R)\rangle = e^{i\alpha(R)} |\varphi(R)\rangle \quad (\alpha : \mathbb{R}^m \rightarrow \mathbb{R})$$

に対してパラメータ空間の幾何学的位相に関連した量が不変に保たれるかどうかで、それらが物理量への寄与として現れるかどうかを判断できると考えられる。上で導入した  $\phi, A^\mu, \Omega^{\mu\nu}, \sigma^{\mu\nu}$  はそれぞれ、

$$\begin{aligned}
\phi &\longrightarrow \phi' \equiv i \oint \sum_\mu dR^\mu \langle \partial^\mu \varphi'(R) | \varphi'(R) \rangle \\
&= \oint \sum_\mu dR^\mu [\langle \partial^\mu \varphi(R) | \varphi(R) \rangle - i \partial^\mu \alpha(R)] \\
&= \phi - i \oint d\alpha = \phi \\
A^\mu(R) &\longrightarrow A'^\mu(R) = i \operatorname{Im} \langle \partial^\mu \varphi'(R) | \varphi'(R) \rangle \\
&= i \operatorname{Im} \langle \partial^\mu \varphi(R) | \varphi(R) \rangle - i \partial^\mu \alpha(R) \\
&= A^\mu(R) - i \partial^\mu \alpha(R) \\
\Omega^{\mu\nu}(R) &\longrightarrow \Omega'^{\mu\nu}(R) \equiv \langle \partial^\mu \varphi' | \partial^\nu \varphi' \rangle \\
&= \langle \partial^\mu \varphi | \partial^\nu \varphi \rangle - i \partial^\mu \alpha \langle \varphi | \partial^\nu \varphi \rangle + i \partial^\nu \alpha \langle \partial^\mu \varphi | \varphi \rangle + \partial^\mu \alpha \partial^\nu \alpha \\
&= \Omega^{\mu\nu} + i A^\nu \partial^\mu \alpha + i A^\mu \partial^\nu \alpha + \partial^\mu \alpha \partial^\nu \alpha \\
\sigma^{\mu\nu}(R) &\longrightarrow \sigma'^{\mu\nu}(R) \equiv i \operatorname{Im} \langle \partial^\mu \varphi'(R) | \partial^\nu \varphi'(R) \rangle \\
&= i \operatorname{Im} \Omega'^{\mu\nu}(R) \\
&= i \operatorname{Im} \Omega^{\mu\nu}(R) = \sigma^{\mu\nu}
\end{aligned}$$

というように変換されるため、 $\phi, \sigma^{\mu\nu}(R)$  は物理量に寄与しう一方  $A^\mu(R), \Omega^{\mu\nu}(R)$  は寄与をもってはいけなことがわかる。しかし、例えば  $A^\mu(R), \Omega^{\mu\nu}(R)$  を組み合わせて構成される

$$Q^{\mu\nu} \equiv \Omega^{\mu\nu} + A^\mu A^\nu$$

という量は、パラメータに依存した位相変換の下では  $A^\mu, \Omega^{\mu\nu}$  の変化が相殺し合うことで不変に保たれる。 $\sigma^{\mu\nu}(R)$  および  $Q^{\mu\nu}(R)$  は<sup>4)</sup>、 $|\phi(R)\rangle$  の局所的なパラメータ依存性のみから定まり、かつ物理量として観測できる可能性があるため重要である。

### 2.4.3 Chern の定理

### 2.4.4 断熱変化における幾何学的位相

## 2.5 Green 関数の方法

座標の並進変換に対して不変な線形演算子  $\mathcal{L}$  についての非斉次線形偏微分方程式

$$\mathcal{L}u(x) = f(x) \quad (x \in D, D \subset \mathbb{R}^n) \quad (2.5.1)$$

の解を求める方法として、次で定義される Green 関数  $g(x - x')$  を用いるものがよく知られている。

$$\mathcal{L}g(x - x') \equiv \delta^{(n)}(x - x')$$

---

4) 定義からわかるように、 $Q^{\mu\nu}$  の反対称成分および虚部が  $\sigma^{\mu\nu}$  である。

この  $g(x - x')$  を用いると、 $\mathcal{L}$  の作用の線形性から (2.5.1) の解が

$$u(x) = \int_D d^n x' f(x') g(x - x')$$

で与えられる。偏微分方程式は境界条件によりその解が変化するが、その自由度は Green 関数に含まれている。

このようにして定義された Green 関数  $g(x - x')$  は、斉次線形偏微分方程式

$$\mathcal{L}u(x) = 0$$

の  $x \neq x'$  での解  $u(x')$  となっている。一般に  $g(x - x')$  により、 $D$  の部分空間  $S$  で定義された解  $u(x)$  に対して、

$$u(x) = \int_S d^n x' g(x - x') u(x') \quad (x \notin S)$$

で  $S$  に含まれない領域での解  $u(x)$  を与えることができる。実際、上式の最右辺に  $\mathcal{L}$  を作用させると、

$$\begin{aligned} \mathcal{L} \int_S d^n x' g(x - x') u(x') &= \int_S d^n x' \mathcal{L} g(x - x') u(x') \\ &= \int_S d^n x' \delta^{(n)}(x - x') u(x') \\ &= 0 \quad (\because x \notin S) \end{aligned}$$

となって、この  $u(x)$  は解になっている。このように  $g(x - x')$  は線形方程式の解  $u(x)$  についての相対的な情報をもっており、この性質を指して伝播関数 (プロパゲーター) と呼ぶこともある。

### 2.5.1 実時間 Green 関数

量子論を通して多体系を場  $\Psi(t, \mathbf{x})$  を変数にもつ系に読み替えることができるとわかった。古典論における  $\Psi(t, \mathbf{x})$  の運動方程式は一般に

$$\left( i\hbar \frac{\partial}{\partial t} + \frac{\hbar^2}{2m} \nabla^2 - \chi[\Psi(t, \mathbf{x})] \right) \Psi(t, \mathbf{x}) = 0 \quad (2.5.2)$$

という形で表される。 $\chi[\Psi(t, \mathbf{x})]$  は  $\Psi(t, \mathbf{x})$  の汎関数であるため方程式は  $\chi = 0$  のときを除き一般には非線形である。 $\chi = 0$  の線形な運動方程式を満たす場  $\Psi(t, \mathbf{x})$  で表される系は、重ね合わせの原理を満たすため相互作用のない系であるが、その場合の (2.5.2) に対して

$$\left( i\hbar \frac{\partial}{\partial t} + \frac{\hbar^2}{2m} \nabla^2 \right) g_0(t, \mathbf{x}; t', \mathbf{x}') = \delta(t - t') \delta^{(3)}(\mathbf{x} - \mathbf{x}') \quad (2.5.3)$$

で Green 関数が定義される。

このように古典論で定義された Green 関数は、量子論において演算子の期待値として与えることができる<sup>5)</sup>：

$$\begin{aligned} \text{遅延 Green 関数} : g_0^R(t, \mathbf{x}; t', \mathbf{x}') &\equiv \frac{1}{i\hbar} \left\langle \left[ \hat{\Psi}(t, \mathbf{x}), \hat{\Psi}^\dagger(t', \mathbf{x}') \right]_{-\zeta} \right\rangle \Theta(t - t') \\ \text{先進 Green 関数} : g_0^A(t, \mathbf{x}; t', \mathbf{x}') &\equiv -\frac{1}{i\hbar} \left\langle \left[ \hat{\Psi}(t, \mathbf{x}), \hat{\Psi}^\dagger(t', \mathbf{x}') \right]_{-\zeta} \right\rangle \Theta(t' - t) \\ \text{因果 Green 関数} : g_0^C(t, \mathbf{x}; t', \mathbf{x}') &\equiv -\frac{1}{i\hbar} \left\langle T \left[ \hat{\Psi}(t, \mathbf{x}) \hat{\Psi}^\dagger(t', \mathbf{x}') \right] \right\rangle \end{aligned}$$

5) 以降は Heisenberg 描像をとるため、期待値は常に時刻の原点での状態のものである。

ここでの  $\hat{\Psi}(t, \mathbf{x}), \hat{\Psi}^\dagger(t, \mathbf{x})$  は

$$\hat{H}_0 = -\frac{\hbar^2}{2m} \int_V d^3\mathbf{x} \hat{\Psi}^\dagger(\mathbf{x}) \nabla^2 \hat{\Psi}(\mathbf{x})$$

に対する Heisenberg 描像の演算子

$$\hat{\Psi}(t, \mathbf{x}) = e^{i\hat{H}_0 t/\hbar} \hat{\Psi}(\mathbf{x}) e^{-i\hat{H}_0 t/\hbar}, \quad \hat{\Psi}^\dagger(t, \mathbf{x}) = e^{i\hat{H}_0 t/\hbar} \hat{\Psi}^\dagger(\mathbf{x}) e^{-i\hat{H}_0 t/\hbar}$$

である。また、時間順序積  $T$  は

$$T[\hat{a}(t)\hat{a}^\dagger(t')] = \begin{cases} \hat{a}(t)\hat{a}^\dagger(t') & (t > t') \\ \zeta \hat{a}^\dagger(t')\hat{a}(t) & (t < t') \end{cases}$$

として定義されている。 $g_0^R(t, \mathbf{x}; t', \mathbf{x}'), g_0^A(t, \mathbf{x}; t', \mathbf{x}')$  が (2.5.3) を満たすことは、 $\hat{\Psi}(\mathbf{x}), \hat{\Psi}^\dagger(\mathbf{x})$  の (反) 交換関係と Heisenberg 方程式 (1.3.7)、および

$$\frac{d}{dt} \Theta(t - t') = \delta(t - t')$$

から確認できる。 $g_0^C(t, \mathbf{x}; t', \mathbf{x}')$  についても、 $\Theta(t - t')$  を用いて

$$g_0^C(t, \mathbf{x}; t', \mathbf{x}') = -\frac{1}{i\hbar} \left[ \langle \hat{\Psi}(t, \mathbf{x}) \hat{\Psi}^\dagger(t', \mathbf{x}') \rangle \Theta(t - t') + \zeta \langle \hat{\Psi}^\dagger(t', \mathbf{x}') \hat{\Psi}(t, \mathbf{x}) \rangle \Theta(t' - t) \right]$$

と表すことで (2.5.3) を満たすことが確認できる。また、 $\hat{\Psi}(\mathbf{x}), \hat{\Psi}^\dagger(\mathbf{x})$  が生成消滅演算子であることから、 $\langle \hat{\Psi}(t, \mathbf{x}) \hat{\Psi}^\dagger(t', \mathbf{x}') \rangle$  や  $\langle \hat{\Psi}^\dagger(t', \mathbf{x}') \hat{\Psi}(t, \mathbf{x}) \rangle$  は  $(t, \mathbf{x})$  と  $(t', \mathbf{x}')$  の間で粒子が伝播する確率と考えられるので、上記の  $g_0(t, \mathbf{x}; t', \mathbf{x}')$  は確かに伝播関数としての性質を持っていることもわかる。

### 自由粒子系の実時間 Green 関数

定義式 (2.5.3) からわかるように、Green 関数  $g_0(t, \mathbf{x}; t', \mathbf{x}')$  は時刻・座標の原点のとり方に依らない。そのため Green 関数の関数形は

$$g_0(t, \mathbf{x}; t', \mathbf{x}') = g_0(t - t', \mathbf{x} - \mathbf{x}')$$

となっており、次のように Fourier 成分を定義することができる。

$$\tilde{g}_0(\mathbf{k}, \omega) \equiv \int_{-\infty}^{\infty} dt \int_V d^3\mathbf{x} g_0(t, \mathbf{x}) e^{-i(\mathbf{k} \cdot \mathbf{x} - \omega t)}$$

(1.3.5) からこの場合の系のハミルトニアン  $\hat{H}_0$  は

$$\begin{aligned} \hat{H}_0 &= -\frac{\hbar^2}{2m} \int_V d^3\mathbf{x} \hat{\Psi}^\dagger(\mathbf{x}) \nabla^2 \hat{\Psi}(\mathbf{x}) \\ &= -\frac{\hbar^2}{2m} \int_V d^3\mathbf{x} \frac{1}{V} \sum_{\mathbf{p}, \mathbf{p}'} \left( -\frac{\mathbf{p}^2}{\hbar^2} \right)^2 \hat{a}_{\mathbf{p}'}^\dagger \hat{a}_{\mathbf{p}} e^{i(\mathbf{p} - \mathbf{p}') \cdot \mathbf{x}} \\ &= \sum_{\mathbf{p}} \frac{\mathbf{p}^2}{2m} \hat{a}_{\mathbf{p}}^\dagger \hat{a}_{\mathbf{p}} \quad \left( \because \frac{1}{V} \int_V d^3\mathbf{x} e^{i(\mathbf{p} - \mathbf{p}') \cdot \mathbf{x}} = \delta_{\mathbf{p}\mathbf{p}'} \right) \end{aligned}$$

と表されるようになり<sup>6)</sup>、

$$[\hat{\mathbf{p}}, \hat{H}] = \sum_{\mathbf{p}'} \frac{\mathbf{p}'^2}{2m} [\hat{a}_{\mathbf{p}}, \hat{a}_{\mathbf{p}'}^\dagger \hat{a}_{\mathbf{p}'}] = \sum_{\mathbf{p}} \frac{\mathbf{p}^2}{2m} \hat{a}_{\mathbf{p}}$$

6)  $\hat{H}^{(1)} = \hat{\mathbf{p}}^2/2m$  の表式から 1.3.1 項の処方でも粒子系に定義域を拡張することでも得られる。

と交換関係がわかるので、 $\epsilon_{\mathbf{p}} = \mathbf{p}^2/2m$  とおくと Heisenberg 描像での  $\hat{a}_{\mathbf{p}}$  が

$$\hat{a}_{\mathbf{p}}(t) = e^{i\hat{H}t/\hbar} \hat{a}_{\mathbf{p}} e^{-i\hat{H}t/\hbar} = \sum_{n=0}^{\infty} \frac{1}{n!} \left( -\frac{i}{\hbar} \epsilon_{\mathbf{p}} t \right)^n \hat{a}_{\mathbf{p}} = \hat{a}_{\mathbf{p}} e^{-i\epsilon_{\mathbf{p}} t/\hbar}$$

と表されるとわかる (BCH 公式を用いた。C.3 節参照)。また、同様にして

$$\hat{a}_{\mathbf{p}}^{\dagger}(t) = \hat{a}_{\mathbf{p}}^{\dagger} e^{i\epsilon_{\mathbf{p}} t/\hbar}$$

であることもわかるので、Heisenberg 描像での場の演算子が

$$\hat{\Psi}(t, \mathbf{x}) = \frac{1}{\sqrt{V}} \sum_{\mathbf{p}} \hat{a}_{\mathbf{p}} e^{i(\mathbf{p} \cdot \mathbf{x} - \epsilon_{\mathbf{p}} t)/\hbar}, \quad \hat{\Psi}^{\dagger}(t, \mathbf{x}) = \frac{1}{\sqrt{V}} \sum_{\mathbf{p}} \hat{a}_{\mathbf{p}}^{\dagger} e^{-i(\mathbf{p} \cdot \mathbf{x} - \epsilon_{\mathbf{p}} t)/\hbar}$$

と展開されると示される。上の Green 関数の内  $g^R, g^A$  にこれらの場の演算子の展開を用いると、

$$\begin{aligned} g_0^R(t-t', \mathbf{x}-\mathbf{x}') &= \frac{1}{i\hbar} \frac{1}{V} \sum_{\mathbf{p}, \mathbf{p}'} \left\langle \left[ \hat{a}_{\mathbf{p}}, \hat{a}_{\mathbf{p}'}^{\dagger} \right]_{-\zeta} \right\rangle e^{i(\mathbf{p} \cdot \mathbf{x} - \mathbf{p}' \cdot \mathbf{x}')/\hbar} e^{-i(\epsilon_{\mathbf{p}} t - \epsilon_{\mathbf{p}'} t')/\hbar} e^{-\delta t} \Theta(t-t') \\ &= \frac{1}{i\hbar} \frac{1}{V} \sum_{\mathbf{p}} e^{i\mathbf{p} \cdot (\mathbf{x} - \mathbf{x}')/\hbar} e^{-i\epsilon_{\mathbf{p}}(t-t')/\hbar} e^{-\delta t} \Theta(t-t') \quad \left( \left[ \hat{a}_{\mathbf{p}}, \hat{a}_{\mathbf{p}'}^{\dagger} \right]_{-\zeta} = \delta_{\mathbf{p}\mathbf{p}'} \right) \end{aligned}$$

同様にして、

$$g_0^A(t, \mathbf{x}) = \frac{1}{i\hbar} \frac{1}{V} \sum_{\mathbf{p}} e^{i\mathbf{p} \cdot \mathbf{x}/\hbar} e^{-i\epsilon_{\mathbf{p}} t/\hbar} e^{\delta t} \Theta(-t)$$

とわかる ( $t \rightarrow \pm\infty$  で  $g(t, \mathbf{x}) \rightarrow 0$  となるのが物理的に自然であるため収束因子  $e^{\mp\delta t}$  をかけている)。

以上から、Fourier 変換の結果は

$$\tilde{g}_0^R(\mathbf{k}, \omega) = \frac{1}{i\hbar} \int_0^{\infty} dt e^{-i(\epsilon_{\hbar\mathbf{k}}/\hbar - \omega - i\delta)t} = \frac{1}{\hbar\omega - \epsilon_{\hbar\mathbf{k}} + i\delta}, \quad \tilde{g}_0^A(\mathbf{k}, \omega) = \frac{1}{\hbar\omega - \epsilon_{\hbar\mathbf{k}} - i\delta}$$

で与えられるとわかる。またこれらの表式からは

$$(\hbar\omega - \epsilon_{\hbar\mathbf{k}} + i\delta) \tilde{g}_0^R(\mathbf{k}, \omega) = 1, \quad (\hbar\omega - \epsilon_{\hbar\mathbf{k}} - i\delta) \tilde{g}_0^A(\mathbf{k}, \omega) = 1$$

が得られ、両辺 Fourier 逆変換を行うことでこの Green 関数の定義式 (2.5.3) が確かに導かれる。

$g_0^C(t, \mathbf{x})$  についても同様に上の手順で Fourier 成分の計算を試みると、

$$\begin{aligned} g_0^C(t-t', \mathbf{x}-\mathbf{x}') &= \frac{1}{i\hbar} \frac{1}{V} \sum_{\mathbf{p}, \mathbf{p}'} \left( \left\langle \hat{a}_{\mathbf{p}} \hat{a}_{\mathbf{p}'}^{\dagger} \right\rangle e^{i(\mathbf{p} \cdot \mathbf{x} - \mathbf{p}' \cdot \mathbf{x}')/\hbar} e^{i(\epsilon_{\mathbf{p}} t - \epsilon_{\mathbf{p}'} t')/\hbar} e^{-\delta(t-t')} \Theta(t-t') \right. \\ &\quad \left. + \zeta \left\langle \hat{a}_{\mathbf{p}'}^{\dagger} \hat{a}_{\mathbf{p}} \right\rangle e^{i(\mathbf{p} \cdot \mathbf{x} - \mathbf{p}' \cdot \mathbf{x}')/\hbar} e^{i(\epsilon_{\mathbf{p}} t - \epsilon_{\mathbf{p}'} t')/\hbar} e^{\delta(t-t')} \Theta(t'-t) \right) \end{aligned}$$

となる。期待値を熱平衡状態  $(T, \mu; V)$  に対してとるならば、この系は相互作用のない系であるので、Fermi 粒子系であれば Fermi 分布関数  $f_{\beta, \mu}(\epsilon)$  と反交換関係より

$$\left\langle \hat{a}_{\mathbf{p}'}^{\dagger} \hat{a}_{\mathbf{p}} \right\rangle = f_{\beta, \mu}(\epsilon_{\mathbf{p}}) \delta_{\mathbf{p}\mathbf{p}'}, \quad \left\langle \hat{a}_{\mathbf{p}} \hat{a}_{\mathbf{p}'}^{\dagger} \right\rangle = [1 - f_{\beta, \mu}(\epsilon_{\mathbf{p}})] \delta_{\mathbf{p}\mathbf{p}'}$$

Bose 粒子系であれば Bose 分布関数  $b_{\beta, \mu}(\epsilon)$  と交換関係より

$$\left\langle \hat{a}_{\mathbf{p}'}^{\dagger} \hat{a}_{\mathbf{p}} \right\rangle = b_{\beta, \mu}(\epsilon_{\mathbf{p}}) \delta_{\mathbf{p}\mathbf{p}'}, \quad \left\langle \hat{a}_{\mathbf{p}} \hat{a}_{\mathbf{p}'}^{\dagger} \right\rangle = [1 + b_{\beta, \mu}(\epsilon_{\mathbf{p}})] \delta_{\mathbf{p}\mathbf{p}'}$$



と期待値部分を表せる (1.4.4 項参照)。よって  $g^C(t, \mathbf{x})$  は、Fermi 粒子系の場合、

$$g_0^C(t, \mathbf{x}) = -\frac{1}{i\hbar} \frac{1}{V} \sum_{\mathbf{p}} e^{i\mathbf{p}\cdot\mathbf{x}/\hbar} e^{-i\epsilon_{\mathbf{p}}t/\hbar} \{[1 - f_{\beta,\mu}(\epsilon_{\mathbf{p}})] e^{-\delta t} \Theta(t) - f_{\beta,\mu}(\epsilon_{\mathbf{p}}) e^{\delta t} \Theta(-t)\}$$

Bose 粒子系の場合は、

$$g_0^C(t, \mathbf{x}) = -\frac{1}{i\hbar} \frac{1}{V} \sum_{\mathbf{p}} e^{i\mathbf{p}\cdot\mathbf{x}/\hbar} e^{-i\epsilon_{\mathbf{p}}t/\hbar} \{[1 + b_{\beta,\mu}(\epsilon_{\mathbf{p}})] e^{-\delta t} \Theta(t) + b_{\beta,\mu}(\epsilon_{\mathbf{p}}) e^{\delta t} \Theta(-t)\}$$

と表せる。特に  $T = 0$  のときには、Fermi 分布関数は階段関数  $\Theta(\epsilon_F - \epsilon)$  になるため、

$$\epsilon_F \equiv \frac{p_F^2}{2m}$$

で定義される Fermi 運動量  $p_F$  により

$$g_0^C(t, \mathbf{x}) = \frac{1}{i\hbar} \frac{1}{V} \sum_{\mathbf{p}} e^{i\mathbf{p}\cdot\mathbf{x}/\hbar} e^{-i\epsilon_{\mathbf{p}}t/\hbar} [\Theta(|\mathbf{p}| - p_F) e^{-\delta t} \Theta(t) - \Theta(p_F - |\mathbf{p}|) e^{\delta t} \Theta(-t)]$$

と表せ、また Bose 分布関数は  $b_{\beta,\mu}(\epsilon) \rightarrow 0 (\beta \rightarrow \infty)$  であるから、

$$g_0^C(t, \mathbf{x}) = \frac{1}{i\hbar} \frac{1}{V} \sum_{\mathbf{p}} e^{i\mathbf{p}\cdot\mathbf{x}/\hbar} e^{-i\epsilon_{\mathbf{p}}t/\hbar} e^{-\delta t} \Theta(t) = g_0^R(t, \mathbf{x})$$

というように遅延 Green 関数に一致する。 $\tilde{g}^C(\mathbf{k}, \omega)$  はこれらを Fourier 変換すれば求まり、

$$\tilde{g}_0^C(\mathbf{k}, \omega) = \begin{cases} \frac{1 - f_{\beta,\mu}(\epsilon_{\hbar\mathbf{k}})}{\hbar\omega - \epsilon_{\hbar\mathbf{k}} + i\delta} + \frac{f_{\beta,\mu}(\epsilon_{\hbar\mathbf{k}})}{\hbar\omega - \epsilon_{\hbar\mathbf{k}} - i\delta} & (\text{Fermi 粒子系}) \\ \frac{1 + b_{\beta,\mu}(\epsilon_{\hbar\mathbf{k}})}{\hbar\omega - \epsilon_{\hbar\mathbf{k}} + i\delta} - \frac{b_{\beta,\mu}(\epsilon_{\hbar\mathbf{k}})}{\hbar\omega - \epsilon_{\hbar\mathbf{k}} - i\delta} & (\text{Bose 粒子系}) \end{cases}$$

特に絶対零度  $T = 0$  では、Fermi 粒子系であれば  $p_F \equiv \hbar k_F$  で定義される Fermi 波数  $k_F$  を用いて、

$$\tilde{g}_0^C(\mathbf{k}, \omega) = \frac{\Theta(\hbar|\mathbf{k}| - p_F)}{\hbar\omega - \epsilon_{\hbar\mathbf{k}} + i\delta} + \frac{\Theta(p_F - \hbar|\mathbf{k}|)}{\hbar\omega - \epsilon_{\hbar\mathbf{k}} - i\delta} = \frac{1}{\hbar\omega - \epsilon_{\hbar\mathbf{k}} + i\delta \text{sgn}(k - k_F)}$$

また Bose 粒子系であれば  $\tilde{g}_0^C(\mathbf{k}, \omega) = \tilde{g}_0^R(\mathbf{k}, \omega)$  で表される。Fermi 粒子系の  $\tilde{g}_0^C$  も、

$$\text{Re}\tilde{g}_0^C(\mathbf{k}, \omega) = \text{Re}\tilde{g}_0^R(\mathbf{k}, \omega) = \text{Re}\tilde{g}_0^A(\mathbf{k}, \omega), \quad \text{Im}\tilde{g}_0^C(\mathbf{k}, \omega) = \begin{cases} \text{Im}\tilde{g}_0^R(\mathbf{k}, \omega) & (k > k_F) \\ \text{Im}\tilde{g}_0^A(\mathbf{k}, \omega) & (k < k_F) \end{cases}$$

というように定義域の一部で  $\tilde{g}_0^R, \tilde{g}_0^A$  と一致していて、 $\tilde{g}_0^A = (\tilde{g}_0^R)^*$  より  $(\mathbf{k}, \omega)$  全域での  $\tilde{g}_0^R$  の情報をもっていることがわかる。これは複素関数として  $\tilde{g}_0^C(\mathbf{k}, \omega)$  が  $\tilde{g}_0^R(\mathbf{k}, \omega), \tilde{g}_0^A(\mathbf{k}, \omega)$  と解析接続することにあたる (複素解析については C.1 節参照)。

主値に関する公式 (2.3.3) から、遅延 Green 関数の虚部はデルタ関数

$$\text{Im}\tilde{g}_0^R(\mathbf{k}, \omega) = -\pi\delta(\hbar\omega - \epsilon_{\hbar\mathbf{k}})$$

となることがわかる。エネルギー  $E$  における単位体積あたりの状態数密度が

$$\rho_0(E) = \frac{1}{V} \sum_{\mathbf{p}} \delta(E - \epsilon_{\mathbf{p}}) = \int \frac{d^3\mathbf{k}}{(2\pi)^3} \delta(E - \epsilon_{\hbar\mathbf{k}})$$

で与えられることから、 $\text{Im}\tilde{g}_0^R$  は  $\rho_0(E)$  と次のような関係にあるとわかる。

$$\rho_0(\hbar\omega) = -\frac{1}{\pi} \int \frac{d^3\mathbf{k}}{(2\pi)^3} \text{Im}\tilde{g}_0(\mathbf{k}, \omega)$$

## 相互作用がある系への Green 関数の拡張

Green 関数の定義において、 $\hat{\Psi}(t, \mathbf{x})$ ,  $\hat{\Psi}^\dagger(t, \mathbf{x})$  を、相互作用項をもつハミルトニアン

$$\hat{H} = -\frac{\hbar^2}{2m} \int_V d^3\mathbf{x} \hat{\Psi}^\dagger(\mathbf{x}) \nabla^2 \hat{\Psi}(\mathbf{x}) + \frac{1}{2} \int_V d^3\mathbf{x} \int_V d^3\mathbf{x}' V(\mathbf{x}, \mathbf{x}') \hat{\Psi}^\dagger(\mathbf{x}) \hat{\Psi}^\dagger(\mathbf{x}') \hat{\Psi}(\mathbf{x}') \hat{\Psi}(\mathbf{x})$$

に対する Heisenberg 描像の演算子にとると、Heisenberg 方程式 (1.3.8) から、遅延 Green 関数は次式を満たすようになる。

$$\begin{aligned} & \left( i\hbar \frac{\partial}{\partial t} + \frac{\hbar^2}{2m} \nabla^2 \right) g^R(t, \mathbf{x}; t', \mathbf{x}') \\ &= \delta(t - t') \delta^{(3)}(\mathbf{x} - \mathbf{x}') + \frac{1}{i\hbar} \int_V d^3\mathbf{x}'' V(\mathbf{x}, \mathbf{x}'') \left\langle \left[ \hat{\Psi}^\dagger(t, \mathbf{x}'') \hat{\Psi}(t, \mathbf{x}'') \hat{\Psi}(t, \mathbf{x}), \hat{\Psi}^\dagger(t', \mathbf{x}') \right]_{-\zeta} \right\rangle \Theta(t - t') \end{aligned} \quad (2.5.4)$$

右辺第 2 項の内、

$$\frac{1}{i\hbar} \left\langle \left[ \hat{\Psi}^\dagger(t, \mathbf{x}'') \hat{\Psi}(t, \mathbf{x}'') \hat{\Psi}(t, \mathbf{x}), \hat{\Psi}^\dagger(t', \mathbf{x}') \right]_{-\zeta} \right\rangle \Theta(t - t')$$

の因子は 2 体遅延 Green 関数といい、遅延 Green 関数に対するハミルトニアンに加わった自己相互作用の効果を表している。先進・因果 Green 関数に対しても

$$\begin{aligned} g^A &: -\frac{1}{i\hbar} \left\langle \left[ \hat{\Psi}^\dagger(t, \mathbf{x}'') \hat{\Psi}(t, \mathbf{x}'') \hat{\Psi}(t, \mathbf{x}), \hat{\Psi}^\dagger(t', \mathbf{x}') \right]_{-\zeta} \right\rangle \Theta(t' - t) \\ g^C &: -\frac{1}{i\hbar} \left\langle T \left[ \hat{\Psi}^\dagger(t, \mathbf{x}'') \hat{\Psi}(t, \mathbf{x}'') \hat{\Psi}(t, \mathbf{x}) \hat{\Psi}^\dagger(t', \mathbf{x}') \right] \right\rangle \end{aligned}$$

で 2 体 Green 関数が定義され、 $g^R$  と同様の式を満たす。

量子論的に相互作用系へ定義を拡張した  $g(t, \mathbf{x}; t', \mathbf{x}')$  は、相互作用のない系の運動方程式であった (2.5.3) の Green 関数として適切ではない。しかし、伝播関数としての性質は演算子での定義を見る限り失われているとは考えられない。また、2 体 Green 関数に対して

$$\begin{aligned} & \frac{1}{i\hbar} \int_V d^3\mathbf{x}'' V(\mathbf{x}, \mathbf{x}'') \left\langle \left[ \hat{\Psi}^\dagger(t, \mathbf{x}'') \hat{\Psi}(t, \mathbf{x}'') \hat{\Psi}(t, \mathbf{x}), \hat{\Psi}^\dagger(t', \mathbf{x}') \right]_{-\zeta} \right\rangle \Theta(t - t') \\ &= \int_{-\infty}^{\infty} dt'' \int_V d^3\mathbf{x} \Sigma(t, \mathbf{x}; t'', \mathbf{x}'') g^R(t'', \mathbf{x}''; t', \mathbf{x}') \end{aligned}$$

を満たす  $\Sigma(t, \mathbf{x}; t', \mathbf{x}')$  を導入できた場合には、(2.5.4) は、

$$\left( i\hbar \frac{\partial}{\partial t} + \frac{\hbar^2}{2m} \nabla^2 \right) g^R(t, \mathbf{x}; t', \mathbf{x}') + \int_{-\infty}^{\infty} dt'' \int_V d^3\mathbf{x}'' \Sigma(t, \mathbf{x}; t'', \mathbf{x}'') g^R(t'', \mathbf{x}''; t', \mathbf{x}') = \delta(t - t') \delta^{(3)}(\mathbf{x} - \mathbf{x}')$$

となり、 $g(t, \mathbf{x}; t', \mathbf{x}')$  に作用する演算子が線形性を取り戻す。すなわち、 $g(t, \mathbf{x}; t', \mathbf{x}')$  は上式を運動方程式とする別の系の Green 関数となっている。2 体相互作用が座標の原点に依らず、 $v(\mathbf{x}, \mathbf{x}') = v(\mathbf{x} - \mathbf{x}')$  であるなら  $\Sigma$  もまた時刻・座標の原点に依存すべきでないため、Fourier 成分

$$\tilde{\Sigma}(\mathbf{k}, \omega) \equiv \int_{-\infty}^{\infty} dt \int_V d^3\mathbf{x} \Sigma(t, \mathbf{x}) e^{i(\mathbf{k} \cdot \mathbf{x} - \omega t)}$$

が定義でき、(2.5.4) を両辺 Fourier 変換した式にこの  $\tilde{\Sigma}(\mathbf{k}, \omega)$  を用いると、 $\tilde{g}^R(\mathbf{k}, \omega)$  が次のように表せるとわかる<sup>7)</sup>。

$$[\hbar\omega - \epsilon_{\hbar\mathbf{k}} - \tilde{\Sigma}(\mathbf{k}, \omega) + i\delta] \tilde{g}^R(\mathbf{k}, \omega) = 1 \quad \therefore \tilde{g}^R(\mathbf{k}, \omega) = \frac{1}{\hbar\omega - \epsilon_{\hbar\mathbf{k}} - \tilde{\Sigma}(\mathbf{k}, \omega) + i\delta}$$

7)  $\Sigma$  と  $g^R$  の畳み込み積分を Fourier 変換すると  $\tilde{\Sigma}$  と  $\tilde{g}^R$  の積になることを用いる。

このように、相互作用項から生じた 2 体 Green 関数の効果は  $\tilde{\Sigma}$  によって、

$$\epsilon_{\hbar\mathbf{k}} \longrightarrow \epsilon'(\mathbf{k}, \omega) \equiv \epsilon_{\hbar\mathbf{k}} + \tilde{\Sigma}(\mathbf{k}, \omega)$$

への準位の変化としてくりこまれる形で表される。 $\Sigma$  は自己エネルギーという。

自己エネルギー  $\Sigma$  を導入したことで、 $g^R$  は相互作用がくりこまれたエネルギー準位  $\epsilon'(\mathbf{k}, \omega)$  をもつ自由粒子系の Green 関数および伝播関数とみなせるようになった。このような相互作用系の描像を準粒子描像という。 $\Sigma$  は一般には虚部を持ってよく、その虚部から  $g^R(t, \mathbf{x}; t', \mathbf{x}') \propto e^{-(t-t')/\tau}$  というふるまいが生じるため、準粒子には寿命が存在する。

### 2.5.2 物理量の相関関数と実時間 Green 関数

ここで、一般の Heisenberg 描像の演算子  $\hat{A}(t), \hat{B}(t)$  に対して前節の各 Green 関数の対応物

$$\begin{aligned} G_{AB}^R(t, t') &= \left\langle \left[ \hat{A}(t), \hat{B}(t') \right]_{-\zeta} \right\rangle \Theta(t - t'), & G_{AB}^A(t, t') &= - \left\langle \left[ \hat{A}(t), \hat{B}(t') \right]_{\zeta} \right\rangle \Theta(t' - t) \\ G_{AB}^C(t, t') &= - \left\langle T \left[ \hat{A}(t) \hat{B}(t') \right] \right\rangle = - \left[ \left\langle \hat{A}(t) \hat{B}(t') \right\rangle \Theta(t - t') + \zeta \left\langle \hat{B}(t') \hat{A}(t) \right\rangle \Theta(t' - t) \right] \end{aligned}$$

を考えてみる。この節での

### 2.5.3 因果 Green 関数による摂動展開

相互作用系に拡張された因果 Green 関数は、系の状態が  $T = 0$  の熱平衡状態、すなわち基底状態であるときには相互作用項による摂動展開が可能である。ここでは因果 Green 関数を経路積分で表してその生成汎関数を導入することで摂動論を構築する。

#### 経路積分表示の因果 Green 関数

考える系の状態が固有状態  $|\Phi_0\rangle$  (エネルギー固有値を  $E_0$  とする) の場合には、因果 Green 関数  $g^C(t, \mathbf{x}; t', \mathbf{x}')$  を経路積分の形式で与えることができる。実際  $g^C(t, \mathbf{x}; t', \mathbf{x}')$  はその定義から、

$$\begin{aligned} g^C(t, \mathbf{x}; t', \mathbf{x}') &\equiv -\frac{1}{i\hbar} \langle \Phi_0 | T \left[ \hat{\Psi}(t, \mathbf{x}) \hat{\Psi}^\dagger(t', \mathbf{x}') \right] | \Phi_0 \rangle \\ &= \begin{cases} -\frac{1}{i\hbar} \langle \Phi_0 | \hat{U}(t) \hat{\Psi}(\mathbf{x}) \hat{U}^\dagger(t) \hat{U}(t') \hat{\Psi}^\dagger(\mathbf{x}') \hat{U}^\dagger(t') | \Phi_0 \rangle & (t > t') \\ -\frac{\zeta}{i\hbar} \langle \Phi_0 | \hat{U}(t') \hat{\Psi}^\dagger(\mathbf{x}') \hat{U}^\dagger(t') \hat{U}(t) \hat{\Psi}(\mathbf{x}) \hat{U}^\dagger(t) | \Phi_0 \rangle & (t < t') \end{cases} \\ &= \begin{cases} -\frac{1}{i\hbar} \frac{\langle \Phi_0 | \hat{U}^\dagger(t_f - t) \hat{\Psi}(\mathbf{x}) \hat{U}^\dagger(t - t') \hat{\Psi}^\dagger(\mathbf{x}') \hat{U}^\dagger(t' - t_i) | \Phi_0 \rangle}{\langle \Phi_0 | \hat{U}^\dagger(t_f - t_i) | \Phi_0 \rangle} & (t > t') \\ -\frac{\zeta}{i\hbar} \frac{\langle \Phi_0 | \hat{U}(t_f - t') \hat{\Psi}^\dagger(\mathbf{x}') \hat{U}^\dagger(t' - t) \hat{\Psi}(\mathbf{x}) \hat{U}^\dagger(t - t_i) | \Phi_0 \rangle}{\langle \Phi_0 | \hat{U}^\dagger(t_f - t_i) | \Phi_0 \rangle} & (t < t') \end{cases} \end{aligned}$$

というように時間発展演算子  $\hat{U}^\dagger(t) = e^{-i\hat{H}t/\hbar}$  を挟んだ期待値になっている。ここで、 $t_i, t_f$  は

$$t_i < \min(t, t'), \quad t_f > \max(t, t')$$

を満たす時刻であり、式変形中では

$$\hat{U}(t) = \hat{U}^\dagger(-t), \quad \hat{U}^\dagger(t_1) \hat{U}^\dagger(t_2) = \hat{U}^\dagger(t_1 + t_2)$$

および

$$\begin{aligned}\langle \Phi_0 | \hat{U}(t) = e^{iE_0 t/\hbar} \langle \Phi_0 |, \quad \hat{U}^\dagger(t') | \Phi_0 \rangle = e^{-iE_0 t'/\hbar} | \Phi_0 \rangle, \\ e^{iE_0(t_f-t_i)/\hbar} = \left( e^{-iE_0(t_f-t_i)/\hbar} \right)^{-1} = \left( \langle \Phi_0 | \hat{U}^\dagger(t_f-t_i) | \Phi_0 \rangle \right)^{-1}\end{aligned}$$

を用いた。このため、時間発展を細分化して、

$$\hat{U}^\dagger(\Delta t) = e^{-i\hat{H}\Delta t/\hbar} \simeq \hat{I} - \frac{i}{\hbar} H(\hat{\Psi}(\mathbf{x}), \hat{\Psi}^\dagger(\mathbf{x})) \Delta t \quad (\Delta t \ll 1)$$

の近似式を用いるとともに、分割した間にコヒーレント状態による完全性関係を挿入することで、

$$\begin{aligned}\langle \Psi_{k+1} | \hat{U}^\dagger(\Delta t) | \Psi_k \rangle &\simeq \langle \Psi_{k+1} | \Psi_k \rangle \left( 1 - \frac{i}{\hbar} H(\Psi_k(\mathbf{x}), \bar{\Psi}_{k+1}(\mathbf{x})) \Delta t \right) \\ &\simeq \exp \left[ \int_V d^3\mathbf{x} \left( -\bar{\Psi}_{k+1}(\mathbf{x}) \frac{\Psi_{k+1}(\mathbf{x}) - \Psi_k(\mathbf{x})}{2\Delta t} + \frac{\bar{\Psi}_{k+1}(\mathbf{x}) - \bar{\Psi}_k(\mathbf{x})}{2\Delta t} \Psi_k(\mathbf{x}) \right. \right. \\ &\quad \left. \left. - \frac{i}{\hbar} \mathcal{H}(\Psi_k(\mathbf{x}), \bar{\Psi}_{k+1}(\mathbf{x})) \right) \Delta t \right]\end{aligned}$$

というように  $\hat{U}^\dagger$  を c 数 (演算子でない数) に変換できる。また、時間発展演算子の間の  $\hat{\Psi}(\mathbf{x}), \hat{\Psi}^\dagger(\mathbf{x}')$  はそれぞれ  $\Psi(t, \mathbf{x}), \bar{\Psi}(t', \mathbf{x}')$  のコヒーレント状態に作用して c 数を与える。

$$\begin{aligned}(\hat{U}^\dagger(t_f-t_i) \text{ の c 数 }) &= \exp \left\{ \frac{i}{\hbar} \int_{t_i}^{t_f} dt \int_V d^3\mathbf{x} \left[ \frac{i\hbar}{2} (\bar{\Psi} \partial_t \Psi - \partial_t \bar{\Psi} \Psi) - \mathcal{H}(\Psi, \bar{\Psi}) \right] \right\} \\ &= \exp \left\{ \frac{i}{\hbar} \int_{t_i}^{t_f} dt \int_V d^3\mathbf{x} [i\hbar \bar{\Psi} \partial_t \Psi - \mathcal{H}(\Psi, \bar{\Psi})] \right\} \exp \left[ \frac{i}{\hbar} \int_V d^3\mathbf{x} (|\Psi(t_f, \mathbf{x})|^2 - |\Psi(t_i, \mathbf{x})|^2) \right] \\ &= \exp \left\{ \frac{i}{\hbar} \int_{t_i}^{t_f} dt \int_V d^3\mathbf{x} [i\hbar \bar{\Psi} \partial_t \Psi - \mathcal{H}(\Psi, \bar{\Psi})] \right\} \\ &\quad \left( \because \text{時刻 } t_i, t_f \text{ での } \Psi(t, \mathbf{x}) \text{ はともに } |\Phi_0\rangle \text{ での配位なので, } \int_V d^3\mathbf{x} |\Psi(t_i, \mathbf{x})|^2 = \int_V d^3\mathbf{x} |\Psi(t_f, \mathbf{x})|^2 \right)\end{aligned}$$

であるので、

$$S(t; t') \equiv \int_{t'}^t dt'' \int_V d^3\mathbf{x} [i\hbar \bar{\Psi} \partial_t \Psi - \mathcal{H}(\Psi, \bar{\Psi}, t'', \mathbf{x})]$$

とにおいて  $g^C$  を経路積分で表すと、次のようになる。

$$\begin{aligned}g^C(t, \mathbf{x}; t', \mathbf{x}') &= \begin{cases} -\frac{1}{i\hbar} \frac{\int \mathcal{D}(\Psi, \bar{\Psi}) \Psi(t, \mathbf{x}) \bar{\Psi}(t', \mathbf{x}') e^{iS(t_f; t_i)/\hbar}}{\int \mathcal{D}(\Psi, \bar{\Psi}) e^{iS(t_f; t_i)/\hbar}} & (t > t') \\ -\frac{\zeta}{i\hbar} \frac{\int \mathcal{D}(\Psi, \bar{\Psi}) \bar{\Psi}(t', \mathbf{x}') \Psi(t, \mathbf{x}) e^{iS(t_f; t_i)/\hbar}}{\int \mathcal{D}(\Psi, \bar{\Psi}) e^{iS(t_f; t_i)/\hbar}} & (t < t') \end{cases} \\ &= -\frac{1}{i\hbar} \frac{\int \mathcal{D}(\Psi, \bar{\Psi}) \Psi(t, \mathbf{x}) \bar{\Psi}(t', \mathbf{x}') e^{iS(t_f; t_i)/\hbar}}{\int \mathcal{D}(\Psi, \bar{\Psi}) e^{iS(t_f; t_i)/\hbar}} \quad (2.5.5)\end{aligned}$$

分母と分子の積分経路はともに  $t = t_i, t_f$  で  $|\Phi_0\rangle$  がとるべき場の配位  $\Psi(t, \mathbf{x})$  になっているような任意の経路である<sup>8)</sup>。実用上は任意の  $t, t'$  で定義できるよう  $t_i \rightarrow -\infty, t_f \rightarrow +\infty$  とすることが多い。

8)  $|\Phi_0\rangle$  は種々の配位をとりうるので、厳密には各配位を  $t = t_i, t_f$  でとる任意の経路についての経路積分を配位の実現確率で重みづけして足し合わせている。

以上では固有状態の場合に限って考えたが、有限温度においては混合された各固有状態  $|\psi_i\rangle$  について経路積分を計算した後に各状態の確率分布  $p_i$  で重みづけして足し合わせればよい。このため有限温度の場合でも因果 Green 関数は経路積分で表せる。

### 生成汎関数による摂動展開公式

以下では次の汎関数微分の恒等式を多用する (式の詳細は C.5 節参照)<sup>9)</sup>。

$$\frac{\delta^n}{\delta\phi(x_1)\delta\phi(x_2)\cdots\delta\phi(x_n)}\exp\left[\int dx \phi(x)J(x)\right] = J(x_1)J(x_2)\cdots J(x_n)\exp\left[\int dx \phi(x)J(x)\right] \quad (2.5.6)$$

(2.5.5) のように経路積分で表示された因果 Green 関数  $g^C$  は、

$$Z[\eta, \bar{\eta}] = \int \mathcal{D}(\Psi, \bar{\Psi}) \exp\left\{\frac{i}{\hbar}S(\infty; -\infty) + \int_{-\infty}^{\infty} dt \int_V d^3\mathbf{x} [\bar{\eta}(t, \mathbf{x})\Psi(t, \mathbf{x}) + \bar{\Psi}(t, \mathbf{x})\eta(t, \mathbf{x})]\right\}$$

で与えられる汎関数により、

$$g^C(t, \mathbf{x}; t', \mathbf{x}') = -\frac{1}{i\hbar} \frac{1}{Z[\eta = \bar{\eta} = 0]} \zeta \frac{\delta^2 Z}{\delta\bar{\eta}(t, \mathbf{x})\delta\eta(t', \mathbf{x}')} \Big|_{\eta=\bar{\eta}=0} \quad (2.5.7)$$

と表すことができる。 $Z[\eta, \bar{\eta}]$  は生成汎関数と呼ばれ、この (2.5.7) から  $g^C$  を用いて

$$Z[\eta, \bar{\eta}] = Z[\eta = \bar{\eta} = 0] \exp\left[-i\hbar \int_{-\infty}^{\infty} dt \int_V d^3\mathbf{x} \int_{-\infty}^{\infty} dt' \int_V d^3\mathbf{x}' \bar{\eta}(t, \mathbf{x}) g^C(t, \mathbf{x}; t', \mathbf{x}') \eta(t', \mathbf{x}')\right] \quad (2.5.8)$$

と表せることもわかる。

ハミルトニアンが  $\mathcal{H} = \mathcal{H}_0 + \mathcal{H}_1(\Psi, \bar{\Psi})$  と分けられ、 $\mathcal{H}_0$  に対する生成汎関数  $Z_0[\eta, \bar{\eta}]$  のみがわかっているとき、(2.5.6) より  $\mathcal{H}$  に対する生成汎関数  $Z[\eta, \bar{\eta}]$  は、

$$\begin{aligned} Z[\eta, \bar{\eta}] &= \int \mathcal{D}(\Psi, \bar{\Psi}) \exp\left\{\int dt d^3\mathbf{x} \left[\frac{i}{\hbar} (i\hbar\bar{\Psi}\partial_t\Psi - \mathcal{H}_0 - \mathcal{H}_1) + \bar{\eta}\Psi + \bar{\Psi}\eta\right]\right\} \\ &= \exp\left[-\frac{i}{\hbar} \int_{-\infty}^{\infty} dt \int_V d^3\mathbf{x} \mathcal{H}_1\left(\frac{\delta}{\delta\bar{\eta}(t, \mathbf{x})}, \zeta \frac{\delta}{\delta\eta(t, \mathbf{x})}\right)\right] Z_0[\eta, \bar{\eta}] \end{aligned} \quad (2.5.9)$$

で与えられると期待される。この表式に、(2.5.8) にまた (2.5.6) を用いた

$$\begin{aligned} Z_0[\eta, \bar{\eta}] &= Z_0[\eta = \bar{\eta} = 0] \exp\left[-i\hbar \int dt d^3\mathbf{x} \int dt' d^3\mathbf{x}' \bar{\eta}(t, \mathbf{x}) g_0^C(t, \mathbf{x}; t', \mathbf{x}') \eta(t', \mathbf{x}')\right] \\ &= Z_0[\eta = \bar{\eta} = 0] \exp\left[-i\hbar \int dt d^3\mathbf{x} \int dt' d^3\mathbf{x}' \zeta \frac{\delta}{\delta\bar{\Psi}(t, \mathbf{x})} g_0^C(t, \mathbf{x}; t', \mathbf{x}') \frac{\delta}{\delta\bar{\Psi}(t', \mathbf{x}')} \right. \\ &\quad \left. \times \exp\left[\int dt'' d^3\mathbf{x}'' [\bar{\eta}(t'', \mathbf{x}'')\Psi(t'', \mathbf{x}'') + \bar{\Psi}(t'', \mathbf{x}'')\eta(t'', \mathbf{x}'')]\right]\right] \Big|_{\Psi=\bar{\Psi}=0} \end{aligned}$$

を代入し、 $\eta, \bar{\eta}$  の汎関数微分を先に実行すると、

$$\begin{aligned} Z[\eta, \bar{\eta}] &= Z_0[\eta = \bar{\eta} = 0] \exp\left[-\frac{i}{\hbar} \int dt d^3\mathbf{x} \mathcal{H}_1\left(\frac{\delta}{\delta\bar{\eta}(t, \mathbf{x})}, \zeta \frac{\delta}{\delta\eta(t, \mathbf{x})}\right)\right] \\ &\quad \times \exp\left[-i\hbar \int dt_1 d^3\mathbf{x}_1 \int dt_2 d^3\mathbf{x}_2 \zeta \frac{\delta}{\delta\bar{\Psi}(t_1, \mathbf{x}_1)} g_0^C(t_1, \mathbf{x}_1; t_2, \mathbf{x}_2) \frac{\delta}{\delta\bar{\Psi}(t_2, \mathbf{x}_2)} \right. \\ &\quad \left. \times \exp\left[\int dt_3 d^3\mathbf{x}_3 [\bar{\eta}(t_3, \mathbf{x}_3)\Psi(t_3, \mathbf{x}_3) + \bar{\Psi}(t_3, \mathbf{x}_3)\eta(t_3, \mathbf{x}_3)]\right]\right] \Big|_{\Psi=\bar{\Psi}=0} \end{aligned}$$

9)  $\phi, J$  が Grassmann 数を値にとる場合には積の順序を考慮する必要がある。すなわち (2.5.6) はこの順序でのみ成立し、適用する際には必ずこの順に並び替える必要がある。(2.5.7) や (2.5.9) で乗じられている  $\zeta$  はその並べ替えにより生じる因子の補正である。

$$\begin{aligned}
&= Z_0[\eta = \bar{\eta} = 0] \exp \left[ -i\hbar \int dt d^3\mathbf{x} \int dt' d^3\mathbf{x}' \zeta \frac{\delta}{\delta \Psi(t, \mathbf{x})} g_0^C(t, \mathbf{x}; t', \mathbf{x}') \frac{\delta}{\delta \bar{\Psi}(t', \mathbf{x}')} \right] \\
&\quad \times \exp \left[ -\frac{i}{\hbar} \int dt'' d^3\mathbf{x}'' \mathcal{H}_1(\Psi(t'', \mathbf{x}''), \bar{\Psi}(t'', \mathbf{x}'')) \right] \\
&\quad \times \exp \left[ \int dt'' d^3\mathbf{x}'' \bar{\eta}(t'', \mathbf{x}'') \Psi(t'', \mathbf{x}'') + \bar{\Psi}(t'', \mathbf{x}'') \eta(t'', \mathbf{x}'') \right] \Big|_{\Psi=\bar{\Psi}=0} \\
&= \sum_{n=0}^{\infty} \frac{1}{n!} Z_0[\eta = \bar{\eta} = 0] \exp \left[ -i\hbar \int dt d^3\mathbf{x} \int dt' d^3\mathbf{x}' \zeta \frac{\delta}{\delta \Psi(t, \mathbf{x})} g_0^C(t, \mathbf{x}; t', \mathbf{x}') \frac{\delta}{\delta \bar{\Psi}(t', \mathbf{x}')} \right] \\
&\quad \times \left[ -\frac{i}{\hbar} \int dt'' d^3\mathbf{x}'' \mathcal{H}_1(\Psi, \bar{\Psi}) \right]^n \exp \left[ \int dt'' d^3\mathbf{x}'' (\bar{\eta} \Psi + \bar{\Psi} \eta) \right] \Big|_{\Psi=\bar{\Psi}=0} \quad (2.5.10)
\end{aligned}$$

という表式が得られるため、 $\mathcal{H}_1$  の摂動展開を行うことで  $Z[\eta, \bar{\eta}]$  が計算できると考えられる。

前節での経路積分による Green 関数および生成汎関数の定義では、積分経路の  $t = \pm\infty$  において設定する状態は系の固有状態および熱平衡状態に限られていた。よって (2.5.9) の最左辺と最右辺において  $Z_0[\eta, \bar{\eta}]$  と  $Z[\eta, \bar{\eta}]$  の各積分経路において設定する  $t = \pm\infty$  の状態は一般には一致しない。しかし、摂動展開を目的とする今回の場合には  $\mathcal{H}_0$  と  $\mathcal{H} = \mathcal{H}_0 + \mathcal{H}_1$  の基底状態がほとんど変わらないという仮定 (断熱仮定) をおいて、積分経路が一致すると考える。このため、以下に続く議論はすべて  $T = 0$  での熱平衡状態を考えたときのみ有効である。

### Wick の定理と Feynman 図

以下では

$$\begin{aligned}
\Psi_n &= \Psi(t_n, \mathbf{x}_n), \quad g_0^C(n; n') = g_0^C(t_n, \mathbf{x}_n; t_{n'}, \mathbf{x}_{n'}) \\
\delta_n &= \delta(t - t_n) \delta^{(3)}(\mathbf{x} - \mathbf{x}_n), \quad \delta'_n = \delta(t' - t_n) \delta^{(3)}(\mathbf{x}' - \mathbf{x}_n)
\end{aligned}$$

と略記することがある。

$\mathcal{H}_1(\Psi, \bar{\Psi})$  は、 $\bar{\Psi}_1 \Psi_1, \bar{\Psi}_1 \bar{\Psi}_2 \Psi_2 \Psi_1$  といったように正規順序積で表されていて、かつ中央から対称的に同じ時刻・座標を引数にとる。このことは 1 体・2 体演算子の定義から自然である (1.3 節参照)。このような  $\Psi, \bar{\Psi}$  の正規順序積は、

$$\begin{aligned}
\bar{\Psi}_1 \bar{\Psi}_2 \Psi_2 \Psi_1 &= \bar{\Psi}_1 \Psi_1 \bar{\Psi}_2 \Psi_2 \\
\bar{\Psi}_1 \bar{\Psi}_2 \bar{\Psi}_3 \Psi_3 \Psi_2 \Psi_1 &= \bar{\Psi}_1 \Psi_1 \bar{\Psi}_2 \Psi_2 \bar{\Psi}_3 \Psi_3 \\
\bar{\Psi}_1 \bar{\Psi}_2 \bar{\Psi}_3 \bar{\Psi}_4 \Psi_4 \Psi_3 \Psi_2 \Psi_1 &= \bar{\Psi}_1 \Psi_1 \bar{\Psi}_2 \Psi_2 \bar{\Psi}_3 \Psi_3 \bar{\Psi}_4 \Psi_4 \\
&\vdots
\end{aligned}$$

というように、同じ引数の場合ごとに正規順序になった積に符号を変えずに並び替えることができる。すると、(2.5.10) の級数の中で現れる  $\Psi, \bar{\Psi}$  の積は、 $\mathcal{H}_1$  の 2 次以上の項で生じる積も含めて全てこの同じ引数同士の  $\Psi, \bar{\Psi}$  が正規順序に並ぶ積に符号を変えずに並び替えられ、逆にそれら全てが全体として中央から対称的に同じ時刻・座標をとる正規順序積にまた符号を変えずに並べられることになる。そこで、 $Z[\eta, \bar{\eta}]$  および  $W[\eta, \bar{\eta}]$  に対して  $\mathcal{H}_1$  の摂動展開を体系的に行うために

$$\mathcal{O}^{(2n)}[\Psi, \bar{\Psi}] = \bar{\Psi}_1 \bar{\Psi}_2 \cdots \bar{\Psi}_n \Psi_{n+1} \cdots \Psi_{2n-1} \Psi_{2n}$$

という正規順序積に対して、

$$\left\langle \mathcal{O}^{(2n)}[\Psi, \bar{\Psi}] \right\rangle \equiv \exp \left[ -i\hbar \int dt d^3\mathbf{x} \int dt' d^3\mathbf{x}' \zeta \frac{\delta}{\delta \Psi(t, \mathbf{x})} g_0^C(t, \mathbf{x}; t', \mathbf{x}') \frac{\delta}{\delta \bar{\Psi}(t', \mathbf{x}')} \right] \mathcal{O}^{(2n)}[\Psi, \bar{\Psi}] \Big|_{\Psi=\bar{\Psi}=0}$$

を (2.5.6) を用いて求めておく。

まず、 $n = 1$  での

$$\mathcal{O}^{(2)}[\Psi, \bar{\Psi}] = \bar{\Psi}_1 \Psi_2$$

について  $\langle \mathcal{O}^{(2)} \rangle$  を考える。特に  $\phi(x), \chi(x)$  が Grassmann 数の関数の場合を念頭に、

$$\frac{\delta}{\delta \phi(x)} \phi(x') \chi(x') = \chi(x') \delta(x - x')$$

で汎関数微分が定義されていることに注意する<sup>10)</sup>と、

$$\left[ \int dt d^3\mathbf{x} \int dt' d^3\mathbf{x}' \zeta \frac{\delta}{\delta \Psi(t, \mathbf{x})} g_0^C(t, \mathbf{x}; t', \mathbf{x}') \frac{\delta}{\delta \bar{\Psi}(t', \mathbf{x}')} \right] \mathcal{O}^{(2)}[\Psi, \bar{\Psi}] = \zeta g_0^C(2; 1)$$

となり、指数関数部を展開したときに 2 次以上の項は 0 となるとわかる。すなわち、

$$\left\langle \mathcal{O}^{(2)}[\Psi, \bar{\Psi}] \right\rangle = -i\hbar \zeta g_0^C(2; 1)$$

というように  $g_0^C$  が与えられる。

次に、 $n = 2$  での

$$\mathcal{O}^{(4)}[\Psi, \bar{\Psi}] = \bar{\Psi}_1 \bar{\Psi}_2 \Psi_2 \Psi_1$$

について  $\langle \mathcal{O}^{(4)} \rangle$  を考える。Grassmann 数の関数  $\phi(x)$  の変分をとるときには

$$\begin{aligned} \delta [\phi(x_1) \phi(x_2)] &= \phi(x_1) \delta \phi(x_2) + \delta \phi(x_1) \phi(x_2) \\ &= -\delta \phi(x_2) \phi(x_1) + \delta \phi(x_1) \phi(x_2) \\ &= \int dx \delta \phi(x) [-\delta(x - x_2) \phi(x_1) + \delta(x - x_1) \phi(x_2)] \end{aligned}$$

となるため、

$$\frac{\delta}{\delta \phi(x)} [\phi(x_1) \phi(x_2)] = -\phi(x_1) \delta(x - x_2) + \phi(x_2) \delta(x - x_1)$$

であることに注意すると、

$$\begin{aligned} & \left[ \int dt d^3\mathbf{x} \int dt' d^3\mathbf{x}' \zeta \frac{\delta}{\delta \Psi(t, \mathbf{x})} g_0^C(t, \mathbf{x}; t', \mathbf{x}') \frac{\delta}{\delta \bar{\Psi}(t', \mathbf{x}')} \right] \mathcal{O}^{(4)}[\Psi, \bar{\Psi}] \\ &= \int dt d^3\mathbf{x} \int dt' d^3\mathbf{x}' \zeta \frac{\delta}{\delta \Psi(t, \mathbf{x})} [g_0^C(t, \mathbf{x}; t', \mathbf{x}') (\zeta \bar{\Psi}_1 \delta'_2 + \bar{\Psi}_2 \delta'_1) \Psi_2 \Psi_1] \\ &= \int dt d^3\mathbf{x} \int dt' d^3\mathbf{x}' \zeta g_0^C(t, \mathbf{x}; t', \mathbf{x}') (\zeta \Psi_2 \delta_1 + \Psi_1 \delta_2) (\zeta \bar{\Psi}_1 \delta'_2 + \bar{\Psi}_2 \delta'_1) \\ &= g_0^C(1; 2) \bar{\Psi}_1 \Psi_2 + \zeta g_0^C(1; 1) \bar{\Psi}_2 \Psi_2 + g_0^C(2; 1) \bar{\Psi}_2 \Psi_1 + \zeta g_0^C(2; 2) \bar{\Psi}_1 \Psi_1 \end{aligned}$$

---

10) 注釈 9) も参照。定義における積の順序について注意している。

とわかり、またこれに  $\langle \mathcal{O}^2 \rangle$  の結果を用いて、

$$\begin{aligned}
& \frac{1}{2} \left[ \int dt d^3 \mathbf{x} \int dt' d^3 \mathbf{x}' \zeta \frac{\delta}{\delta \Psi(t, \mathbf{x})} g_0^C(t, \mathbf{x}; t', \mathbf{x}') \frac{\delta}{\delta \bar{\Psi}(t', \mathbf{x}')} \right]^2 \mathcal{O}^{(4)}[\Psi, \bar{\Psi}] \\
&= \frac{1}{2} \left[ \int dt d^3 \mathbf{x} \int dt' d^3 \mathbf{x}' \zeta \frac{\delta}{\delta \Psi(t, \mathbf{x})} g_0^C(t, \mathbf{x}; t', \mathbf{x}') \frac{\delta}{\delta \bar{\Psi}(t', \mathbf{x}')} \right] \\
&\quad \times [g_0^C(1; 2) \bar{\Psi}_1 \Psi_2 + \zeta g_0^C(1; 1) \bar{\Psi}_2 \Psi_2 + g_0^C(2; 1) \bar{\Psi}_2 \Psi_1 + \zeta g_0^C(2; 2) \bar{\Psi}_1 \Psi_1] \\
&= g_0^C(1; 1) g_0^C(2; 2) + \zeta g_0^C(2; 1) g_0^C(1; 2)
\end{aligned}$$

とわかる。よって  $\langle \mathcal{O}^{(4)} \rangle$  は次で与えられる。

$$\langle \mathcal{O}^{(4)}[\Psi, \bar{\Psi}] \rangle = (-i\hbar)^2 [g_0^C(4; 1) g_0^C(3; 2) + \zeta g_0^C(3; 1) g_0^C(4; 2)]$$

一般の  $n$  において、

$$\mathcal{O}^{(2n)}[\Psi, \bar{\Psi}] = \bar{\Psi}_1 \bar{\Psi}_2 \cdots \bar{\Psi}_{n-1} \bar{\Psi}_n \Psi_n \Psi_{n-1} \cdots \Psi_2 \Psi_1$$

に対する  $\langle \mathcal{O}^{(2n)} \rangle$  は次のように表されることが、Wick の定理として知られている：

$$\langle \mathcal{O}^{(2n)}[\Psi, \bar{\Psi}] \rangle = (-i\hbar\zeta)^n \sum_P \zeta^P g_0^C(P(1); 1) g_0^C(P(2); 2) \cdots g_0^C(P(n); n) \quad (2.5.11)$$

ここで、 $P$  は  $\{1, 2, \dots, n\}$  の置換であり、

$$\zeta^P = \begin{cases} \zeta & (P \text{ が奇置換}) \\ 1 & (P \text{ が偶置換}) \end{cases}$$

である。

Wick の定理 (2.5.11) を用いると、 $\eta = \bar{\eta} = 0$  での摂動展開公式 (2.5.10) の各項で  $\Psi, \bar{\Psi}$  の積が  $g_0^C$  の積に分解されるが、このとき

$(t, \mathbf{x})$  表示での Feynman 則 —

- (i) 引数  $(t_n, x_n)$ ：頂点
- (ii)  $-i\hbar g_0^C(n; n')$ ： $(t_n, x_n)$  から  $(t_{n'}, x_{n'})$  へ対応した頂点を結ぶ実線。  $n = n'$  の場合は  $(t_n, x_n)$  の頂点を通るループ

というように図形に対応させてダイアグラムでその積を表すと、

$(t, \mathbf{x})$  表示での Feynman 則 (続き 1) —

- (iii) 実線がつながってできたループが奇数個なら、 $\zeta$  が乗じられる。

という対応関係が成り立つ。 $\langle \mathcal{O} \rangle$  の各項と図形の間での対応関係の規則 (i),(ii),(iii) は Feynman 則ともいい、Feynman 則に従って式を表すダイアグラムは Feynman 図と呼ばれる。

(2.5.10) の摂動展開の各項にはまた、以下のように種々の演算が含まれている：

- 例えば 2 体相互作用項

$$-\frac{i}{\hbar} \int dt \int d^3 \mathbf{x} \mathcal{H}_1 = -\frac{i}{\hbar} \int dt \int d^3 \mathbf{x} \int d^3 \mathbf{x}' \bar{\Psi}(t, \mathbf{x}) \bar{\Psi}(t, \mathbf{x}') v(\mathbf{x} - \mathbf{x}') \Psi(t, \mathbf{x}') \Psi(t, \mathbf{x}) \quad (2.5.12)$$



に現れる  $v(\mathbf{x} - \mathbf{x}')$  のような、いくつかの座標を引数を持ちうる相互作用パラメータの関数  $v(\mathbf{x}_1, \mathbf{x}_2, \dots)$  を乗じて空間積分が行われる。 $v$  が引数にもつ座標  $\mathbf{x}_n$  が複数あれば、それぞれ対応した  $t_n$  は値をそろえてまた積分をするので、例えば (2.5.12) の  $\mathcal{H}_1$  だと実際には

$$v(\mathbf{x} - \mathbf{x}')\delta(t - t')$$

を乗じて  $(t, \mathbf{x})$  とともに積分を行うともみなせる。

- $v$  を乗じる回数  $n$  は摂動の次数に対応していて、それに合わせて  $(n!)^{-1}$  を乗じる必要もある。

以上を踏まえて Feynman 則に、

- ( $t, \mathbf{x}$ ) 表示での Feynman 則 (続き 2) —————
- (iv)  $-\frac{i}{\hbar}v(\mathbf{x}_1, \mathbf{x}_2, \dots)\delta(t_1, t_2, \dots)$  : ( $t_j, \mathbf{x}_j$ ) に対応した頂点を  $v$  の引数の順に結ぶ点線
  - (v) 積分  $\int dt_n d^3\mathbf{x}_n$  : 点線で結ばれた頂点ごとに行う
  - (vi)  $(n!)^{-1}$  : 点線の本数を  $n$  とする

という対応関係のルールを加えると<sup>11)</sup>、

生成汎関数の摂動展開における Feynman 図の描き方 —————

1. 摂動展開の次数  $n$  を決める。
2.  $n$  本の点線を描く。
3. 点線がもつ頂点 1 つあたりに入る実線と出ていく実線がそれぞれ 1 本ずつになるよう、全ての頂点を実線で結ぶ。1 本の実線で同じ頂点に出入りするループを描いても構わない。

の手順で描いた全ての Feynman 図が摂動展開 (2.5.10) の各項と一対一に対応する。 $\mathcal{H}_1$  が (2.5.12) で表される場合の摂動展開項のダイアグラムの例を図 2.1 に示す。

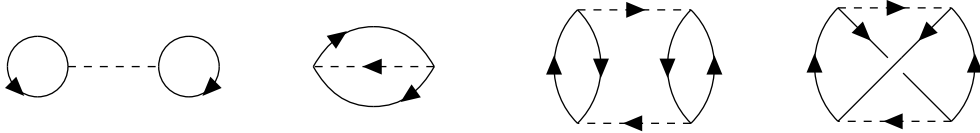


図 2.1 生成汎関数の摂動展開項を表す Feynman 図の例

相互作用が 2 体相互作用のみで、さらに  $v(\mathbf{x}, \mathbf{x}') = v(\mathbf{x} - \mathbf{x}')$  と並進対称性があれば、 $g_0^C(t, \mathbf{x}; t', \mathbf{x}')$  だけでなく  $v$  にも Fourier 級数展開

$$g_0^C(t - t', \mathbf{x} - \mathbf{x}') = \int_{-\infty}^{\infty} \frac{d\omega}{2\pi} \frac{1}{V} \sum_{\mathbf{k}} \tilde{g}_0^C(\mathbf{k}, \omega) e^{i[\mathbf{k} \cdot (\mathbf{x} - \mathbf{x}') - \omega(t - t')]}$$

$$v(\mathbf{x} - \mathbf{x}')\delta(t - t') = \int_{-\infty}^{\infty} \frac{d\omega}{2\pi} \frac{1}{V} \sum_{\mathbf{q}} \tilde{v}(\mathbf{q}) e^{i[\mathbf{q} \cdot (\mathbf{x} - \mathbf{x}') - \omega(t - t')]}$$

を定義できる。摂動展開した各項にこれらの展開を代入して、 $(t, \mathbf{x})$  に関する積分を先に実行してしまうことを考えると、Feynman 図において点線の両端の頂点  $(t_1, \mathbf{x}_1), (t_2, \mathbf{x}_2)$  の積分からは、

$$\int_{-\infty}^{\infty} dt_1 e^{-i(\omega_1 - \omega_2 + \omega)t_1} \int_V d^3\mathbf{x}_1 e^{i(\mathbf{k}_1 - \mathbf{k}_2 + \mathbf{q}) \cdot \mathbf{x}_1} = 2\pi V \delta(\omega_1 - \omega_2 + \omega) \delta_{\mathbf{k}_1 + \mathbf{q}, \mathbf{k}_2}$$

$$\int_{-\infty}^{\infty} dt_2 e^{-i(\omega_3 - \omega_4 - \omega)t_2} \int_V d^3\mathbf{x}_2 e^{i(\mathbf{k}_3 - \mathbf{k}_4 - \mathbf{q}) \cdot \mathbf{x}_2} = 2\pi V \delta(\omega_3 - \omega_4 - \omega) \delta_{\mathbf{k}_3 - \mathbf{q}, \mathbf{k}_4}$$

11)  $t_1, t_2, \dots$  を全てそろえるデルタ関数を  $\delta(t_1, t_2, \dots)$  と表記した。

というデルタ関数が生じるとわかる。ここで

- $\mathbf{k}_1, \mathbf{k}_2, \omega_1, \omega_2$  は  $(t_1, \mathbf{x}_1)$  に、 $\mathbf{k}_1, \mathbf{k}_2, \omega_3, \omega_4$  は  $(t_2, \mathbf{x}_2)$  にそれぞれつながる  $g_0^C$  の Fourier 成分の波数および周波数
- $\mathbf{q}, \omega$  は注目した点線に対応する  $v(\mathbf{x}, \mathbf{x}')$  の Fourier 成分  $\tilde{v}(\mathbf{q})$  の波数および周波数

である。摂動展開の各項はこのデルタ関数の制約に則って  $\tilde{g}_0^C, \tilde{v}$  の積を足し上げるもので表されるわけだが、この規則は  $(\mathbf{k}, \omega)$  表示での Feynman 則と考えることができる。すなわち、先と同じ Feynman 図に対して、

$(\mathbf{k}, \omega)$  表示での Feynman 則

- (i) 頂点：つながった実線と点線に対応した  $\tilde{g}_0^C(\mathbf{k}, \omega), \tilde{v}(\mathbf{q}, \omega)$  は、線種を問わずに入る線と出ていく線ごとで波数・周波数の和をとると両者が等しくなるように引数の値を制限する。
- (ii) 実線： $\tilde{g}_0^C(\mathbf{k}, \omega)$
- (iii) 実線がつながってできたループが奇数個なら、 $\zeta$  が乗じられる。
- (iv) 点線： $-\frac{i}{\hbar} \tilde{v}(\mathbf{q})$
- (v) つながった実線・点線：対応する因子を掛け合わせて、それぞれの因子の引数について (i) の条件を満たす範囲で 和・積分をとる。
- (vi) 点線の本数  $n$ ： $(n!)^{-1} (2\pi V)^{-n}$

という対応関係の規則を与えることで、摂動展開項の  $(\mathbf{k}, \omega)$  表示が得られると考えられる<sup>12)</sup>。

### 因果 Green 関数・相関関数の摂動展開

生成汎関数を用いた  $g^C$  の表式 (2.5.7) に生成汎関数の摂動展開公式 (2.5.10) を代入し  $\eta, \bar{\eta}$  の汎関数微分を先に実行すると、 $Z[\eta = \bar{\eta} = 0]$  で考えた摂動展開項に  $\Psi(t, \mathbf{x}) \bar{\Psi}(t', \mathbf{x}')$  を左から乗じたものが  $g_0^C$  の摂動展開項になることがわかる。ここで以下のことに注目する：

- この項は Wick の定理 (2.5.11) が適用できるよう正規順序に  $\Psi, \bar{\Psi}$  を並び替えた際に、積の中で  $(t, \mathbf{x})$  と  $(t', \mathbf{x}')$  をこの順で中心対称な位置に配置すると、 $\zeta$  を 1 回乗じる必要がある。
- Wick の定理で分解した  $g_0^C$  の積の中で、 $g_0^C$  の引数に  $(t, \mathbf{x}), (t', \mathbf{x}')$  はそれぞれ 1 度しか現れず、また積分をとることもない。
- $\Psi$  の時刻・座標である  $(t, \mathbf{x})$  は必ず  $g_0^C$  の前の引数に、 $\bar{\Psi}$  の時刻・座標である  $(t', \mathbf{x}')$  は後ろの引数になる。

これらを踏まえて、 $g^C$  の摂動展開項に対して Feynman 則に従って因子と図形を対応させていくと、出ていくか入るかのどちらか 1 本の実線としかつながらない頂点が、元の  $g^C(t, \mathbf{x}; t', \mathbf{x}')$  の引数に対応して 2 点現れる。この 2 点は本来つながってループを形成していたので、Feynman 則の (iii) に従って  $\zeta$  の因子を決めると Wick の定理から導かれる正しい  $\zeta$  の因子からループ 1 個分だけずれるように思われるが、これは上の 1 点目の事情により補正されるため (iii) はそのまま適用できる。よって、 $g^C$  の摂動展開項をダイアグラムで表すために加えるべき Feynman 則は次のみでよい：

12) (v) の  $(2\pi V)^{-n}$  の因子は、 $\tilde{g}_0^C$  と  $\tilde{v}(\mathbf{q})$  の Fourier 級数展開で生じる  $(2\pi V)^{-1}$  の因子と頂点での波数・周波数の和則で生じる  $(2\pi V)$  の因子を差し引きしたもの。

$(t, \mathbf{x})$  表示での Feynman 則 (続き 3) —

- (vii) 元の  $g^C$  の引数  $(t, \mathbf{x}), (t', \mathbf{x}')$  : 実線が 1 本しかつながらない頂点。 $(t, \mathbf{x})$  に対応する頂点は入る向き、 $(t', \mathbf{x}')$  に対応する頂点は出ていく向きの実線とつながる。

また、 $g^C$  の摂動展開に  $g_0^C, v$  の Fourier 級数展開を代入し  $(t, \mathbf{x})$  の積分を実行して  $(\mathbf{k}, \omega)$  表示に移った場合には、Feynman 則 (v) により外の頂点につながる実線に対応した  $\tilde{g}_0^C$  は引数  $\mathbf{k}, \omega$  をそろえる必要があり、またこれらの引数が元の  $\tilde{g}^C$  の引数となる。よって  $(\mathbf{k}, \omega)$  表示での Feynman 則 (vii) は次のようになる：

$(\mathbf{k}, \omega)$  表示での Feynman 則 (続き) —

- (vii) 外の頂点にのびる実線 (外線) : 元の  $\tilde{g}^C$  の引数  $(\mathbf{k}, \omega)$  をもった  $\tilde{g}_0^C$

外の頂点および外線の存在から、 $g^C$  の摂動展開項を表すダイアグラムの描き方は生成汎関数の摂動展開項の場合から次のように変更する必要がある。

因果 Green 関数の摂動展開における Feynman 図の描き方 —

1. 摂動展開の次数  $n$  を決める。
2.  $n$  本の点線と 2 つの頂点を描く。
3. 点線がもつ頂点には入る実線と出ていく実線がそれぞれ 1 本ずつになるよう、外の 2 つの頂点には一方は入る実線が、他方には出ていく実線が 1 本のみつながるように、全ての頂点を実線で結ぶ。1 本の実線で同じ頂点に出入りするループを描いても構わない。

$\mathcal{H}_1$  が (2.5.12) で表される場合の  $g^C$  の摂動展開項を表すダイアグラムの例を図 2.2 に示す。

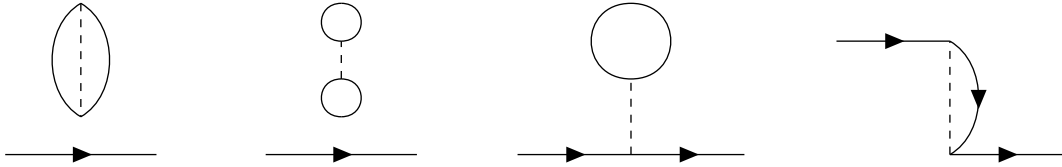


図 2.2  $g^C(\mathbf{k}, \omega)$  の摂動展開項を表す Feynman 図の例

## 既約な Feynman 図と Dyson 方程式

独立した図形を持たない Feynman 図は既約であるという。既約でない Feynman 図はその既約部分に対応する因子が式の上では独立に積分を実行できて、全体としては既約部分の単純な積として表される。生成汎関数の摂動展開においてもこのことは成り立っているが、因果 Green 関数の摂動展開においては特に、

$$\begin{aligned}
 & \zeta \frac{\delta^2 Z}{\delta \bar{\eta}(t, \mathbf{x}) \delta \eta(t', \mathbf{x}')} \\
 &= \sum_{\text{可能な全ての Feynman 図}} \left[ \left( \begin{array}{c} \text{外の頂点とつながった} \\ \text{既約部分} \end{array} \right) \times \left( \begin{array}{c} \text{外の頂点とつながらない} \\ \text{既約部分およびその積} \end{array} \right) \right] \\
 &= \left[ \sum \left( \begin{array}{c} \text{外の頂点とつながった} \\ \text{既約な Feynman 図} \end{array} \right) \right] \times \left[ \sum \left( \begin{array}{c} \text{外の頂点とつながらない} \\ \text{既約な Feynman 図およびその積} \end{array} \right) \right]
 \end{aligned}$$

となることを意味する重要な性質である。すなわち、最右辺の第2因子は  $Z[\eta = \bar{\eta} = 0]$  に他ならず、(2.5.7) を見ると  $g_0^C$  は上式を  $Z[\eta = \bar{\eta} = 0]$  で約分して与えられることから、因果 Green 関数の摂動展開項を Feynman 図で書き下す場合には、

因果 Green 関数の摂動展開における Feynman 図の書き方 (続き)

3. 独立した部分のない、既約な図形となるもののみ描く。

だけでよいのである。図 2.2 の例では、後ろ2つのみを計算することになる。

さらに、高次摂動項の既約 Feynman 図のいくつかは低次摂動の既約 Feynman 図の組み合わせで表すことができるものがある(そのようなダイアグラムは非固有であるという)。よって、低次の既約なダイアグラムに分解できない固有な Feynman 図の外線を外した部分をまとめることで、因果 Green 関数の摂動展開を表す Feynman 図の足し上げは図 2.3 のように表せる。特に  $(\mathbf{k}, \omega)$  表示ではダイアグラムをつなぐことは Feynman 則の (v) より式の上では単に積をとることではかないので、固有な Feynman 図の外線以外の部分をまとめたもの(図 2.3 において斜線で塗りつぶした図形)に対応する因子を  $\tilde{\Sigma}(\mathbf{k}, \omega)$  とおくと、

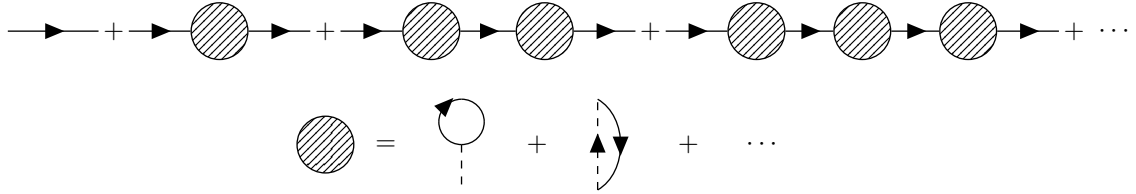


図 2.3  $g_\sigma^C$  の摂動展開を固有ダイアグラムをまとめた形で表した Feynman 図

$$\begin{aligned}
\tilde{g}^C(\mathbf{k}, \omega) &= \tilde{g}_0^C(\mathbf{k}, \omega) + \tilde{g}_0^C(\mathbf{k}, \omega) \tilde{\Sigma}(\mathbf{k}, \omega) \tilde{g}_0^C(\mathbf{k}, \omega) \\
&\quad + \tilde{g}_0^C(\mathbf{k}, \omega) \tilde{\Sigma}(\mathbf{k}, \omega) \tilde{g}_0^C(\mathbf{k}, \omega) \tilde{\Sigma}(\mathbf{k}, \omega) \tilde{g}_0^C(\mathbf{k}, \omega) \\
&\quad + \tilde{g}_0^C(\mathbf{k}, \omega) \tilde{\Sigma}(\mathbf{k}, \omega) \tilde{g}_0^C(\mathbf{k}, \omega) \tilde{\Sigma}(\mathbf{k}, \omega) \tilde{g}_0^C(\mathbf{k}, \omega) \tilde{\Sigma}(\mathbf{k}, \omega) \tilde{g}_0^C(\mathbf{k}, \omega) + \dots \\
&= \tilde{g}_0^C(\mathbf{k}, \omega) \sum_{n=0}^{\infty} [\tilde{\Sigma}(\mathbf{k}, \omega) \tilde{g}_0^C(\mathbf{k}, \omega)]^n \\
&= \tilde{g}_0^C(\mathbf{k}, \omega) + \tilde{g}_0^C(\mathbf{k}, \omega) \tilde{\Sigma}(\mathbf{k}, \omega) \tilde{g}_0^C(\mathbf{k}, \omega) \sum_{n=0}^{\infty} [\tilde{\Sigma}(\mathbf{k}, \omega) \tilde{g}_0^C(\mathbf{k}, \omega)]^n \\
&= \tilde{g}_0^C(\mathbf{k}, \omega) + \tilde{g}_0^C(\mathbf{k}, \omega) \tilde{\Sigma}(\mathbf{k}, \omega) \tilde{g}^C(\mathbf{k}, \omega) \tag{2.5.13}
\end{aligned}$$

というように式でも表せる。(2.5.13) は Dyson 方程式と呼ばれ、その形式解は

$$\tilde{g}^C(\mathbf{k}, \omega) = \frac{1}{[\tilde{g}_0^C(\mathbf{k}, \omega)]^{-1} - \tilde{\Sigma}(\mathbf{k}, \omega)}$$

で与えることができる。(T = 0 での)  $\tilde{g}_0^C(\mathbf{k}, \omega)$  の関数形は 2.5.1 節で与えており、上式に用いると

$$\tilde{g}^C(\mathbf{k}, \omega) = \frac{1}{\hbar\omega - \epsilon_{\mathbf{k}} - \tilde{\Sigma}(\mathbf{k}, \omega) + i\delta(\mathbf{k})}$$

であることがわかるので<sup>13)</sup>、 $\Sigma$  は自己エネルギーに他ならないことがわかる。

13) Fermi 粒子系なら  $\delta(\mathbf{k}) = \delta \operatorname{sgn}(k - k_F)$ 、Bose 粒子系なら  $\delta(\mathbf{k}) = \delta$ 。

### 2.5.4 温度 Green 関数

ここまで扱ってきた実時間 Green 関数は物理量の相関関数と密接に関連しているものの、 $g^R$  を求められるのは  $g^C$  の解析接続が成り立つ  $T = 0$  の基底状態の場合のみで、有限温度での計算ができない。しかし、因果 Green 関数の代わりに有限温度の系での  $g^R$  と解析接続し、摂動展開も可能な温度 Green 関数

$$\begin{aligned}\mathcal{G}(u, \mathbf{x}; u', \mathbf{x}') &\equiv -\frac{1}{i\hbar} \left\langle \mathcal{T} \left[ \hat{\Psi}(u, \mathbf{x}) \hat{\Psi}^\dagger(u', \mathbf{x}') \right] \right\rangle_{\text{eq}} \\ &= -\frac{1}{i\hbar} \frac{1}{\Xi_V} \text{Tr}_V \left\{ \mathcal{T} \left[ \hat{\Psi}(u, \mathbf{x}) \hat{\Psi}^\dagger(u', \mathbf{x}') \right] e^{-\beta(\hat{H} - \mu \hat{N})} \right\}\end{aligned}$$

を考えることでこの困難が回避される。ここで、 $\hat{\Psi}(u, \mathbf{x})$ ,  $\hat{\Psi}^\dagger(u, \mathbf{x})$  は、

$$\hat{\Psi}(u, \mathbf{x}) = e^{u\hat{H}} \hat{\Psi}(\mathbf{x}) e^{-u\hat{H}}, \quad \hat{\Psi}^\dagger(u, \mathbf{x}) = e^{u\hat{H}} \hat{\Psi}^\dagger(\mathbf{x}) e^{-u\hat{H}}$$

で定義される Heisenberg 演算子で、熱平均は同じ  $\hat{H}$  に対する熱平衡状態  $(T, \mu; V)$  に対してとっている。

温度 Green 関数を導入する動機として、生成汎関数  $Z[\eta = \bar{\eta} = 0]$  と分配関数  $\Xi_V$  の経路積分表示での類似性に注目する：

$$\begin{aligned}Z[\eta = \bar{\eta} = 0] &= \int \mathcal{D}(\Psi, \bar{\Psi}) \exp \left\{ \frac{i}{\hbar} \int_{-\infty}^{\infty} dt \int_V d^3\mathbf{x} [i\hbar \bar{\Psi} \partial_t \Psi - \mathcal{H}(\Psi, \bar{\Psi})] \right\} \\ \Xi_V &= \int \mathcal{D}(\Psi, \bar{\Psi}) \exp \left\{ - \int_0^\beta du \int_V d^3\mathbf{x} [\bar{\Psi} \partial_u \Psi + \mathcal{H}(\Psi, \bar{\Psi}) - \mu \bar{\Psi} \Psi] \right\}\end{aligned}$$

後者について  $t' = i\hbar u$  と変数変換を行うと、

$$\Xi_V = \int \mathcal{D}(\Psi, \bar{\Psi}) \exp \left\{ \frac{i}{\hbar} \int_0^{i\hbar\beta} dt' \int_V d^3\mathbf{x} [i\hbar \bar{\Psi} \partial_{t'} \Psi + \mathcal{H}(\Psi, \bar{\Psi}) - \mu \bar{\Psi} \Psi] \right\}$$

と表せるので、生成汎関数  $Z[\eta = \bar{\eta} = 0]$  が実軸に沿って時間積分した作用  $S(\infty : -\infty)$  を肩にもつ指数関数を足し上げているのに対し、分配関数  $\Xi_V$  は虚軸に沿った時間積分により与えられる、

$$\begin{aligned}S(\beta, \mu; V) &= \int_0^{i\hbar\beta} dt' \int_V d^3\mathbf{x} [i\hbar \bar{\Psi} \partial_{t'} \Psi + \mathcal{H}(\Psi, \bar{\Psi}) - \mu \bar{\Psi} \Psi] \\ &= i\hbar \int_0^\beta du \int_V d^3\mathbf{x} [\bar{\Psi} \partial_u \Psi + \mathcal{H}(\Psi, \bar{\Psi}) - \mu \bar{\Psi} \Psi]\end{aligned}$$

を肩にもつ指数関数を足し上げていることがわかる。このため一般の生成汎関数  $Z[\eta, \bar{\eta}]$  に対応して

$$\Xi[\eta, \bar{\eta}] = \int \mathcal{D}(\Psi, \bar{\Psi}) \exp \left\{ - \int_0^\beta du \int_V d^3\mathbf{x} [\bar{\Psi} \partial_u \Psi + \mathcal{H}(\Psi, \bar{\Psi}) - \mu \bar{\Psi} \Psi + \bar{\eta} \Psi + \bar{\Psi} \eta] \right\}$$

を導入できて、

$$\begin{aligned}\mathcal{G}(u, \mathbf{x}; u', \mathbf{x}') &\equiv -\frac{1}{i\hbar} \frac{1}{\Xi_V} \frac{\delta^2 \Xi}{\delta \eta(u, \mathbf{x}) \delta \bar{\eta}(u', \mathbf{x}')} \Big|_{\eta=\bar{\eta}=0} \\ &= -\frac{1}{i\hbar} \frac{\int \mathcal{D}(\Psi, \bar{\Psi}) \Psi(u, \mathbf{x}) \bar{\Psi}(u', \mathbf{x}') e^{iS(\beta, \mu; V)/\hbar}}{\int \mathcal{D}(\Psi, \bar{\Psi}) e^{iS(\beta, \mu; V)/\hbar}}\end{aligned}$$

という因果 Green 関数に似た関数を、 $0 < u, u' < \beta$  の範囲で導入できるが、これは先に導入した温度 Green 関数に他ならない。この意味で  $\mathcal{G}$  は虚時間 Green 関数とも呼ばれる。

$\Xi_V$  の経路積分表示において、その積分経路は  $\Psi(0, \mathbf{x}) = \zeta \Psi(\beta, \mathbf{x})$ ,  $\bar{\Psi}(0, \mathbf{x}) = \zeta \bar{\Psi}(\beta, \mathbf{x})$  を満たしていたので、

$$\mathcal{G}(u, \mathbf{x}; \beta, \mathbf{x}') = \zeta \mathcal{G}(u, \mathbf{x}; 0, \mathbf{x}')$$

が成り立つ。一方、定義から  $\mathcal{G}$  は実際には  $u-u'$  にのみ依存する関数  $\mathcal{G}(u-u'; \mathbf{x}, \mathbf{x}')$  ( $-\beta < u-u' < \beta$ ) になっているので、この条件は

$$\mathcal{G}(u - \beta; \mathbf{x}, \mathbf{x}') = \zeta \mathcal{G}(u; \mathbf{x}, \mathbf{x}')$$

という周期性を導く。このため、

$$\mathcal{G}(-\beta; \mathbf{x}, \mathbf{x}') = \zeta \mathcal{G}(0; \mathbf{x}, \mathbf{x}') = \mathcal{G}(\beta; \mathbf{x}, \mathbf{x}')$$

の周期境界条件から導かれる Fourier 級数展開

$$\begin{cases} \tilde{\mathcal{G}}(\omega_n; \mathbf{x}, \mathbf{x}') = \int_{-\beta}^{\beta} du \mathcal{G}(u; \mathbf{x}, \mathbf{x}') e^{i\omega_n u} \\ \mathcal{G}(u; \mathbf{x}, \mathbf{x}') = \frac{1}{2\beta} \sum_{n=-\infty}^{\infty} \tilde{\mathcal{G}}(\omega_n; \mathbf{x}, \mathbf{x}') e^{-i\omega_n u} \end{cases} \quad \left( \omega_n = \frac{n\pi}{\beta} \right)$$

は、 $\mathcal{G}(u; \mathbf{x}, \mathbf{x}')$  は  $\zeta$  の符号、すなわち Fermi 粒子系か Bose 粒子系かによって、

$$\tilde{\omega}_l = \begin{cases} \omega_{2l+1} = \frac{(2l+1)\pi}{\beta} & (\text{Fermi 粒子系}) \\ \omega_{2l} = \frac{2l\pi}{\beta} & (\text{Bose 粒子系}) \end{cases}$$

の周波数のみでしか  $\tilde{\mathcal{G}}(\omega_n; \mathbf{x}, \mathbf{x}')$  が値を残さないという違いが現れる。このことを踏まえて上の Fourier 級数展開を次のように表し直しておく。

$$\tilde{\mathcal{G}}(\tilde{\omega}_l; \mathbf{x}, \mathbf{x}') = \int_0^{\beta} du \mathcal{G}(u; \mathbf{x}, \mathbf{x}') e^{i\tilde{\omega}_l u}, \quad \mathcal{G}(u; \mathbf{x}, \mathbf{x}') = \frac{1}{\beta} \sum_{l=-\infty}^{\infty} \tilde{\mathcal{G}}(\tilde{\omega}_l; \mathbf{x}, \mathbf{x}') e^{-i\tilde{\omega}_l u} \quad (2.5.14)$$

粒子の種類ごとに  $\tilde{\omega}_l$  の定義を取り換えれば (2.5.14) はそのまま成り立つ。 $\tilde{\omega}_l$  は松原振動数と呼ばれる。

## 自由粒子系での温度 Green 関数

### 温度 Green 関数による摂動展開

生成汎関数  $Z[\eta, \bar{\eta}]$  と  $\Xi[\eta, \bar{\eta}]$  の類似性から、 $Z[\eta, \bar{\eta}]$  における (2.5.9) に対応した式として、

$$\begin{aligned} \Xi[\eta, \bar{\eta}] &= \int \mathcal{D}(\Psi, \bar{\Psi}) \exp \left\{ - \int du d^3 \mathbf{x} [\bar{\Psi} \partial_u \Psi - \mathcal{H}_0 - \mathcal{H}_1 - \mu \bar{\Psi} \Psi + \bar{\eta} \Psi + \bar{\Psi} \eta] \right\} \\ &= \exp \left[ - \int_{-\infty}^{\infty} du \int_V d^3 \mathbf{x} \mathcal{H}_1 \left( \zeta \frac{\delta}{\delta \bar{\eta}(u, \mathbf{x})}, \frac{\delta}{\delta \eta(u, \mathbf{x})} \right) \right] Z_0[\eta, \bar{\eta}] \end{aligned}$$

が成り立ち、また (2.5.10) に対応した式として、

$$\Xi[\eta, \bar{\eta}] = \sum_{n=0}^{\infty} \frac{1}{n!} \Xi_{0;V} \exp \left[ -i\hbar \int_0^\beta du \int_V d^3\mathbf{x} \int_0^\beta du' \int_V d^3\mathbf{x}' \frac{\delta}{\delta\Psi(u, \mathbf{x})} \mathcal{G}_0(u, \mathbf{x}; u', \mathbf{x}') \frac{\delta}{\delta\bar{\Psi}(u', \mathbf{x}')} \right] \\ \times \left[ - \int_0^\beta du'' \int_V d^3\mathbf{x}'' \mathcal{H}_1(\Psi, \bar{\Psi}) \right]^n \exp \left[ \int_0^\beta du'' \int_V d^3\mathbf{x}'' (\bar{\eta}\Psi + \bar{\Psi}\eta) \right] \Big|_{\Psi=\bar{\Psi}=0} \quad (2.5.15)$$

という摂動展開公式が成り立つ ( $\Xi_{0;V}, \mathcal{G}_0$  はそれぞれ  $\mathcal{H} = \mathcal{H}_0$  に対して定義された大分配関数と温度 Green 関数)。ここで、生成汎関数の場合と違って分配関数の径路積分はどのような  $\mathcal{H}$  に対しても (反) 周期境界条件を満たす任意の径路にわたって足し上げられているため、分配関数の摂動展開時に断熱仮定の必要はないことに注意する。

$Z[\eta, \bar{\eta}]$  の摂動展開の際と同様に、同じ引数の  $\Psi, \bar{\Psi}$  が正規順序に並んだ積  $\mathcal{O}^{2n}[\Psi, \bar{\Psi}]$  に対して、

$$\left\langle \mathcal{O}^{(2n)}[\Psi, \bar{\Psi}] \right\rangle_\beta \equiv \exp \left[ -i\hbar \int du d^3\mathbf{x} \int du' d^3\mathbf{x}' \frac{\delta}{\delta\Psi(u, \mathbf{x})} \mathcal{G}_0(u, \mathbf{x}; u', \mathbf{x}') \frac{\delta}{\delta\bar{\Psi}(u', \mathbf{x}')} \right] \mathcal{O}[\Psi, \bar{\Psi}] \Big|_{\Psi=\bar{\Psi}=0}$$

を (2.5.6) を用いて求めておくと  $\Xi_V$  の摂動展開が体系的に行えるわけだが、生成汎関数からの類推で  $\mathcal{G}_0(u, \mathbf{x}; u', \mathbf{x}')$  の積に分解されることが期待される。実際この予想は正しく、積の分解について Wick の定理と同様の規則性が成り立つことが Bloch-de Dominicis の定理として知られる。このため大分配関数  $\Xi_V = \Xi[\eta = \bar{\eta} = 0]$  の摂動展開にも Feynman 図を用いた手法が適用できる。ただし、

大分配関数の摂動展開における Feynman 図の書き方

1. 摂動展開の次数  $n$  を決める。
2.  $n$  本の点線を描く。
3. 点線がもつ頂点 1 つあたりに入る実線と出ていく実線がそれぞれ 1 本ずつになるよう、全ての頂点を実線で結ぶ。1 本の実線で同じ頂点に出入りするループを描いても構わない。

の手順でダイアグラムを書くことは全く変わらないが、Feynman 則が

( $u, \mathbf{x}$ ) 表示での Feynman 則

- (i) 引数  $(u_n, \mathbf{x}_n)$  : 頂点
- (ii)  $\mathcal{G}_0(n; n')$  :  $(u_n, \mathbf{x}_n)$  から  $(u_{n'}, \mathbf{x}_{n'})$  へ対応した頂点を結ぶ実線。  $n = n'$  の場合は  $(u_n, \mathbf{x}_n)$  の頂点を通るループ
- (iii) 実線がつながってできたループが奇数個なら、 $\zeta$  が乗じられる。
- (iv)  $-v(\mathbf{x}_1, \mathbf{x}_2, \dots) \delta(u_1, u_2, \dots)$  :  $(u_j, \mathbf{x}_j)$  に対応した頂点を  $v$  の引数の順に結ぶ点線
- (v) 積分  $\int du_n d^3\mathbf{x}_n$  : 点線で結ばれた頂点ごとに行う
- (vi)  $(n!)^{-1}$  : 点線の本数を  $n$  とする

というように少し変更される。

系の相互作用が並進対称性をもつような 2 体相互作用のみであれば、 $\mathcal{G}_0(u, \mathbf{x}; u', \mathbf{x}')$  に対する Fourier 級数展開

$$\mathcal{G}_0(u - u', \mathbf{x} - \mathbf{x}') = \frac{1}{\beta V} \sum_{l, \mathbf{k}} \tilde{\mathcal{G}}_0(\mathbf{k}, \tilde{\omega}_l) e^{i[\mathbf{k} \cdot (\mathbf{x} - \mathbf{x}') - \tilde{\omega}_l(u - u')]}$$

のように  $v$  にも Fourier 級数展開を定義できて  $(\mathbf{k}, \tilde{\omega}_l)$  表示に移ることができる。

$$v(\mathbf{x} - \mathbf{x}')\delta(u - u') = \frac{1}{\beta V} \sum_{l, \mathbf{q}} \tilde{v}(\mathbf{q}) e^{i[\mathbf{q} \cdot (\mathbf{x} - \mathbf{x}') - \tilde{\omega}_l(u - u')]}$$

これらの展開を代入した摂動展開の各項について、Feynman 図の点線の両端の頂点に対応する  $(u_1, \mathbf{x}_2), (u_2, \mathbf{x}_2)$  を先に積分した際に生じるデルタ関数は、

$$\begin{aligned} \int_0^\beta du_1 e^{-i(\tilde{\omega}_1 - \tilde{\omega}_2 + \tilde{\omega}_l)u_1} \int_V d^3\mathbf{x}_1 e^{i(\mathbf{k}_1 - \mathbf{k}_2 + \mathbf{q}) \cdot \mathbf{x}_1} &= \beta V \delta_{l_1 + l_2, l} \delta_{\mathbf{k}_1 + \mathbf{q}, \mathbf{k}_2} \\ \int_0^\beta du_2 e^{-i(\tilde{\omega}_3 - \tilde{\omega}_4 - \tilde{\omega}_l)u_2} \int_V d^3\mathbf{x}_2 e^{i(\mathbf{k}_3 - \mathbf{k}_4 - \mathbf{q}) \cdot \mathbf{x}_2} &= \beta V \delta_{l_3, l_4 + l} \delta_{\mathbf{k}_3 - \mathbf{q}, \mathbf{k}_4} \end{aligned}$$

というようになる<sup>14)</sup> ので、 $(\mathbf{k}, \tilde{\omega}_l)$  表示での Feynman 則もまた変更が必要で、次のようになる。

$(\mathbf{k}, \tilde{\omega}_l)$  表示での Feynman 則

- (i) 頂点：つながった実線と点線に対応した  $\tilde{\mathcal{G}}_0(\mathbf{k}, \tilde{\omega}_l), \tilde{v}(\mathbf{q}, \tilde{\omega}_l)$  について、線種を問わず入る線と出ていく線ごとで波数・松原周波数の和をとると両者が等しくなるように引数の値を制限する。
- (ii) 実線： $\tilde{\mathcal{G}}_0(\mathbf{k}, \tilde{\omega}_l)$
- (iii) 実線がつながってできたループが奇数個なら、 $\zeta$  が乗じられる。
- (iv) 点線： $-\tilde{v}(\mathbf{q})$
- (v) つながった実線・点線：対応する因子を掛け合わせて、それぞれの因子の引数について (i) の条件を満たす範囲で) 和をとる。
- (vi) 点線の本数  $n$ ： $(n!)^{-1}(\beta V)^{-n}$

大分配関数の特徴として、(1.4.3) によりグランドポテンシャル  $J(T, \mu; V)$  と関係づけられることが挙げられる。(2.5.15) にこのことを用いると、

$$\begin{aligned} e^{-\beta(J - J_0)} &= \sum_{n=0}^{\infty} \frac{1}{n!} \exp \left[ -i\hbar \int du d^3\mathbf{x} \int du' d^3\mathbf{x}' \frac{\delta}{\delta \Psi(u, \mathbf{x})} \mathcal{G}_0(u, \mathbf{x}; u', \mathbf{x}') \frac{\delta}{\delta \bar{\Psi}(u', \mathbf{x}')} \right] \\ &\quad \times \left[ - \int du'' d^3\mathbf{x}'' \mathcal{H}_1(\Psi, \bar{\Psi}) \right]^n \Big|_{\Psi = \bar{\Psi} = 0} \end{aligned}$$

という  $J(T, \mu; V)$  に対する摂動展開公式が得られる ( $J_0(T, \mu; V)$  は相互作用がない系のグランドポテンシャル)。一方、右辺をダイアグラム展開した際には、既約部分をもつ Feynman 図の性質から

$$(\text{右辺}) = \left( \begin{array}{c} \text{可能な全ての} \\ \text{Feynman 図} \end{array} \right) = \sum_n \frac{1}{n!} \left( \begin{array}{c} \text{可能な全ての} \\ \text{既約な Feynman 図} \end{array} \right)^n = \exp \left( \begin{array}{c} \text{可能な全ての} \\ \text{既約な Feynman 図} \end{array} \right)$$

となっているため、グランドポテンシャルの摂動展開の際には、

14) 表記の規則は以下の通り：

- $\mathbf{k}_1, \mathbf{k}_2, l_1, l_2$  は  $(u_1, \mathbf{x}_1)$  に、 $\mathbf{k}_1, \mathbf{k}_2, l_3, l_4$  は  $(u_2, \mathbf{x}_2)$  にそれぞれつながる  $\mathcal{G}_0$  の Fourier 成分の波数および松原周波数の添字
- $\mathbf{q}, l$  は注目した点線に対応する  $v$  の Fourier 成分  $\tilde{v}(\mathbf{q})$  の波数および松原周波数の添字
- $i = 1, 2, 3, 4$  に対して、 $\tilde{\omega}_i$  は添字  $l_i$  で指定される松原周波数  $\tilde{\omega}_{l_i}$



— グランドポテンシャルの摂動展開における Feynman 図の書き方 (1.,2. は大分配関数と同じ) —

3. 独立した部分のない、既約な図形となるもののみ描く。

が成り立つ。

(2.5.15) を用いることで温度 Green 関数の摂動展開公式も導かれ、因果 Green 関数の場合とほぼ同様に Feynman 図を描いて Feynman 則で式と対応させることができる。

( $u, \mathbf{x}$ ) 表示での Feynman 則 (続き) —

(vi) 元の  $\mathcal{G}_0$  の引数  $(u, \mathbf{x}), (u', \mathbf{x}')$  : 実線が 1 本しかつながらない頂点。 $(u, \mathbf{x})$  に対応する頂点に入る向き、 $(u', \mathbf{x}')$  に対応する頂点が出ていく向きの実線とつながる。

( $\mathbf{k}, \tilde{\omega}_l$ ) 表示での Feynman 則 (続き) —

(vii) 外の頂点にのびる実線 (外線) : 元の  $\tilde{\mathcal{G}}$  の引数  $(\mathbf{k}, \tilde{\omega}_l)$  をもった  $\tilde{\mathcal{G}}_0$

— 温度 Green 関数の摂動展開における Feynman 図の書き方 —

1. 摂動展開の次数  $n$  を決める。
2.  $n$  本の点線と 2 つの頂点を描く。
3. 点線がもつ頂点には入る実線と出ていく実線がそれぞれ 1 本ずつになるよう、外の 2 つの頂点には一方は入る実線が、他方には出ていく実線が 1 本のみつながるように、全ての頂点を実線で結んで、独立した部分がない既約な図形を描く。1 本の実線で同じ頂点に出入りするループを描いても構わない。

### 2.5.5 Keldysh の Green 関数

## 2.6 スケーリング理論・くりこみ群

## 2.7 Floquet 理論

## 2.8 行列積状態・テンソルネットワーク状態

# 第3章 量子多体系としての固体結晶 I：バンド描像での電子相関

固体結晶中の電子多体系は量子多体系の代表例と言ってよい。特に電子相関を取り扱う際には多体系の量子力学の方法が不可欠である。この章ではまず固体結晶中の1粒子状態について述べてバンド描像を確立した後、電子間相互作用の取り扱いとその影響を見る。また、バンド描像をとることによって系に導入できるようになる幾何学的位相についても考える。

本章では、常に以下の2点を仮定する。

- 電子と原子核イオン、および電子同士の相互作用は電磁場が媒介するが、その変化は電子運動の時間スケールに比べて非常に早い。よって各相互作用は電子・イオンの位置にのみ依存したポテンシャルで表せる。
- 格子点上の原子核イオンは電子に比べて非常に重く、運動の時間スケールが長いいため、イオンは格子点で静止しているとみなす。

## 3.1 固体電子の1粒子状態とバンド描像

磁場のない固体結晶中の電子のハミルトニアンを、電子間相互作用を無視して書き下すと次のようになる<sup>1)</sup>。

$$\hat{H}_0 = \sum_{\sigma=\uparrow,\downarrow} \int_V d^3x \hat{\Psi}_\sigma^\dagger(\mathbf{x}) \left( -\frac{\hbar^2}{2m} \nabla^2 + V(\mathbf{x}) \right) \hat{\Psi}_\sigma(\mathbf{x}) \quad (3.1.1)$$

ポテンシャル  $V(\mathbf{x})$  を形成する原子核イオンは格子点上に配列しているため、

$$V(\mathbf{x} + \mathbf{R}) = V(\mathbf{x})$$

$$(\mathbf{R} \equiv n_1 \mathbf{a}_1 + n_2 \mathbf{a}_2 + n_3 \mathbf{a}_3, n_1, n_2, n_3 \in \mathbb{Z})$$

というように周期関数で表される。 $\mathbf{R}$  は格子ベクトル、 $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3$  は基本格子ベクトルと呼ばれる。

### 3.1.1 Bloch 状態

基本格子ベクトル  $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3$  に対して基本逆格子ベクトル

$$\mathbf{b}_1 = 2\pi \frac{\mathbf{a}_2 \times \mathbf{a}_3}{\mathbf{a}_1 \cdot (\mathbf{a}_2 \times \mathbf{a}_3)}, \quad \mathbf{b}_2 = 2\pi \frac{\mathbf{a}_3 \times \mathbf{a}_1}{\mathbf{a}_2 \cdot (\mathbf{a}_3 \times \mathbf{a}_1)}, \quad \mathbf{b}_3 = 2\pi \frac{\mathbf{a}_1 \times \mathbf{a}_2}{\mathbf{a}_3 \cdot (\mathbf{a}_1 \times \mathbf{a}_2)}$$

を定義し、逆格子ベクトルを  $\mathbf{G} = m_1 \mathbf{b}_1 + m_2 \mathbf{b}_2 + m_3 \mathbf{b}_3$  ( $m_1, m_2, m_3 \in \mathbb{Z}$ ) で定義すると、 $V(\mathbf{x})$  の Fourier 級数展開を次のように表せる (u.c. は  $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3$  が3辺をなす平行六面体内での積分を表す。この領域は基本格子という)。

$$V(\mathbf{x}) = \sum_{m_1, m_2, m_3} \tilde{V}_{(m_1, m_2, m_3)} e^{i\mathbf{G} \cdot \mathbf{x}}, \quad \tilde{V}_{(m_1, m_2, m_3)} = \frac{1}{\mathbf{a}_1 \cdot (\mathbf{a}_2 \times \mathbf{a}_3)} \int_{\text{u.c.}} d^3x V(\mathbf{x}) e^{-i\mathbf{G} \cdot \mathbf{x}}$$

1) Coulomb ゲージ  $\nabla \cdot \mathbf{A} = 0$  を課している。磁場なしの条件  $\nabla \times \mathbf{A} = 0$  と合わせると  $\mathbf{A} = 0$  が導かれる。

この表式と  $\hat{\Psi}(\mathbf{x})$  の Fourier 級数展開 (1.3.5) を (3.1.1) に用いると、

$$\begin{aligned}
\hat{H}_0 &= \sum_{\sigma=\uparrow,\downarrow} \int_V \frac{d^3\mathbf{x}}{V} \sum_{\mathbf{p},\mathbf{p}'} \left( \frac{\mathbf{p}^2}{2m} + \sum_{m_1,m_2,m_3} \tilde{V}_{(m_1,m_2,m_3)} e^{i\mathbf{G}\cdot\mathbf{x}} \right) e^{-i(\mathbf{p}-\mathbf{p}')\cdot\mathbf{x}/\hbar} \hat{a}_{\mathbf{p}',\sigma}^\dagger \hat{a}_{\mathbf{p},\sigma} \\
&= \sum_{\sigma=\uparrow,\downarrow} \sum_{\mathbf{p},\mathbf{p}'} \left( \frac{\mathbf{p}^2}{2m} \delta_{\mathbf{p}\mathbf{p}'} + \sum_{m_1,m_2,m_3} \tilde{V}_{(m_1,m_2,m_3)} \delta_{\mathbf{p}+\hbar\mathbf{G},\mathbf{p}'} \right) \hat{a}_{\mathbf{p},\sigma}^\dagger \hat{a}_{\mathbf{p}',\sigma} \\
&= \sum_{\sigma=\uparrow,\downarrow} \sum_{\mathbf{k}} \sum_{m_1,m_2,m_3} \sum_{m'_1,m'_2,m'_3} \left( \frac{\hbar}{2m} |\mathbf{k} + \mathbf{G}|^2 \delta_{\mathbf{G}\mathbf{G}'} + \tilde{V}_{(m_1-m'_1,m_2-m'_2,m_3-m'_3)} \right) \\
&\quad \times \hat{a}_{\hbar(\mathbf{k}+\mathbf{G}),\sigma}^\dagger \hat{a}_{\hbar(\mathbf{k}+\mathbf{G}'),\sigma}
\end{aligned}$$

とハミルトニアンが表せるとわかる。ここで、 $\mathbf{k}$  は

$$\mathbf{k} = \left( \frac{2\pi}{L}n_x, \frac{2\pi}{L}n_y, \frac{2\pi}{L}n_z \right)$$

であり、和の範囲は  $\mathbf{b}_1, \mathbf{b}_2, \mathbf{b}_3$  で 3 辺が指定される平行六面体にとってもよいが、実用上  $\mathbf{k} = (0, 0, 0)$  周りの Wigner-Seitz セルにとることがほとんどである。この領域は (第 1) Brillouin ゾーンとも呼ばれ、その体積は平行六面体で和の範囲をとった場合と等しいので、領域内の  $\mathbf{k}$  の数は

$$\frac{\mathbf{b}_1 \cdot (\mathbf{b}_2 \times \mathbf{b}_3)}{(2\pi/L)^3} = \frac{V}{\mathbf{a}_1 \cdot (\mathbf{a}_2 \times \mathbf{a}_3)} (\equiv N)$$

というように系に含まれる基本格子数に等しい。 $\tilde{V}_{(m_1,m_2,m_3)}$  の定義から、

$$\begin{aligned}
\tilde{V}_{(-m_1,-m_2,-m_3)} &= \frac{1}{\mathbf{a}_1 \cdot (\mathbf{a}_2 \times \mathbf{a}_3)} \int_{\text{u.c.}} d^3\mathbf{x} V(\mathbf{x}) e^{i\mathbf{G}\cdot\mathbf{x}} \\
&= \frac{1}{\mathbf{a}_1 \cdot (\mathbf{a}_2 \times \mathbf{a}_3)} \int_{\text{u.c.}} d^3(-\mathbf{x}) V(-\mathbf{x} + \mathbf{a}_1 + \mathbf{a}_2 + \mathbf{a}_3) e^{-i\mathbf{G}\cdot(-\mathbf{x})} \\
&= \frac{1}{\mathbf{a}_1 \cdot (\mathbf{a}_2 \times \mathbf{a}_3)} \int_{\text{u.c.}} d^3\mathbf{x} V(\mathbf{x}) e^{-i\mathbf{G}\cdot\mathbf{x}} \\
&= \tilde{V}_{(m_1,m_2,m_3)}
\end{aligned}$$

であるので、

$$\frac{\hbar}{2m} |\mathbf{k} + \mathbf{G}|^2 \delta_{\mathbf{G}\mathbf{G}'} + \tilde{V}_{(m_1-m'_1,m_2-m'_2,m_3-m'_3)}$$

は、 $\mathbf{G} = (m_1, m_2, m_3)$  を行、 $\mathbf{G}' = (m'_1, m'_2, m'_3)$  を列のそれぞれ添字だと見れば実対称行列になっていて、スペクトル分解

$$\frac{\hbar}{2m} |\mathbf{k} + \mathbf{G}|^2 \delta_{\mathbf{G}\mathbf{G}'} + \tilde{V}_{(m_1-m'_1,m_2-m'_2,m_3-m'_3)} = \sum_n \epsilon_{n,\mathbf{k}} c_{n,\mathbf{k};\mathbf{G}} c_{n,\mathbf{k};\mathbf{G}'}^*$$

が可能である ( $\epsilon_{n,\mathbf{k}}$  は実数)。この分解を用いると、ハミルトニアンが

$$\begin{aligned}
\hat{H}_0 &= \sum_{\mathbf{k}} \sum_{m'_1,m'_2,m'_3} \sum_{m_1,m_2,m_3} \left( \sum_n \epsilon_{n,\mathbf{k}} c_{n,\mathbf{k};\mathbf{G}} c_{n,\mathbf{k};\mathbf{G}'}^* \right) \hat{a}_{\hbar(\mathbf{k}+\mathbf{G}'),\sigma}^\dagger \hat{a}_{\hbar(\mathbf{k}+\mathbf{G}),\sigma} \\
&= \sum_{n,\mathbf{k}} \epsilon_{n,\mathbf{k}} \hat{a}^\dagger(\varphi_{n,\mathbf{k};\sigma}) \hat{a}(\varphi_{n,\mathbf{k};\sigma})
\end{aligned}$$

と表せることがわかる。ここで定義された生成消滅演算子

$$\hat{a}(\varphi_{n,\mathbf{k};\sigma}) \equiv \sum_{m_1,m_2,m_3} c_{n,\mathbf{k};\mathbf{G}} \hat{a}_{\hbar(\mathbf{k}+\mathbf{G}),\sigma}, \quad \hat{a}^\dagger(\varphi_{n,\mathbf{k};\sigma}) \equiv \sum_{m_1,m_2,m_3} c_{n,\mathbf{k};\mathbf{G}}^* \hat{a}_{\hbar(\mathbf{k}+\mathbf{G}),\sigma}^\dagger$$

に対応する 1 粒子状態  $|\varphi_{n,\mathbf{k};\sigma}\rangle$  は Bloch 状態と呼ばれる。 $\hat{a}^\dagger(u_{n,\mathbf{k};\sigma})$  と場の演算子  $\hat{\Psi}_\sigma(\mathbf{x})$  との反交換関係は 1 粒子状態の波動関数  $\varphi_{n,\mathbf{k}}(\mathbf{x}) = \langle \mathbf{x} | \varphi_{n,\mathbf{k}} \rangle$  を与えるが、

$$\begin{aligned} \left\{ \hat{\Psi}_\sigma(\mathbf{x}), \hat{a}^\dagger(\varphi_{n,\mathbf{k};\sigma}) \right\} &= \sum_{m_1, m_2, m_3} c_{n,\mathbf{k};\mathbf{G}} \left\{ \hat{\Psi}_\sigma(\mathbf{x}), \hat{a}_{\hbar(\mathbf{k}+\mathbf{G}),\sigma}^\dagger \right\} \\ &= \frac{1}{\sqrt{V}} \sum_{m_1, m_2, m_3} e^{i(\mathbf{k}+\mathbf{G})\cdot\mathbf{x}} c_{n,\mathbf{k};\mathbf{G}} \left( \because \left\{ \hat{\Psi}_\sigma(\mathbf{x}), \hat{a}_{\mathbf{p},\sigma}^\dagger \right\} = \langle \mathbf{x} | \mathbf{p} \rangle = \frac{1}{\sqrt{V}} e^{i\mathbf{p}\cdot\mathbf{x}/\hbar} \right) \end{aligned}$$

より、 $\varphi_{n,\mathbf{k}}(\mathbf{x})$  は次のように表されることがわかる。

$$\varphi_{n,\mathbf{k}}(\mathbf{x}) = e^{i\mathbf{k}\cdot\mathbf{x}} u_{n,\mathbf{k}}(\mathbf{x}) \quad \left( u_{n,\mathbf{k}}(\mathbf{x}) \equiv \frac{1}{\sqrt{V}} \sum_{m_1, m_2, m_3} e^{i\mathbf{G}\cdot\mathbf{x}} c_{n,\mathbf{k};\mathbf{G}} \right)$$

ここで、 $e^{i\mathbf{G}\cdot\mathbf{R}} = 1$  より  $u_{n,\mathbf{k}}(\mathbf{x} + \mathbf{R}) = u_{n,\mathbf{k}}(\mathbf{x})$  が成り立つことに注意する。このため、

$$\varphi_{n,\mathbf{k}}(\mathbf{x} + \mathbf{R}) = e^{i\mathbf{k}\cdot\mathbf{R}} \varphi_{n,\mathbf{k}}(\mathbf{x})$$

というように波動関数はポテンシャルの周期性を反映しながら位相の変化を許すものになっている。

対角化の過程から、 $c_{n,\mathbf{k};\mathbf{G}}$  は固有値  $\epsilon_{n,\mathbf{k}}$  の固有ベクトルの第  $\mathbf{G}$  成分なので、

$$\sum_{m_1, m_2, m_3} c_{n,\mathbf{k};\mathbf{G}} c_{n',\mathbf{k};\mathbf{G}}^* = \delta_{nn'}$$

が成り立つ。すなわち、

$$\left\{ \hat{a}(\varphi_{n,\mathbf{k};\sigma}), \hat{a}^\dagger(\varphi_{n',\mathbf{k};\sigma}) \right\} = \sum_{m_1, m_2, m_3} \sum_{m'_1, m'_2, m'_3} c_{n,\mathbf{k};\mathbf{G}} c_{n',\mathbf{k};\mathbf{G}'}^* \left\{ \hat{a}_{\hbar(\mathbf{k}+\mathbf{G}),\sigma}, \hat{a}_{\hbar(\mathbf{k}+\mathbf{G}'),\sigma}^\dagger \right\} = \delta_{nn'}$$

というように異なる  $n$  の間での Bloch 状態は  $\mathbf{k}$  が同じでも直交する。このような、Brillouin ゾーン内で互いに直交する複数のエネルギー分散が存在するような固体電子の 1 粒子固有状態の構造をバンド構造といい、 $n$  をバンド指標と呼ぶ。

対角化の過程からわかるように、Bloch 状態を指定する添え字  $n, \mathbf{k}$  の内  $n$  は  $\mathbf{k}$  空間内の基本逆格子の数だけ添字が走るので、以降  $n$  の代わりに  $(m_1, m_2, m_3) \in \mathbb{Z}^3$  で指定することがある。ポテンシャルがない自由電子系の場合には、Bloch 状態が

$$\hat{a}(\varphi_{n,\mathbf{k};\sigma}) = \hat{a}_{\hbar(\mathbf{k}+\mathbf{G}),\sigma}, \quad \epsilon_{n,\mathbf{k}} = \frac{\hbar^2}{2m} |\mathbf{k} + \mathbf{G}|^2 \quad (\mathbf{G} = m_1 \mathbf{b}_1 + m_2 \mathbf{b}_2 + m_3 \mathbf{b}_3)$$

というように定義できて、Brillouin ゾーン端や  $\mathbf{k} = \mathbf{0}$  で異なるバンドに属する Bloch 状態が縮退する。ポテンシャルがある場合には RS 摂動論 (2.1 節参照) で見たようにこの縮退は解けるため、バンド構造にはエネルギーギャップが存在している。

$|\varphi_{n,\mathbf{k};\sigma}\rangle$  が 1 粒子状態空間上での正規直交系をなすことから、完全性関係

$$\sum_{\sigma=\uparrow,\downarrow} \sum_{n,\mathbf{k}} |\varphi_{n,\mathbf{k};\sigma}\rangle \langle \varphi_{n,\mathbf{k};\sigma}| = \hat{I}$$

が成り立つので、 $\varphi_{n,\mathbf{k}}(\mathbf{x} + \mathbf{R}) = e^{i\mathbf{k}\cdot\mathbf{R}} \varphi_{n,\mathbf{k}}(\mathbf{x})$  を満たす  $\varphi_{n,\mathbf{k}}(\mathbf{x})$  を用いて、

$$\hat{\Psi}_\sigma(\mathbf{x}) = \sum_{n,\mathbf{k}} \varphi_{n,\mathbf{k}}(\mathbf{x}) \hat{a}(\varphi_{n,\mathbf{k};\sigma}), \quad \hat{\Psi}_\sigma^\dagger(\mathbf{x}) = \sum_{n,\mathbf{k}} \varphi_{n,\mathbf{k}}^*(\mathbf{x}) \hat{a}^\dagger(\varphi_{n,\mathbf{k};\sigma})$$

と場の演算子を表せるとわかる。(1.3.4)にこれらの関係を用いることで位置演算子  $\hat{x}$ 、運動量演算子  $\hat{p}$  は次のように表せるとわかる。

$$\begin{aligned}\hat{x} &= \sum_{\sigma=\uparrow,\downarrow} \sum_{n,\mathbf{k}} \sum_{n',\mathbf{k}'} \hat{a}^\dagger(\varphi_{n,\mathbf{k};\sigma}) \hat{a}(\varphi_{n',\mathbf{k}';\sigma}) \int_V d^3\mathbf{x} \mathbf{x} \varphi_{n,\mathbf{k}}^*(\mathbf{x}) \varphi_{n',\mathbf{k}'}(\mathbf{x}) \\ \hat{p} &= \sum_{\sigma=\uparrow,\downarrow} \sum_{n,\mathbf{k}} \sum_{n',\mathbf{k}'} \hat{a}^\dagger(\varphi_{n,\mathbf{k};\sigma}) \hat{a}(\varphi_{n',\mathbf{k}';\sigma}) \int_V d^3\mathbf{x} \varphi_{n,\mathbf{k}}^*(\mathbf{x}) \frac{\hbar}{i} \nabla \varphi_{n',\mathbf{k}'}(\mathbf{x})\end{aligned}$$

特に  $\hat{p}$  は、 $\varphi_{n,\mathbf{k}}(\mathbf{x})$  の性質から (A.2 節参照)、 $\epsilon_{n,\mathbf{k}}$  を  $\mathbf{k}$  の連続関数とみなしたときに次のように表せる。

$$\hat{p} = \frac{m}{\hbar} \sum_{\sigma=\uparrow,\downarrow} \sum_{n,\mathbf{k}} \nabla_{\mathbf{k}} \epsilon_{n,\mathbf{k}} \hat{a}^\dagger(\varphi_{n,\mathbf{k};\sigma}) \hat{a}(\varphi_{n,\mathbf{k};\sigma})$$

### 3.1.2 Wannier 状態

以降は Bloch 状態の生成消滅演算子を  $\hat{a}_{n\mathbf{k},\sigma} = \hat{a}(\varphi_{n,\mathbf{k};\sigma})$ ,  $\hat{a}_{n\mathbf{k},\sigma}^\dagger = \hat{a}^\dagger(\varphi_{n,\mathbf{k};\sigma})$  と表すことにする。

$\hat{a}_{n\mathbf{k},\sigma}$ ,  $\hat{a}_{n\mathbf{k},\sigma}^\dagger$  は定義域である Brillouin ゾーンにおいて周期境界条件を満たしているの、離散 Fourier 変換を  $\mathbf{R} = n_1 \mathbf{a}_1 + n_2 \mathbf{a}_2 + n_3 \mathbf{a}_3$  を用いて

$$\hat{c}_{n,\sigma}(\mathbf{R}) = \frac{1}{\sqrt{N}} \sum_{\mathbf{k} \in \text{BZ}} e^{i\mathbf{k} \cdot \mathbf{R}} \hat{a}_{n\mathbf{k},\sigma}, \quad \hat{c}_{n,\sigma}^\dagger(\mathbf{R}) = \frac{1}{\sqrt{N}} \sum_{\mathbf{k} \in \text{BZ}} e^{-i\mathbf{k} \cdot \mathbf{R}} \hat{a}_{n\mathbf{k},\sigma}^\dagger$$

で定義できる。生成消滅演算子  $\hat{c}_{n,\sigma}(\mathbf{R})$ ,  $\hat{c}_{n,\sigma}^\dagger(\mathbf{R})$  に対応する 1 粒子状態  $|w_{n,\sigma}(\mathbf{R})\rangle$  を Wannier 状態という。

$\hat{c}_{n,\sigma}(\mathbf{R})$  と  $\hat{c}_{n',\sigma}^\dagger(\mathbf{R}')$  の反交換関係は、Bloch 状態の反交換関係から、

$$\{\hat{c}_{n,\sigma}(\mathbf{R}), \hat{c}_{n',\sigma}^\dagger(\mathbf{R}')\} = \frac{1}{N} \sum_{\mathbf{k}, \mathbf{k}' \in \text{BZ}} e^{i(\mathbf{k} \cdot \mathbf{R} - \mathbf{k}' \cdot \mathbf{R}')} \{\hat{a}_{n\mathbf{k},\sigma}, \hat{a}_{n'\mathbf{k}',\sigma}^\dagger\} = \delta_{nn'} \delta_{\mathbf{R}\mathbf{R}'}$$

というように与えられるため、異なるバンド  $n$  および格子点  $\mathbf{R}$  に依存する Wannier 状態は直交するとわかる。このことから Wannier 状態は各バンドで格子点周りに局在するような状態を表していると考えられる。

$\hat{a}_{n\mathbf{k},\sigma}$ ,  $\hat{a}_{n\mathbf{k},\sigma}^\dagger$  によるハミルトニアン表現

$$\hat{H}_0 = \sum_{\sigma=\uparrow,\downarrow} \sum_{n\mathbf{k}} \epsilon_{n\mathbf{k}} \hat{a}_{n\mathbf{k},\sigma}^\dagger \hat{a}_{n\mathbf{k},\sigma}$$

に  $\hat{c}_{n,\sigma}(\mathbf{R})$ ,  $\hat{c}_{n,\sigma}^\dagger(\mathbf{R})$  の離散 Fourier 逆変換

$$\hat{a}_{n\mathbf{k},\sigma} = \frac{1}{\sqrt{N}} \sum_{\mathbf{R} \in V} e^{-i\mathbf{k} \cdot \mathbf{R}} \hat{c}_{n,\sigma}(\mathbf{R}), \quad \hat{a}_{n\mathbf{k},\sigma}^\dagger = \frac{1}{\sqrt{N}} \sum_{\mathbf{R} \in V} e^{i\mathbf{k} \cdot \mathbf{R}} \hat{c}_{n,\sigma}^\dagger(\mathbf{R})$$

を用いると、

$$\begin{aligned}\hat{H}_0 &= \frac{1}{N} \sum_{\sigma=\uparrow,\downarrow} \sum_{n\mathbf{k}} \sum_{\mathbf{R}, \mathbf{R}' \in V} e^{i\mathbf{k} \cdot (\mathbf{R} - \mathbf{R}')} \epsilon_{n\mathbf{k}} \hat{c}_{n,\sigma}^\dagger(\mathbf{R}) \hat{c}_{n,\sigma}(\mathbf{R}') \\ &= \sum_{\sigma=\uparrow,\downarrow} \sum_n \sum_{\mathbf{R} \in V} \hat{c}_{n,\sigma}^\dagger(\mathbf{R}) \left[ \sum_{\boldsymbol{\delta}} \left( \frac{1}{N} \sum_{\mathbf{k} \in \text{BZ}} e^{i\mathbf{k} \cdot \boldsymbol{\delta}} \epsilon_{n\mathbf{k}} \right) \hat{c}_{n,\sigma}(\mathbf{R} + \boldsymbol{\delta}) \right]\end{aligned}$$

という表式が得られる ( $\boldsymbol{\delta} = d_1 \mathbf{a}_1 + d_2 \mathbf{a}_2 + d_3 \mathbf{a}_3$ ,  $d_1, d_2, d_3 \in \mathbb{Z}$ )。  $\epsilon_{n\mathbf{k}}$  が  $\mathbf{k}$  に依存しないときは、

$$\begin{aligned}\hat{H}_0 &= \sum_{\sigma=\uparrow,\downarrow} \sum_n \sum_{\mathbf{R} \in V} \hat{c}_{n,\sigma}^\dagger(\mathbf{R}) \left[ \epsilon_n \sum_{\boldsymbol{\delta}} \left( \frac{1}{N} \sum_{\mathbf{k} \in \text{BZ}} e^{i\mathbf{k} \cdot \boldsymbol{\delta}} \right) \hat{c}_{n,\sigma}(\mathbf{R} + \boldsymbol{\delta}) \right] \\ &= \sum_{\sigma=\uparrow,\downarrow} \sum_n \sum_{\mathbf{R} \in V} \hat{c}_{n,\sigma}^\dagger(\mathbf{R}) \left( \epsilon_n \sum_{\boldsymbol{\delta}} \delta_{\boldsymbol{\delta}0} \hat{c}_{n,\sigma}(\mathbf{R} + \boldsymbol{\delta}) \right) \\ &= \sum_{\sigma=\uparrow,\downarrow} \sum_n \sum_{\mathbf{R} \in V} \epsilon_n \hat{c}_{n,\sigma}^\dagger(\mathbf{R}) \hat{c}_{n,\sigma}(\mathbf{R})\end{aligned}$$

というように各格子点に局在した状態が系の固有状態になる。この状態は電子が完全にポテンシャルに束縛されて原子系を形成していることを意味している。  $|\varphi_{n\mathbf{k},\sigma}\rangle$  と同様に  $\epsilon_{n\mathbf{k}}$  も周期境界条件を満たしていて、

$$t_n(\boldsymbol{\delta}) \equiv -\frac{1}{N} \sum_{\mathbf{k} \in \text{BZ}} e^{i\mathbf{k} \cdot \boldsymbol{\delta}} \epsilon_{n\mathbf{k}}$$

はその離散 Fourier 成分になっているが、この量は電子が  $\boldsymbol{\delta}$  離れた格子点に飛び移る遷移確率に関係している (2.2 節で関連する議論を行っている)。特に、最近接格子点のみに等確率で遷移が許されるような系

$$t_n(\pm \mathbf{a}_1) = t_n(\pm \mathbf{a}_2) = t_n(\pm \mathbf{a}_3) (\equiv t_n), \quad t_n(\boldsymbol{\delta}) = 0 \quad (\boldsymbol{\delta} \neq \pm \mathbf{a}_j)$$

では、離散 Fourier 逆変換より

$$\epsilon_{n\mathbf{k}} = \epsilon_n - t_n \sum_j \cos(\mathbf{k} \cdot \mathbf{a}_j)$$

というようにバンド分散が  $\cos$  で表される。このような場合を強束縛模型という。

## 3.2 電子間の Coulomb 相互作用

電子間にはたらく Coulomb 相互作用は、次のような 2 体ポテンシャルで表される。

$$V(\mathbf{x}_1, \mathbf{x}_2) = \frac{e^2}{4\pi\epsilon_0} \frac{1}{|\mathbf{x}_1 - \mathbf{x}_2|}$$

この相互作用を 2 体演算子として場の演算子を用いて表すと、

$$\hat{V} = \frac{1}{2} \frac{e^2}{4\pi\epsilon_0} \int_V d^3\mathbf{x} \int_V d^3\mathbf{x}' \frac{1}{|\mathbf{x} - \mathbf{x}'|} \hat{\Psi}^\dagger(\mathbf{x}) \hat{\Psi}^\dagger(\mathbf{x}') \hat{\Psi}(\mathbf{x}') \hat{\Psi}(\mathbf{x})$$

となる。

## 3.3 相互作用の遮蔽

## 第 4 章 量子多体系としての固体結晶 II : BCS 理論

Bardeen, Cooper, Schriffer により提唱された BCS 理論は超伝導状態の金属電子のふるまいを説明する。この章では BCS 理論の仮定から議論を始めて、導かれる電子状態が超伝導の性質を示すことを見る。

# 付録 A 1 粒子系の量子力学

## A.1 角運動量代数

量子力学において角運動量は回転対称性の生成子として以下に示すような代数構造をもっている。

$$[\hat{J}^\alpha, \hat{J}^\beta] = i\hbar \sum_{\gamma=x,y,z} \epsilon_{\alpha\beta\gamma} \hat{J}^\gamma \quad (\text{A.1.1})$$

ここで、 $\alpha, \beta, \gamma = x, y, z$  であり、 $\epsilon_{\alpha\beta\gamma}$  は完全反対称テンソルで  $\epsilon_{xyz} = 1$  である。以下ではこの代数構造に基づいた一般化角運動量の数理的扱いを見る。

### A.1.1 一般化角運動量の代数

(A.1.1) から、

$$\begin{aligned} [\hat{J}^2, \hat{J}^z]_{-1} &= \sum_{\alpha=x,y,z} [(\hat{J}^\alpha)^2, \hat{J}^z]_{-1} \\ &= \sum_{\alpha=x,y,z} \left( \hat{J}^\alpha [\hat{J}^\alpha, \hat{J}^z]_{-1} + [\hat{J}^\alpha, \hat{J}^z]_{-1} \hat{J}^\alpha \right) \\ &= i\hbar \sum_{\alpha,\beta=x,y,z} \epsilon_{\alpha z \beta} (\hat{J}^\alpha \hat{J}^\beta + \hat{J}^\beta \hat{J}^\alpha) = 0 \end{aligned}$$

となり、 $\hat{J}^2, \hat{J}^z$  は同時固有状態をもつことがわかる。さらに、 $\hat{J}^\pm \equiv \hat{J}^x \pm i\hat{J}^y$  という演算子を定義すると、

$$[\hat{J}^z, \hat{J}^\pm]_{-1} = i\hbar (\hat{J}^y \mp i\hat{J}^x) = \pm\hbar \hat{J}^\pm$$

となるため、 $\hat{J}^z$  が固有値  $\hbar m$  を持つ状態  $|m\rangle$  に対して、

$$\hat{J}^z (\hat{J}^\pm |m\rangle) = \hat{J}^\pm (\hat{J}^z \pm \hbar) |m\rangle = \hbar(m \pm 1) \hat{J}^\pm |m\rangle$$

と、 $\hat{J}^\pm$  は昇降演算子の役割を果たすことがわかる。また、 $\hat{J}^2$  は  $\hat{J}^\pm$  を用いると、

$$\hat{J}^2 = \frac{1}{2} (\hat{J}^+ \hat{J}^- + \hat{J}^- \hat{J}^+) + (\hat{J}^z)^2$$

と表せる。 $\hat{J}^\pm$  同士の交換関係

$$[\hat{J}^+, \hat{J}^-]_{-1} = -2i [\hat{J}^x, \hat{J}^y]_{-1} = 2\hbar \hat{J}^z$$

とこのことを突き合わせて、 $\hat{J}^z$  の固有値が最大値  $j$  をとる固有状態  $|j\rangle$  を考えると、 $\hat{J}^+ |j\rangle = 0$  となるべきなので、

$$\hat{J}^2 |j\rangle = [(\hat{J}^z)^2 + \hbar \hat{J}^z + \hat{J}^- \hat{J}^+] |j\rangle = \hbar^2 j(j+1) |j\rangle$$



となることがわかる。 $[\hat{\mathbf{J}}^2, \hat{J}^\pm] = 0$  であること<sup>1)</sup>から、 $\hat{J}^\pm$  を作用させて移り変わることができる任意の  $\hat{J}^z$  の固有状態  $|m\rangle$  ( $m = j, j-1, \dots$ ) も  $\hat{\mathbf{J}}^2$  に対し同じ固有値を与えることがわかる。また、 $\hat{J}^z$  の固有値が最小値  $-j'$  をとる固有状態  $|-j'\rangle$  を考えると、 $\hat{J}^- |-j'\rangle = 0$  となるべきなので、

$$\hat{\mathbf{J}}^2 |-j'\rangle = [(\hat{J}^z)^2 - \hbar \hat{J}^z + \hat{J}^+ \hat{J}^-] |-j'\rangle = \hbar^2 j'(j' + 1) |-j'\rangle$$

となることがわかるから、 $\hat{\mathbf{J}}^2$  の固有値  $j(j+1)$  の固有状態は  $\hat{J}^z$  の固有値に関して  $m = -j, -j+1, \dots, j-1, j$  の  $2j+1$  重に縮退していることがわかる。また、 $j$  は整数または半整数に限られることもわかる。まとめると、 $\hat{\mathbf{J}}^2, \hat{J}^z$  の同時固有状態として、

$$\begin{aligned} \hat{\mathbf{J}}^2 |j, m\rangle &= \hbar^2 j(j+1) |j, m\rangle, \quad \hat{J}^z |j, m\rangle = \hbar m |j, m\rangle, \\ j &= 0, \frac{1}{2}, 1, \frac{3}{2}, \dots, \quad m = -j, -j+1, \dots, j \end{aligned} \quad (\text{A.1.2})$$

を満たす  $|j, m\rangle$  がとれる。また、 $\hat{J}^\pm \hat{J}^\mp = \hat{\mathbf{J}}^2 - (\hat{J}^z)^2 \pm \hbar \hat{J}^z$  から、次が成り立つ。

$$\hat{J}^\pm |j, m\rangle = \sqrt{\hbar^2 [j(j+1) - m(m \pm 1)]} |j, m \pm 1\rangle = \sqrt{\hbar^2 (j \mp m)(j \pm m + 1)} |j, m \pm 1\rangle \quad (\text{A.1.3})$$

### A.1.2 角運動量の合成

2つの系それぞれの角運動量  $\hat{\mathbf{J}}_1, \hat{\mathbf{J}}_2$  と全角運動量  $\hat{\mathbf{J}} = \hat{\mathbf{J}}_1 + \hat{\mathbf{J}}_2$  の関係を考える。全角運動量も角運動量代数を満たすべきなので、 $\hat{\mathbf{J}}_1, \hat{\mathbf{J}}_2$  に対して (A.1.2) を満たす固有状態  $|j_1, m_1\rangle, |j_2, m_2\rangle$  をとり、その合成系の状態として一般に

$$|\psi\rangle = \sum_{j_1, j_2, m_1, m_2} C_{j_1, j_2, m_1, m_2} |j_1, m_1\rangle |j_2, m_2\rangle$$

をとると、 $\hat{J}^z \equiv \hat{J}_1^z + \hat{J}_2^z$  を作用させれば、

$$\begin{aligned} \hat{J}^z |\psi\rangle &= \sum_{j_1, j_2, m_1, m_2} C_{j_1, j_2, m_1, m_2} \hat{J}^z |j_1, m_1\rangle |j_2, m_2\rangle \\ &= \sum_{j_1, j_2, m_1, m_2} C_{j_1, j_2, m_1, m_2} \hbar (m_1 + m_2) |j_1, m_1\rangle |j_2, m_2\rangle \end{aligned}$$

を得る。よって  $\hat{J}^z$  に対する固有値  $\hbar m$  の状態は、 $m = m_1 + m_2$  を満たすように線形結合をとったものになる。 $m$  としてとりうる最大値は  $m = j_1 + j_2$  のときで、その状態は、

$$|j_1 + j_2, j_1 + j_2\rangle = |j_1, j_1\rangle |j_2, j_2\rangle$$

で与えられて、これに対して  $\hat{\mathbf{J}}^2 \equiv |\hat{\mathbf{J}}_1 + \hat{\mathbf{J}}_2|^2$  を作用させると、 $\hat{J}^\pm \equiv \hat{J}_1^\pm + \hat{J}_2^\pm$  とすると、

$$\begin{aligned} \hat{\mathbf{J}}^2 |j_1 + j_2, j_1 + j_2\rangle &= [(\hat{J}^z)^2 + \hbar \hat{J}^z + \hat{J}^- \hat{J}^+] |j_1, j_1\rangle |j_2, j_2\rangle \\ &= [\hbar^2 (j_1 + j_2)^2 + \hbar^2 (j_1 + j_2)] |j_1, j_1\rangle |j_2, j_2\rangle \\ &= \hbar^2 (j_1 + j_2) (j_1 + j_2 + 1) |j_1, j_1\rangle |j_2, j_2\rangle \end{aligned}$$

1)  $[\hat{\mathbf{J}}^2, \hat{J}^z] = 0$  と同様にして  $[\hat{\mathbf{J}}^2, \hat{J}^x] = 0, [\hat{\mathbf{J}}^2, \hat{J}^y] = 0$  が導かれる。

となるため、確かにこの状態は  $\hat{\mathbf{J}}^2, \hat{J}^z$  の同時固有状態  $|j_1 + j_2, j_1 + j_2\rangle$  であることがわかる。よって、

$$\begin{aligned} |j_1 + j_2, j_1 + j_2 - 1\rangle &= \frac{1}{\sqrt{2\hbar^2(j_1 + j_2)}} (\hat{J}_1^- + \hat{J}_2^-) |j_1, j_1\rangle |j_2, j_2\rangle \\ &= \sqrt{\frac{j_1}{j_1 + j_2}} |j_1, j_1 - 1\rangle |j_2, j_2\rangle + \sqrt{\frac{j_2}{j_1 + j_2}} |j_1, j_1\rangle |j_2, j_2 - 1\rangle \end{aligned}$$

というように、 $\hat{\mathbf{J}}^2, \hat{J}^z$  の  $j = j_1 + j_2$  の固有状態を求めていくことができる。また、 $\hat{J}^z$  の固有値として二番目に大きいのが  $m = j_1 + j_2 - 1$  であり、以降 1 刻みで並んでいくことから、 $m$  の最大値となりうる  $j$  も 1 刻みで小さくなっていき、 $j = j_1 + j_2 - 1, j_1 + j_2 - 2, \dots$  というように固有値をとると考えられる。そこで、 $j = m = j_1 + j_2 - 1$  の固有状態として、

$$\begin{aligned} |j_1 + j_2 - 1, j_1 + j_2 - 1\rangle &= C_{j_1, j_2, j_1 - 1, j_2} |j_1, j_1 - 1\rangle |j_2, j_2\rangle + C_{j_1 - 1, j_2, j_1 - 1, j_2} |j_1 - 1, j_1 - 1\rangle |j_2, j_2\rangle \\ &\quad + C_{j_1, j_2, j_1, j_2 - 1} |j_1, j_1\rangle |j_2, j_2 - 1\rangle + C_{j_1, j_2 - 1, j_1, j_2 - 1} |j_1, j_1\rangle |j_2 - 1, j_2 - 1\rangle \end{aligned}$$

とおいて  $\hat{\mathbf{J}}^2$  の  $j = j_1 + j_2 - 1$  の固有状態となるように係数を定めれば、これに  $\hat{J}^-$  を作用させてすべての  $j = j_1 + j_2 - 1$  の同時固有状態  $|j_1 + j_2 - 1, m\rangle$  を求めていくことができる。 $j = |j_1 - j_2|$  の固有状態として、 $m = j_1 - j_2$  となるものは、

$$||j_1 - j_2|, j_1 - j_2\rangle = |j_1, j_1\rangle |j_2, -j_2\rangle$$

としかとれず、これ以上小さい  $j$  で同様に状態を作ることはいできない。このようにして得られる

$$\begin{aligned} |j, m\rangle &= \sum_{j_1, j_2, m_1, m_2} C_{j_1, j_2, m_1, m_2} |j_1, m_1\rangle |j_2, m_2\rangle \\ (j &= |j_1 - j_2|, \dots, j_1 + j_2, \quad m = -j, \dots, j) \end{aligned}$$

の展開係数  $C_{j_1, j_2, m_1, m_2}$  を Clebsch-Gordan 係数という。

## A.2 Bloch の定理

## A.3 Aharonov-Bohm 効果

## 付録 B 場の古典論

多体系が場を変数にもつ系に読み替えられたことに関連して、場の古典論について説明する。

### B.1 場の解析力学

場を変数にとる系の一般的な古典論として、解析力学の処方を説明する。

#### B.1.1 Lagrange 形式

実数  $n$  成分の場  $\varphi^a(t, \mathbf{x})$  ( $a = 1, 2, \dots, n$ ) を自由度にもつ系に対して、作用汎関数

$$S[\varphi] \equiv \int dt L[\varphi, \dot{\varphi}] \quad \left( L[\varphi, \dot{\varphi}] \equiv \int d^3\mathbf{x} \mathcal{L}(\varphi, \nabla\varphi, \dot{\varphi}) \right)$$

についての最小作用の原理が要請される。この積分の境界で 0 になるような  $\varphi$  の変分  $\delta\varphi$  をとると、

$$\begin{aligned} \delta(\nabla\varphi^a) &\equiv \nabla(\varphi^a + \delta\varphi^a) - \nabla\varphi^a = \nabla(\delta\varphi^a) \\ \delta\dot{\varphi}^a &\equiv \frac{\partial}{\partial t}(\varphi^a + \delta\varphi^a) - \frac{\partial\varphi^a}{\partial t} = \frac{\partial(\delta\varphi^a)}{\partial t} \end{aligned}$$

より、作用の変分が

$$\begin{aligned} \delta S &\equiv S[\varphi + \delta\varphi] - S[\varphi] \\ &= \int dt d^3\mathbf{x} \sum_{a=1}^n \left[ \frac{\partial\mathcal{L}}{\partial\varphi^a} \delta\varphi^a + \frac{\partial\mathcal{L}}{\partial(\nabla\varphi^a)} \cdot \delta(\nabla\varphi^a) + \frac{\partial\mathcal{L}}{\partial\dot{\varphi}^a} \delta\dot{\varphi}^a \right] \\ &= \int dt d^3\mathbf{x} \sum_{a=1}^n \left[ \frac{\partial\mathcal{L}}{\partial\varphi^a} - \nabla \cdot \left( \frac{\partial\mathcal{L}}{\partial(\nabla\varphi^a)} \right) - \frac{d}{dt} \left( \frac{\partial\mathcal{L}}{\partial\dot{\varphi}^a} \right) \right] \delta\varphi^a \end{aligned}$$

と表せて、任意の  $\delta\varphi$  について  $\delta S = 0$  でなければならないから、

$$\frac{\partial\mathcal{L}}{\partial\varphi^a} - \nabla \cdot \left( \frac{\partial\mathcal{L}}{\partial(\nabla\varphi^a)} \right) - \frac{d}{dt} \left( \frac{\partial\mathcal{L}}{\partial\dot{\varphi}^a} \right) = 0 \quad (a = 1, 2, \dots, n) \quad (\text{B.1.1})$$

が導かれる。ただし、

$$\frac{\partial\mathcal{L}}{\partial(\nabla\varphi^a)} = \left( \frac{\partial\mathcal{L}}{\partial(\partial_x\varphi^a)}, \frac{\partial\mathcal{L}}{\partial(\partial_y\varphi^a)}, \frac{\partial\mathcal{L}}{\partial(\partial_z\varphi^a)} \right) \quad \left( \partial_i \equiv \frac{\partial}{\partial x_i} \right)$$

である。(B.1.1) を場  $\varphi(t, \mathbf{x})$  の Euler-Lagrange 方程式といい、系が必ず満たす運動方程式となる。 $\mathcal{L}$  はラグランジアン密度という<sup>1)</sup>。本来のラグランジアン  $L$  は  $\varphi, \dot{\varphi}$  の汎関数であり<sup>2)</sup>、それぞれ

- 
- 1) 単にラグランジアンと呼ぶことも多いが、この節では呼び分ける。
  - 2)  $L$  は  $\varphi$  の全空間にわたる情報を積分により織り込むことで汎関数  $L[\varphi, \dot{\varphi}]$  となっているが、時間方向の積分は行っていないため同時に時間の関数  $L(t)$  にもなっている。よって、 $L$  は汎関数として  $\varphi$  の時間変化の情報は持たないため  $\dot{\varphi}$  が  $\varphi$  と独立な引関数となっている。

での汎関数微分 (C.5 節参照) を求めると、

$$\frac{\delta L}{\delta \varphi^a} = \frac{\partial \mathcal{L}}{\partial \varphi^a} - \nabla \cdot \left( \frac{\partial \mathcal{L}}{\partial (\nabla \varphi^a)} \right), \quad \frac{\delta L}{\delta \dot{\varphi}^a} = \frac{\partial \mathcal{L}}{\partial \dot{\varphi}^a}$$

とわかる。EL 方程式 (B.1.1) はこの汎関数微分を用いて表すなら次のようになる。

$$\frac{\delta L}{\delta \varphi^a} - \frac{d}{dt} \left( \frac{\delta L}{\delta \dot{\varphi}^a} \right) = 0 \quad (a = 1, 2, \dots, n)$$

$\mathcal{L}$  に任意の関数  $\mathcal{F}(\varphi(t, \mathbf{x}), t, \mathbf{x})$  の時間または空間の 1 階微分  $\partial_\mu \mathcal{F}$  ( $\mu = t, x, y, z$ ) を付け加えても、作用汎関数  $S[\varphi]$  には定数の差しか現れず、最小作用の原理から要請される EL 方程式は付け加える前と等価なものが得られる。この意味でラグランジアンには  $\partial_\mu \mathcal{F}$  を付け加えられる不定性が存在している。

## B.1.2 Hamilton 形式

最小作用の原理を満たす場  $\varphi^a(t, \mathbf{x})$  に対して、正準共役な運動量の場合  $\pi(t, \mathbf{x})$  を

$$\pi_a(t, \mathbf{x}) \equiv \frac{\delta L}{\delta \dot{\varphi}^a} = \frac{\partial \mathcal{L}}{\partial \dot{\varphi}^a} \quad (a = 1, 2, \dots, n)$$

で定義する。上式右辺は元々  $\varphi, \dot{\varphi}$  の汎関数微分であったが、最小作用の原理を満たす  $\varphi^a(t, \mathbf{x})$  ではこれを逆に解いて  $\dot{\varphi}$  を  $\pi_a(t, \mathbf{x}), \nabla \pi_a(t, \mathbf{x})$  ( $a = 1, 2, \dots, n$ ) の関数として表すことができる。このとき、

$$\mathcal{H}(\varphi, \pi, \nabla \pi, \nabla \varphi) \equiv \sum_{a=1}^n \pi_a \dot{\varphi}^a(\pi, \nabla \pi) - \mathcal{L}(\varphi, \nabla \varphi, \dot{\varphi}(\pi, \nabla \pi)) \quad (\text{B.1.2})$$

に対して、次が成り立つ。

$$\dot{\varphi}^a(t, \mathbf{x}) = \frac{\partial \mathcal{H}}{\partial \pi_a} - \nabla \cdot \left( \frac{\partial \mathcal{H}}{\partial (\nabla \pi_a)} \right), \quad \dot{\pi}_a(t, \mathbf{x}) = -\frac{\partial \mathcal{H}}{\partial \varphi^a} + \nabla \cdot \left( \frac{\partial \mathcal{H}}{\partial (\nabla \varphi^a)} \right) \quad (\text{B.1.3})$$

(B.1.2) を Legendre 変換といい、この変換で導入された  $\mathcal{H}(\varphi, \pi, \nabla \varphi, \nabla \pi)$  はハミルトニアン密度と呼ばれ<sup>3)</sup>、(B.1.3) はハミルトニアン密度を用いた定式化での運動方程式となっている (正準方程式と呼ばれる)。本来のハミルトニアンは

$$H[\varphi, \pi] \equiv \int d^3 \mathbf{x} \mathcal{H}(\varphi, \pi, \nabla \varphi, \nabla \pi) = \int d^3 \mathbf{x} \sum_{a=1}^n \pi_a \dot{\varphi}^a(\pi, \nabla \pi) - L[\varphi, \dot{\varphi}(\pi, \nabla \pi)]$$

で与えられ、この汎関数微分を用いると正準方程式 (B.1.3) は次のように表せる。

$$\dot{\varphi}^a(t, \mathbf{x}) = \frac{\delta H}{\delta \pi_a}, \quad \dot{\pi}_a(t, \mathbf{x}) = -\frac{\delta H}{\delta \varphi^a}$$

## B.1.3 複素場の解析力学

複素数 1 成分の場合  $\psi(t, \mathbf{x}) = \psi^1(t, \mathbf{x}) + i\psi^2(t, \mathbf{x})$  を自由度にもつ系は、実数 2 成分の場合 ( $\psi^1, \psi^2$ ) を自由度にもつ系として定式化すればよい。その結果、EL 方程式としては

$$\frac{\partial \mathcal{L}}{\partial \psi^1} - \nabla \cdot \left( \frac{\partial \mathcal{L}}{\partial (\nabla \psi^1)} \right) - \frac{d}{dt} \left( \frac{\partial \mathcal{L}}{\partial \dot{\psi}^1} \right) = 0, \quad \frac{\partial \mathcal{L}}{\partial \psi^2} - \nabla \cdot \left( \frac{\partial \mathcal{L}}{\partial (\nabla \psi^2)} \right) - \frac{d}{dt} \left( \frac{\partial \mathcal{L}}{\partial \dot{\psi}^2} \right) = 0 \quad (\text{B.1.4})$$

3) ラグランジアン密度同様、単にハミルトニアンと呼ばれることも多いが、この節では呼び分ける。

の2式が連立することになる。 $\psi = \psi^1 + i\psi^2$ ,  $\nabla\psi = \nabla\psi^1 + i\nabla\psi^2$ ,  $\dot{\psi} = \dot{\psi}^1 + i\dot{\psi}^2$  であるので、Leibniz 則から

$$\frac{\partial}{\partial\psi} = \frac{\partial\psi^1}{\partial\psi} \frac{\partial}{\partial\psi^1} + \frac{\partial\psi^2}{\partial\psi} \frac{\partial}{\partial\psi^2} = \frac{\partial}{\partial\psi^1} - i \frac{\partial}{\partial\psi^2}$$

同様に、

$$\frac{\partial}{\partial(\nabla\psi)} = \frac{\partial}{\partial(\nabla\psi^1)} - i \frac{\partial}{\partial(\nabla\psi^2)}, \quad \frac{\partial}{\partial\dot{\psi}} = \frac{\partial}{\partial\dot{\psi}^1} - i \frac{\partial}{\partial\dot{\psi}^2}$$

が成り立ち、また複素共役  $\bar{\psi} = \psi^1 - i\psi^2$  については、

$$\begin{aligned} \frac{\partial}{\partial\bar{\psi}} &= \frac{\partial\psi^1}{\partial\bar{\psi}} \frac{\partial}{\partial\psi^1} + \frac{\partial\psi^2}{\partial\bar{\psi}} \frac{\partial}{\partial\psi^2} = \frac{\partial}{\partial\psi^1} + i \frac{\partial}{\partial\psi^2} \\ \frac{\partial}{\partial(\nabla\bar{\psi})} &= \frac{\partial}{\partial(\nabla\psi^1)} + i \frac{\partial}{\partial(\nabla\psi^2)}, \quad \frac{\partial}{\partial\dot{\bar{\psi}}} = \frac{\partial}{\partial\dot{\psi}^1} + i \frac{\partial}{\partial\dot{\psi}^2} \end{aligned}$$

がまた成り立つ。これらの関係から、(B.1.4) と等価な運動方程式として

$$\frac{\partial\mathcal{L}}{\partial\psi} - \nabla \cdot \left( \frac{\partial\mathcal{L}}{\partial(\nabla\psi)} \right) - \frac{d}{dt} \left( \frac{\partial\mathcal{L}}{\partial\dot{\psi}} \right) = 0, \quad \frac{\partial\mathcal{L}}{\partial\bar{\psi}} - \nabla \cdot \left( \frac{\partial\mathcal{L}}{\partial(\nabla\bar{\psi})} \right) - \frac{d}{dt} \left( \frac{\partial\mathcal{L}}{\partial\dot{\bar{\psi}}} \right) = 0 \quad (\text{B.1.5})$$

が得られる。最小作用の原理から作用は実数値しかとれず、ラグランジアンも実数値に限られるので、

$$\left( \frac{\partial\mathcal{L}}{\partial\psi} \right)^* = \frac{\partial\mathcal{L}}{\partial\psi^1} + i \frac{\partial\mathcal{L}}{\partial\psi^2} = \frac{\partial\mathcal{L}}{\partial\bar{\psi}}$$

が導かれる。同様にして

$$\left( \frac{\partial\mathcal{L}}{\partial(\nabla\psi)} \right)^* = \frac{\partial\mathcal{L}}{\partial(\nabla\bar{\psi})}, \quad \left( \frac{\partial\mathcal{L}}{\partial\dot{\psi}} \right)^* = \frac{\partial\mathcal{L}}{\partial\dot{\bar{\psi}}}$$

も成り立つと示せるため、2式的一方は他方の複素共役であり、等価であるとわかる<sup>4)</sup>。

$\psi = \psi^1 + i\psi^2$  の実部と虚部それぞれに対する正準共役運動量の場合

$$\pi_1(t, \mathbf{x}) \equiv \frac{\partial\mathcal{L}}{\partial\dot{\psi}^1}, \quad \pi_2(t, \mathbf{x}) \equiv \frac{\partial\mathcal{L}}{\partial\dot{\psi}^2}$$

を用いて表される正準方程式

$$\begin{aligned} \dot{\psi}^1(t, \mathbf{x}) &= \frac{\partial\mathcal{H}}{\partial\pi_1} - \nabla \cdot \left( \frac{\partial\mathcal{H}}{\partial(\nabla\pi_1)} \right), & \dot{\pi}_1(t, \mathbf{x}) &= -\frac{\partial\mathcal{H}}{\partial\psi^1} + \nabla \cdot \left( \frac{\partial\mathcal{H}}{\partial(\nabla\psi^1)} \right) \\ \dot{\psi}^2(t, \mathbf{x}) &= \frac{\partial\mathcal{H}}{\partial\pi_2} - \nabla \cdot \left( \frac{\partial\mathcal{H}}{\partial(\nabla\pi_2)} \right), & \dot{\pi}_2(t, \mathbf{x}) &= -\frac{\partial\mathcal{H}}{\partial\psi^2} + \nabla \cdot \left( \frac{\partial\mathcal{H}}{\partial(\nabla\psi^2)} \right) \end{aligned}$$

からも、 $\psi, \bar{\psi}$  を用いた等価な運動方程式を得ようとする、

$$\begin{aligned} \pi(t, \mathbf{x}) &\equiv \frac{\partial\mathcal{L}}{\partial\dot{\psi}} = \frac{\partial\mathcal{L}}{\partial\dot{\psi}^1} - i \frac{\partial\mathcal{L}}{\partial\dot{\psi}^2} = \pi_1(t, \mathbf{x}) - i\pi_2(t, \mathbf{x}) \\ \bar{\pi}(t, \mathbf{x}) &\equiv \frac{\partial\mathcal{L}}{\partial\dot{\bar{\psi}}} = \frac{\partial\mathcal{L}}{\partial\dot{\psi}^1} + i \frac{\partial\mathcal{L}}{\partial\dot{\psi}^2} = \pi_1(t, \mathbf{x}) + i\pi_2(t, \mathbf{x}) \end{aligned}$$

4)  $\psi$  と  $\bar{\psi}$  の入れ替えで方程式が不変であることから  $L$  が  $\psi, \bar{\psi}$  の2次形式で表されていることもわかるが、これはラグランジアンが実数値であることと等価である。なお、 $\psi$  が Grassmann 数であった場合には  $\psi$  と  $\bar{\psi}$  の入れ替えで  $L$  の符号が反転することになるが、EL 方程式は定数倍してもよいので問題ない。

であるために<sup>5)</sup>、

$$\begin{aligned}\frac{\partial}{\partial \pi} &= \frac{\partial}{\partial \pi_1} + i \frac{\partial}{\partial \pi_2}, & \frac{\partial}{\partial (\nabla \pi)} &= \frac{\partial}{\partial (\nabla \pi_1)} + i \frac{\partial}{\partial (\nabla \pi_2)} \\ \frac{\partial}{\partial \bar{\pi}} &= \frac{\partial}{\partial \pi_1} - i \frac{\partial}{\partial \pi_2}, & \frac{\partial}{\partial (\nabla \bar{\pi})} &= \frac{\partial}{\partial (\nabla \pi_1)} - i \frac{\partial}{\partial (\nabla \pi_2)}\end{aligned}$$

となるため、

$$\begin{cases} \dot{\psi}(t, \mathbf{x}) = \frac{\partial \mathcal{H}}{\partial \bar{\pi}} - \nabla \cdot \left( \frac{\partial \mathcal{H}}{\partial (\nabla \bar{\pi})} \right), & \dot{\pi}(t, \mathbf{x}) = -\frac{\partial \mathcal{H}}{\partial \bar{\psi}} + \nabla \cdot \left( \frac{\partial \mathcal{H}}{\partial (\nabla \bar{\psi})} \right) \\ \dot{\bar{\psi}}(t, \mathbf{x}) = \frac{\partial \mathcal{H}}{\partial \pi} - \nabla \cdot \left( \frac{\partial \mathcal{H}}{\partial (\nabla \pi)} \right), & \dot{\bar{\pi}}(t, \mathbf{x}) = -\frac{\partial \mathcal{H}}{\partial \psi} + \nabla \cdot \left( \frac{\partial \mathcal{H}}{\partial (\nabla \psi)} \right) \end{cases} \quad (\text{B.1.6})$$

というふうに、 $(\psi, \pi)/(\bar{\psi}, \bar{\pi})$ ではなく、 $(\psi, \bar{\pi})/(\bar{\psi}, \pi)$ という組み合わせの表現になることがわかる。ハミルトニアンもまた必ず実数値をとるので、

$$\left( \frac{\partial \mathcal{H}}{\partial \psi} \right)^* = \frac{\partial \mathcal{H}}{\partial \psi^1} - i \frac{\partial \mathcal{H}}{\partial \psi^2} = \frac{\partial \mathcal{H}}{\partial \bar{\psi}}, \quad \left( \frac{\partial \mathcal{H}}{\partial \bar{\pi}} \right)^* = \frac{\partial \mathcal{H}}{\partial \pi_1} - i \frac{\partial \mathcal{H}}{\partial \pi_2} = \frac{\partial \mathcal{H}}{\partial \pi}$$

同様にして、

$$\left( \frac{\partial \mathcal{H}}{\partial (\nabla \psi)} \right)^* = \frac{\partial \mathcal{H}}{\partial (\nabla \bar{\psi})}, \quad \left( \frac{\partial \mathcal{H}}{\partial \bar{\pi}} \right)^* = \frac{\partial \mathcal{H}}{\partial (\nabla \pi)}$$

が導かれる。よって、(B.1.6)のうち、 $(\psi, \bar{\pi})$ の組の2式は両辺複素共役をとることで $(\bar{\psi}, \pi)$ の組の2式に帰着する。加えて、正準方程式 (B.1.6) と EL 方程式 (B.1.5) は等価であるが、

$$\frac{\partial \mathcal{H}}{\partial \psi} = -\frac{\partial \mathcal{L}}{\partial \psi}, \quad \frac{\partial \mathcal{H}}{\partial (\nabla \psi)} = -\frac{\partial \mathcal{L}}{\partial (\nabla \psi)}$$

から、

$$\dot{\pi} = -\frac{\partial \mathcal{H}}{\partial \bar{\psi}} + \nabla \cdot \left( \frac{\partial \mathcal{H}}{\partial (\nabla \bar{\psi})} \right) \iff \frac{\partial \mathcal{L}}{\partial \bar{\psi}} - \nabla \cdot \left( \frac{\partial \mathcal{L}}{\partial (\nabla \bar{\psi})} \right) - \frac{d}{dt} \left( \frac{\partial \mathcal{L}}{\partial \dot{\bar{\psi}}} \right) = 0$$

であることは容易にわかる。よって、正準方程式側で残る1式

$$\dot{\bar{\psi}} = \frac{\partial \mathcal{H}}{\partial \pi} - \nabla \cdot \left( \frac{\partial \mathcal{H}}{\partial (\nabla \pi)} \right)$$

は、本来2本連立する EL 方程式が互いに複素共役の関係となって等価だったように、正準方程式側のもう一方の式とも等価であることになる。符号の差異を考えるとこれは  $\pi = i\alpha \bar{\psi}$  であることを示している ( $\alpha$  は実定数で、 $\psi$  の規格化条件で決まる)。

## B.1.4 Noether カレント

ある座標変換  $(t, \mathbf{x}) \rightarrow (t', \mathbf{x}')$  および場の変換  $\varphi(t, \mathbf{x}) \rightarrow \varphi'(t', \mathbf{x}')$  に対して系の作用汎関数が不変に保たれるとき、系はその変換に対して対称性をもつという。変換が連続的に行えるものであれば、微小量  $\epsilon \ll 1$  を用いた無限小変換

$$x_i \longrightarrow x'_i(\epsilon) = x_i + \epsilon X_i(x), \quad \varphi(x_i) \longrightarrow \varphi(x'_i) + \epsilon \delta \varphi(x'_i)$$

5)  $\bar{\pi}$  は定義の時点 (1 番目の等号) では  $\pi$  の複素共役とは限らない。あくまで  $\bar{\psi}$  の正準共役な運動量の場であることを表すために先にこのように表記したに過ぎない。

が変換の集合全体を定める ( $x_0 = t, x_1 = x, x_2 = y, x_3 = z$ ) ので、この変換が対称性の性質を決めることになる。この変換は同時刻・同地点での  $\varphi$  の変換として

$$\varphi \longrightarrow \varphi + \varepsilon \left( \delta\varphi - \sum_i X_i \frac{\partial\varphi}{\partial x_i} \right)$$

というように表し直せるので、この表式を用いて変換前後の作用の差  $\delta S$  を計算すると、

$$\delta S = \varepsilon \int dt d^3\mathbf{x} \sum_i \frac{d}{dx_i} \left[ \sum_a \frac{\partial \mathcal{L}}{\partial(\partial_i \varphi^a)} \left( \delta\varphi^a - \sum_j X_j \frac{\partial\varphi^a}{\partial x_j} \right) + \mathcal{L} X_i \right]$$

で与えられる。これが任意の  $\varepsilon$  について 0 となることから、

$$\mathcal{J}_i(t, \mathbf{x}) \equiv \sum_j \left[ \sum_a \frac{\partial \mathcal{L}}{\partial(\partial_i \varphi^a)} \partial_j \varphi^a - \delta_{ij} \mathcal{L} \right] X_j - \sum_a \frac{\partial \mathcal{L}}{\partial(\partial_i \varphi^a)} \delta\varphi^a$$

について、

$$\sum_i \partial_i \mathcal{J}_i = 0$$

という連続の方程式が成り立つことがわかる。 $\mathcal{J}_i(t, \mathbf{x})$  を Noether カレントという。

粒子系において、時空の並進対称性からはエネルギー・運動量が保存量として得られていた。このため、時空の並進対称性から導かれる Noether カレントは場を変数にとる系のエネルギー・運動量に対応するものである。 $x_j$  成分での無限小並進変換

$$x_i \longrightarrow x'_i(\varepsilon) = x_i + \varepsilon \delta_{ij}$$

から導かれる Noether カレント

$$T_{ij}(t, \mathbf{x}) \equiv \sum_a \frac{\partial \mathcal{L}}{\partial(\partial_i \varphi^a)} \partial_j \varphi^a - \delta_{ij} \mathcal{L}$$

をエネルギー・運動量テンソルといい、保存則は

$$\sum_i \partial_i T_{ij} = 0$$

と表される。各時空成分での微分の物理的意味を考えると、 $T_{ij}(t, \mathbf{x})$  の各成分が次のように解釈できるとわかる。

$$\left\{ \begin{array}{l} T_{00} = \sum_a \frac{\partial \mathcal{L}}{\partial \dot{\varphi}^a} \dot{\varphi}^a - \mathcal{L} : \text{エネルギー密度} \\ T_{i0} = \sum_a \frac{\partial \mathcal{L}}{\partial(\partial_i \varphi^a)} \dot{\varphi}^a \ (i \neq 0) : \text{エネルギー流束の } x_i \text{ 成分} \\ T_{0j} = \sum_a \frac{\partial \mathcal{L}}{\partial \dot{\varphi}^a} \partial_j \varphi^a \ (j \neq 0) : \text{単位体積あたりの運動量の } x_j \text{ 成分} \\ T_{ij} \ (i, j \neq 0) : \text{単位体積あたりの運動量の } x_j \text{ 成分における } x_i \text{ 方向への移行} \end{array} \right.$$

特に  $T_{00}$  はハミルトニアン密度  $\mathcal{H}$  に一致するため、粒子系でエネルギーがハミルトニアンで与えられることと確かに符合している。

同様に、粒子系においては空間回転対称性から角運動量が保存量として得られていたから、空間回転対称性から導かれる Noether カレントは場を変数にとる系の角運動量に対応すると考えられる。 $x_j$  ( $j \neq 0$ ) 軸周りでの無限小回転変換

$$x_i \longrightarrow x'_i(\theta) = x_i + \sum_{k=1,2,3} \epsilon_{ijk} \theta x_k$$

( $\epsilon_{ijk}$  は完全反対称テンソル、 $\epsilon_{123} = 1$ )

から導かれる Noether カレントは

$$\begin{aligned} \mathcal{J}_{ij}(t, \mathbf{x}) &= \sum_{k,l=1,2,3} \epsilon_{jkl} x_k \left[ \sum_a \frac{\partial \mathcal{L}}{\partial (\partial_i \varphi^a)} \partial_l \varphi^a - \delta_{il} \mathcal{L} \right] \\ &= \sum_a \frac{\partial \mathcal{L}}{\partial (\partial_i \varphi^a)} (\mathbf{x} \times \nabla \varphi^a)_j - \mathcal{L} \sum_{k=1,2,3} \epsilon_{ijk} x_k \end{aligned}$$

で与えられ、その保存則は

$$\sum_i \partial_i \mathcal{J}_{ij} = 0$$

と表される。各時空成分での微分の物理的意味を考えると、 $\mathcal{J}_{ij}(t, \mathbf{x})$  の各成分は次のように解釈される。

$$\begin{cases} \mathcal{J}_{0j} = \sum_a \frac{\partial \mathcal{L}}{\partial \dot{\varphi}^a} (\mathbf{x} \times \nabla \varphi^a)_j : \text{単位体積あたりの角運動量の } x_j \text{ 成分} \\ \mathcal{J}_{ij} (i \neq 0) : \text{単位体積あたりの角運動量の } x_j \text{ 成分における } x_i \text{ 方向への移行} \end{cases}$$

## B.2 相対論的な場とその非相対論極限

相対論的な系とは、4 次元時空  $x^\mu = (ct, x, y, z)$  に対して

$$\eta_{\rho\sigma} \Lambda^\rho{}_\mu \Lambda^\sigma{}_\nu = \eta_{\mu\nu} \quad (\eta = \text{diag}(-1, 1, 1, 1))$$

で定まる (1,1)-階テンソル  $\Lambda^\mu{}_\nu$  で与えられる変換  $x'^\mu = \Lambda^\mu{}_\nu x^\nu$  に対して対称性をもつような系である。ここで、添字の上下は  $(n, m)$  階テンソル  $T^{\mu_1 \mu_2 \dots \mu_n}{}_{\nu_1 \nu_2 \dots \nu_m}$  に対して

$$\begin{aligned} T^{\mu_1 \dots \mu_{i-1}}{}_{\mu_i}{}^{\mu_{i+1} \dots \mu_n}{}_{\nu_1 \dots \nu_n} &\equiv \eta_{\mu_i \rho} T^{\mu_1, \dots, \mu_{i-1} \rho \mu_{i+1} \mu_n}{}_{\nu_1 \dots \nu_n}, \\ T^{\mu_1 \dots \mu_n}{}_{\nu_1 \dots \nu_{i-1}}{}^{\nu_i}{}_{\nu_{i+1} \dots \nu_n} &\equiv \eta^{\nu_i \rho} T^{\mu_1, \dots, \mu_n}{}_{\nu_1 \dots \nu_{i-1} \rho \nu_{i+1} \nu_n} \end{aligned}$$

となるように定義されている。

$$x^\mu x_\mu = \eta_{\mu\nu} x^\mu x^\nu = -(ct)^2 + x^2 + y^2 + z^2$$

を必ず保存するこの変換は Lorentz 変換と呼ばれ<sup>6)</sup>、空間回転に加えて Lorentz ブーストと呼ばれる時間と空間を混合する変換およびこれらの組み合わせからなる。例えば、

$$\begin{pmatrix} ct' \\ x' \\ y' \\ z' \end{pmatrix} = \frac{1}{\sqrt{1-\beta^2}} \begin{pmatrix} 1 & -\beta & & \\ -\beta & 1 & & \\ & & 1 & \\ & & & 1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} ct \\ x \\ y \\ z \end{pmatrix} \quad \left( \beta = \frac{v}{c} \right)$$

6) 一般には  $\text{SO}(1, 3)$  変換と呼ばれる。



という変換は Lorentz ブースト変換の代表例である。Lorentz ブースト変換は  $v \ll c$  の極限で Galilei 変換に一致するため、Lorentz 対称性は Galilei 対称性を高エネルギー系に拡張したものになっていて、物理的な系は必ず Lorentz 対称性を満たす。本節では Lorentz 対称性を満たすことが知られている系を 3 つ挙げる。

非相対論極限で考えていた 1 章では、Fermi/Bose 粒子のどちらの多体系であるかによらず、系のハミルトニアンが

$$\mathcal{H} = -\frac{\hbar^2}{2m} \sum_{\sigma=-s}^s \bar{\Psi}_{\sigma}(t, \mathbf{x}) \nabla^2 \Psi_{\sigma}(t, \mathbf{x})$$

で与えられることをみた。本節ではこのことが相対論的な場の古典論において非相対論極限をとることで (より正確な形で) 導出されることも見る。

### B.2.1 Klein-Gordon 場

### B.2.2 Dirac 場

### B.2.3 電磁場

## B.3 ゲージ理論

振幅に関係する量のみが物理量を与える複素場においては、その位相成分 (ゲージという) に不定性がある。実際、粒子数保存則には 1 成分複素場の座標  $(t, \mathbf{x})$  に依存しない大局的なゲージ変換に対する対称性が対応していたのだった。このゲージ不定性を局所的なゲージ変換

$$\psi(t, \mathbf{x}) \longrightarrow \psi'(t, \mathbf{x}) = e^{i\alpha(t, \mathbf{x})/\hbar} \psi(t, \mathbf{x})$$

に対する対称性にも適用することを考える。

自由 Schrödinger 場に対して局所ゲージ変換を施すと、

$$\begin{aligned} \mathcal{L}_{\text{Sch}} &\longrightarrow \mathcal{L}'_{\text{Sch}} \equiv i\hbar \bar{\Psi}'(t, \mathbf{x}) \dot{\Psi}'(t, \mathbf{x}) + \frac{\hbar^2}{2m} \bar{\Psi}'(t, \mathbf{x}) \nabla^2 \Psi'(t, \mathbf{x}) \\ &= \mathcal{L}_{\text{Sch}} - \left[ \dot{\alpha} + \frac{1}{2m} (|\nabla \alpha|^2 - i\hbar \nabla^2 \alpha) \right] \bar{\Psi} \Psi + \frac{i\hbar}{m} \bar{\Psi} (\nabla \alpha \cdot \nabla \Psi) \end{aligned}$$

となり、一般に局所ゲージ対称性が満たされないことがわかる。しかし、同じ  $\alpha(t, \mathbf{x})$  に対して

$$\varphi(t, \mathbf{x}) \longrightarrow \varphi'(t, \mathbf{x}) = \varphi(t, \mathbf{x}) - \frac{1}{e} \dot{\alpha}(t, \mathbf{x}), \quad \mathbf{A}(t, \mathbf{x}) \longrightarrow \mathbf{A}'(t, \mathbf{x}) = \mathbf{A}(t, \mathbf{x}) + \frac{1}{e} \nabla \alpha(t, \mathbf{x})$$

と変換するような場を用いて、

$$i\hbar \frac{\partial}{\partial t} \longrightarrow i\hbar \frac{\partial}{\partial t} - e\varphi(t, \mathbf{x}), \quad i\hbar \nabla \longrightarrow i\hbar \nabla + e\mathbf{A}(t, \mathbf{x})$$

と置き換えたラグランジアン

$$\mathcal{L} = \bar{\Psi}(t, \mathbf{x}) \left[ i\hbar \frac{\partial}{\partial t} + e\varphi(t, \mathbf{x}) - \frac{1}{2m} |i\hbar \nabla + e\mathbf{A}(t, \mathbf{x})|^2 \right] \Psi(t, \mathbf{x})$$

は、局所ゲージ変換のもとで  $\Psi$  と  $\varphi, \mathbf{A}$  それぞれで生じる変化分がちょうど打ち消し合い、不変に保たれる。この結果を逆に用いて、局所ゲージ対称性の帰結としてゲージ場  $A_\mu = (\varphi, \mathbf{A})$  を導入し、さらにそれらとの相互作用を定めるのがゲージ原理である。実ベクトル場であるゲージ場に Lorentz 対称性を課すと自由ゲージ場のラグランジアンを得ることができるが、 $A_\mu A^\mu = \varphi^2 - |\mathbf{A}|^2$  はゲージ不変でないため、 $m = 0$  としなければならない (B.2.3 項参照)。このような場は電磁場に限らない。

## B.4 物質中の電磁場

## B.5 Ginzburg-Landau 理論

Ginzburg-Landau 理論は、場を自由度にもつ系について、系の対称性から自由エネルギーの表式を秩序変数による展開で仮定する熱力学の理論である。系のハミルトニアンから統計力学的に GL 理論を導出するには、秩序変数を与える微視的変数に拘束条件を加えた上で分配関数の計算を行う。

## 付録 C 数学の補足

定式化に伴う純粋数学的な事項について、必要最小限をまとめて以下に示す。

### C.1 複素解析の基礎

### C.2 Fourier 変換

#### C.2.1 Fourier 級数展開

$f(x)$  が周期  $2L$  の周期関数  $f(x+2L) = f(x)$  であるとき、次の Fourier 級数展開が可能である。

$$f(x) = \frac{a_0}{2} + \sum_{n=1}^{\infty} \left( a_n \cos \frac{n\pi x}{L} + b_n \sin \frac{n\pi x}{L} \right)$$

ここで、 $a_n, b_n$  は次の積分で定義される。

$$a_n = \frac{1}{L} \int_{-L}^L f(x) \cos \frac{n\pi x}{L} dx, \quad b_n = \frac{1}{L} \int_{-L}^L f(x) \sin \frac{n\pi x}{L} dx$$

Euler の公式  $e^{i\theta} = \cos \theta + i \sin \theta$  を用いれば、この展開は次のようにまとめられる。

$$f(x) = \sum_{n=-\infty}^{\infty} c_n e^{in\pi x/L}, \quad c_n = \frac{1}{2L} \int_{-L}^L f(x) e^{-in\pi x/L} dx \quad (\text{C.2.1})$$

#### C.2.2 Fourier 変換

(C.2.1) について、 $L \rightarrow \infty$  として  $n\pi/L$  を連続変数  $k$  にする極限操作を考えると、

$$\tilde{c}_n = \int_{-L}^L f(x) e^{-in\pi x/L} dx, \quad f(x) = \frac{1}{2L} \sum_{n=-\infty}^{\infty} \tilde{c}_n e^{in\pi x/L}$$

であるから、連続極限において

$$\frac{1}{L} \sum_{n=-\infty}^{\infty} \longrightarrow \frac{1}{2\pi} \int_{-\infty}^{\infty} dk$$

と無限和が積分に置き換えて、 $\tilde{c}_n$  を連続関数  $\tilde{f}(k)$  と置きなおすと、

$$\tilde{f}(k) = \int_{-\infty}^{\infty} f(x) e^{-ikx} dx, \quad f(x) = \frac{1}{2\pi} \int_{-\infty}^{\infty} \tilde{f}(k) e^{-ikx} dk$$

が成り立つとわかる。前者を Fourier 変換、後者を Fourier 逆変換という。

デルタ関数  $\delta(x)$  は次で定義され、厳密には関数ではなく超関数である。

$$f(a) \equiv \int_{-\infty}^{\infty} f(x) \delta(x-a) dx$$

特に、 $f(x) = e^{-ikx}$ ,  $a = 0$  であるときには、

$$\int_{-\infty}^{\infty} \delta(x) e^{-ikx} dx = 1$$

である。これを  $\delta(x)$  の Fourier 変換とみなすと、その Fourier 逆変換から、

$$\delta(x) = \frac{1}{2\pi} \int_{-\infty}^{\infty} e^{ikx} dk$$

が成り立つことがわかる。

### C.2.3 離散 Fourier 変換

次の成分  $U_{nm}$  をもつ  $N$  次正方形行列  $U$  はユニタリ行列である。

$$U_{nm} = \frac{1}{\sqrt{N}} e^{-i(2\pi nm/N)}$$

実際、 $U^\dagger U$  を各成分ごとに計算してみると、

$$\begin{aligned} \sum_{l=1}^N U_{ln}^* U_{lm} &= \frac{1}{N} \sum_{l=1}^N e^{i\frac{2\pi l}{N}(n-m)} \\ &= \begin{cases} \frac{1}{N} \frac{1 - e^{2\pi i(n-m)}}{1 - e^{i\frac{2\pi}{N}(n-m)}} & (n-m \neq 0) \\ 1 & (n-m = 0) \end{cases} \\ &= \delta_{nm} \end{aligned}$$

となるため、 $U^\dagger U = I$  である。

$N$  次元複素ベクトル  $\mathbf{f} = (f_1, f_2, \dots, f_N) \in \mathbb{C}^N$  に対して、 $\tilde{\mathbf{f}} \equiv U\mathbf{f}$  の各成分は

$$\tilde{f}_n = \sum_{m=1}^N U_{nm} f_m = \frac{1}{\sqrt{N}} \sum_{m=1}^N f_m e^{-i(2\pi nm/N)} \quad (\text{C.2.2})$$

で与えられる。また、 $U$  がユニタリ演算子であることから  $\mathbf{f} = U^\dagger \tilde{\mathbf{f}}$  であるので、

$$f_m = \sum_{n=1}^N U_{mn}^* \tilde{f}_n = \frac{1}{\sqrt{N}} \sum_{n=1}^N \tilde{f}_n e^{i(2\pi mn/N)} \quad (\text{C.2.3})$$

が成り立つとわかる。

ここで、 $x = (2L/N)m$  を連続変数にとって  $f_m \rightarrow f(x)$  とする極限を考えると、和は積分に置き換わり、

$$\frac{\tilde{f}_n}{\sqrt{N}} = \frac{1}{N} \sum_{m=1}^N f_m e^{-i(2\pi nm/N)} \longrightarrow \frac{1}{2L} \int_0^{2L} f(x) e^{-in\pi x/L} dx$$

で Fourier 級数展開の成分  $\tilde{c}_n$  を与える表式になる。(C.2.3) は  $e^{-i\frac{2\pi mn}{N}}$  の  $n = 1, 2, \dots, N$  での周期性から、 $N$  が偶数なら  $N/2$ 、奇数なら  $(N-1)/2$  だけ和をとる添え字をずらしてもよいので、

$$f_m \rightarrow f(x) = \sum_{n=-\infty}^{\infty} \frac{\tilde{f}_n}{\sqrt{N}} e^{in\pi x/L}$$

が成り立つ。 $\tilde{c}_n = \tilde{f}_n/\sqrt{N}$  であることからこれは Fourier 級数展開 (C.2.1) そのものである。また、前節で見たようにここから  $L \rightarrow \infty$  とする極限をとれば Fourier 変換に帰着する。ベクトルからベクトルに変換する点が、関数から関数への変換である Fourier 変換と形式的に似ているため、(C.2.2) は離散 Fourier 変換、(C.2.3) は離散 Fourier 逆変換という。

### C.3 Baker-Campbell-Hausdorff の公式・Trotter 積公式

任意の演算子  $\hat{A}, \hat{B}$  に対して、次の関数  $f(t)$  を定義する。

$$f(t) \equiv e^{t\hat{A}}\hat{B}e^{-t\hat{A}} \equiv \left[ \sum_{n=0}^{\infty} \frac{1}{n!} (t\hat{A})^n \right] \hat{B} \left[ \sum_{n=0}^{\infty} \frac{1}{n!} (-t\hat{A})^n \right]$$

$t$  に対して微分すると、

$$f^{(1)}(t) = e^{t\hat{A}} [\hat{A}, \hat{B}] e^{-t\hat{A}}, \quad f^{(2)}(t) = e^{t\hat{A}} [\hat{A}, [\hat{A}, \hat{B}]] e^{-t\hat{A}}, \quad f^{(3)}(t) = e^{t\hat{A}} [\hat{A}, [\hat{A}, [\hat{A}, \hat{B}]]] e^{-t\hat{A}}, \dots$$

となるため、 $f(t)$  の  $t=0$  周りでの Taylor 展開を考えると、

$$e^{t\hat{A}}\hat{B}e^{-t\hat{A}} = \hat{B} + t [\hat{A}, \hat{B}] + \frac{t^2}{2!} [\hat{A}, [\hat{A}, \hat{B}]] + \frac{t^3}{3!} [\hat{A}, [\hat{A}, [\hat{A}, \hat{B}]]] + \dots$$

となることがわかる。この展開で、特に  $t=1$  としたものを Baker-Campbell-Hausdorff の公式という。

### C.4 多様体・トポロジーの基礎

### C.5 キュムラント展開

### C.6 特異値分解

### C.7 汎関数解析

## 参考文献

- [1] A. Altland, B. Simons. Condensed Matter Field Theory. 2nd ed., Cambridge University Press, 2010.
- [2] R.P. Feynman. Statistical Mechanics: A Set Of Lectures. CRC Press, 1998.
- [3] D. Vanderbilt. Berry Phases in Electronic Structure Theory. Cambridge University Press, 2018.
- [4] P. Phillips. Advanced Solid State Physics. 2nd ed., Cambridge University Press, 2012.
- [5] 阿部龍蔵. 統計力学 (第2版). 東京大学出版, 1992.
- [6] 井田大輔. 現代解析力学入門. 朝倉書店, 2020.
- [7] 江藤幹雄. 量子力学 I. 丸善出版, 2013.
- [8] 川村嘉春. 基礎物理から理解するゲージ理論 (臨時別冊・数理科学 SGC ライブラリ 138). サイエンス社, 2017.

- [9] 坂井典佑. 場の量子論. 裳華房, 2007.
- [10] 清水明. 統計力学特論・量子力学特論. 東大相関基礎科学系・統合自然科学科, 2016. 板書：  
[https://as2.c.u-tokyo.ac.jp/lecture\\_note/qsm2016/](https://as2.c.u-tokyo.ac.jp/lecture_note/qsm2016/) (2024-04-08 参照)
- [11] 清水明. 非平衡熱統計力学・量子力学特論. 東大相関基礎科学系・統合自然科学科, 2017. 板書：  
[https://as2.c.u-tokyo.ac.jp/lecture\\_note/noneq2017/](https://as2.c.u-tokyo.ac.jp/lecture_note/noneq2017/) (2024-04-08 参照)
- [12] 高橋和孝, 西森秀稔. 相転移・臨界現象とくりこみ群. 丸善出版, 2017.
- [13] 田崎晴明. 統計力学 I, II. 培風館, 2008.
- [14] 永長直人. 物性論における場の量子論. 岩波書店, 2014.